

370.4
KA91
⑦



0040623000

1

0040623-000

370.4-Ka91ウ

教壇

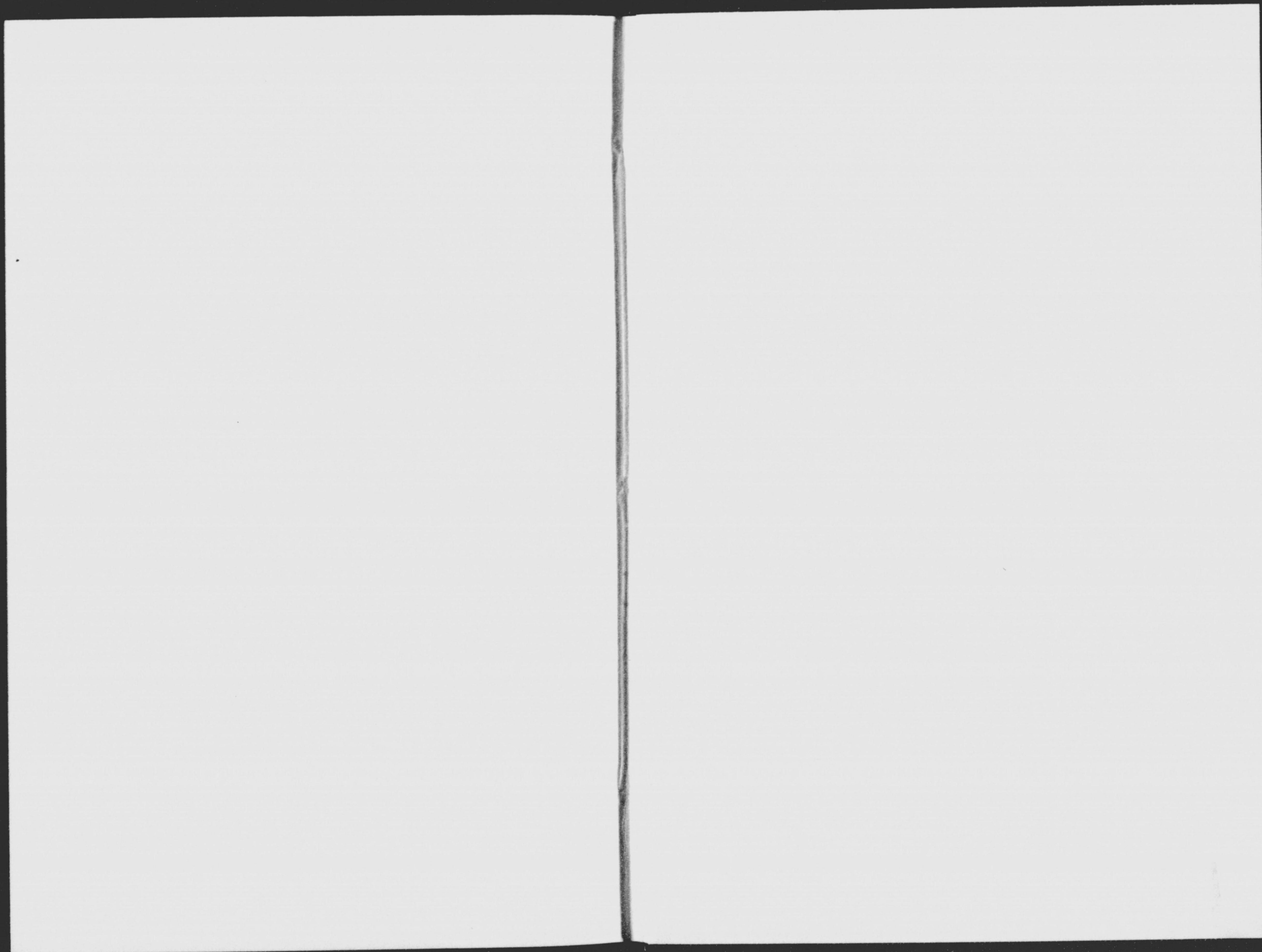
河内いね・著

清水書房

昭和16

AHA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

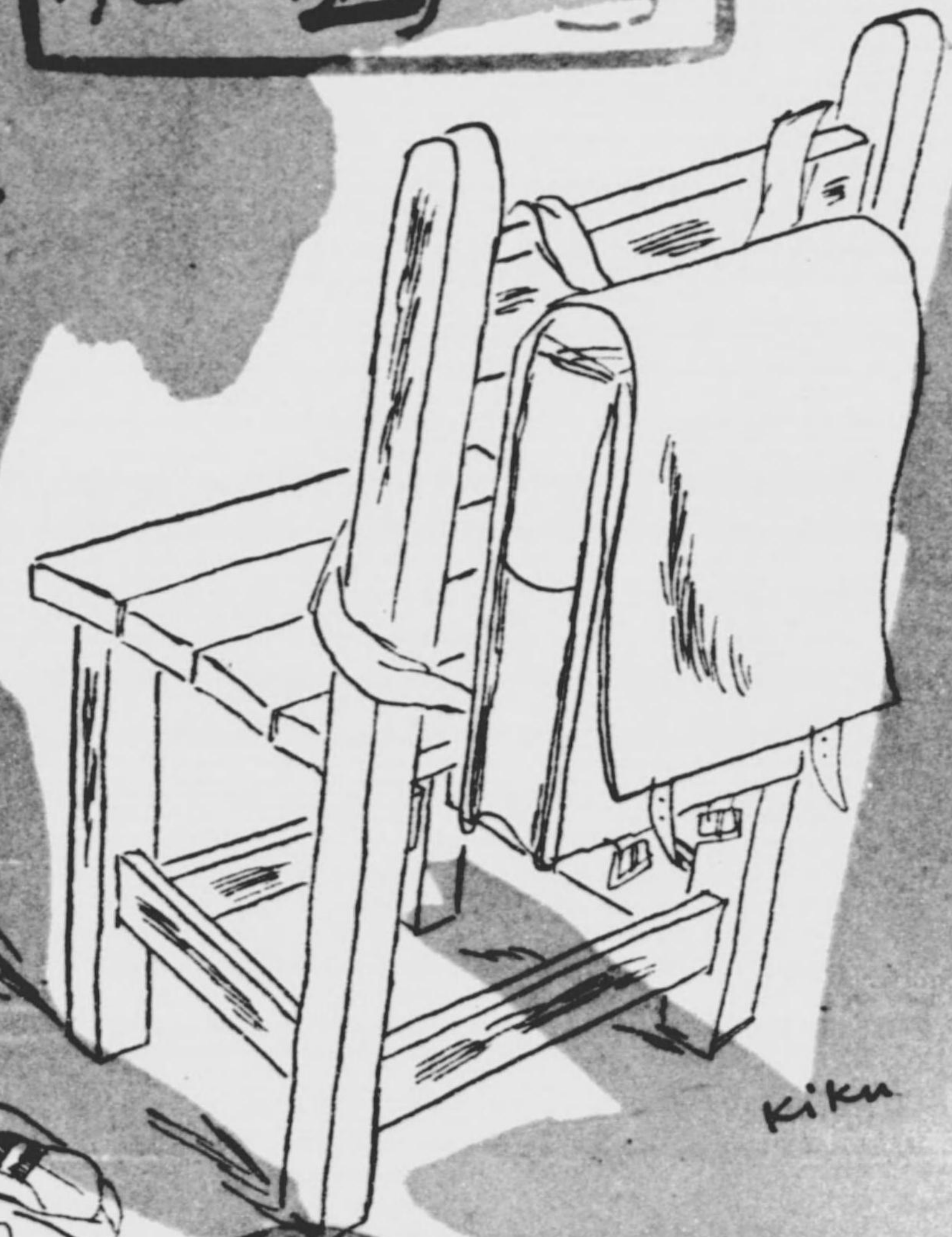


1145-31

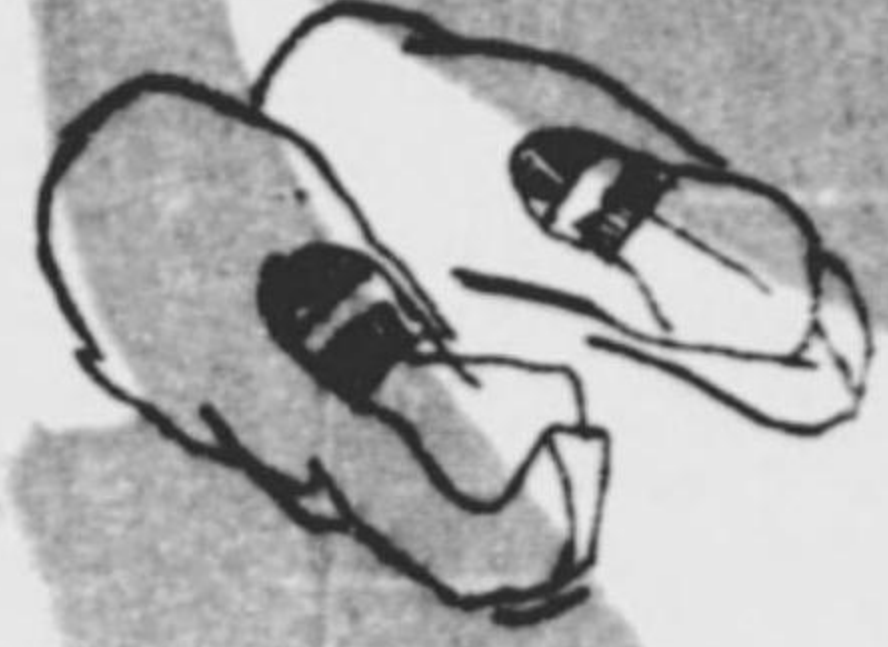
3704
KA91



河内いね著



Kiku



發行所寄贈本

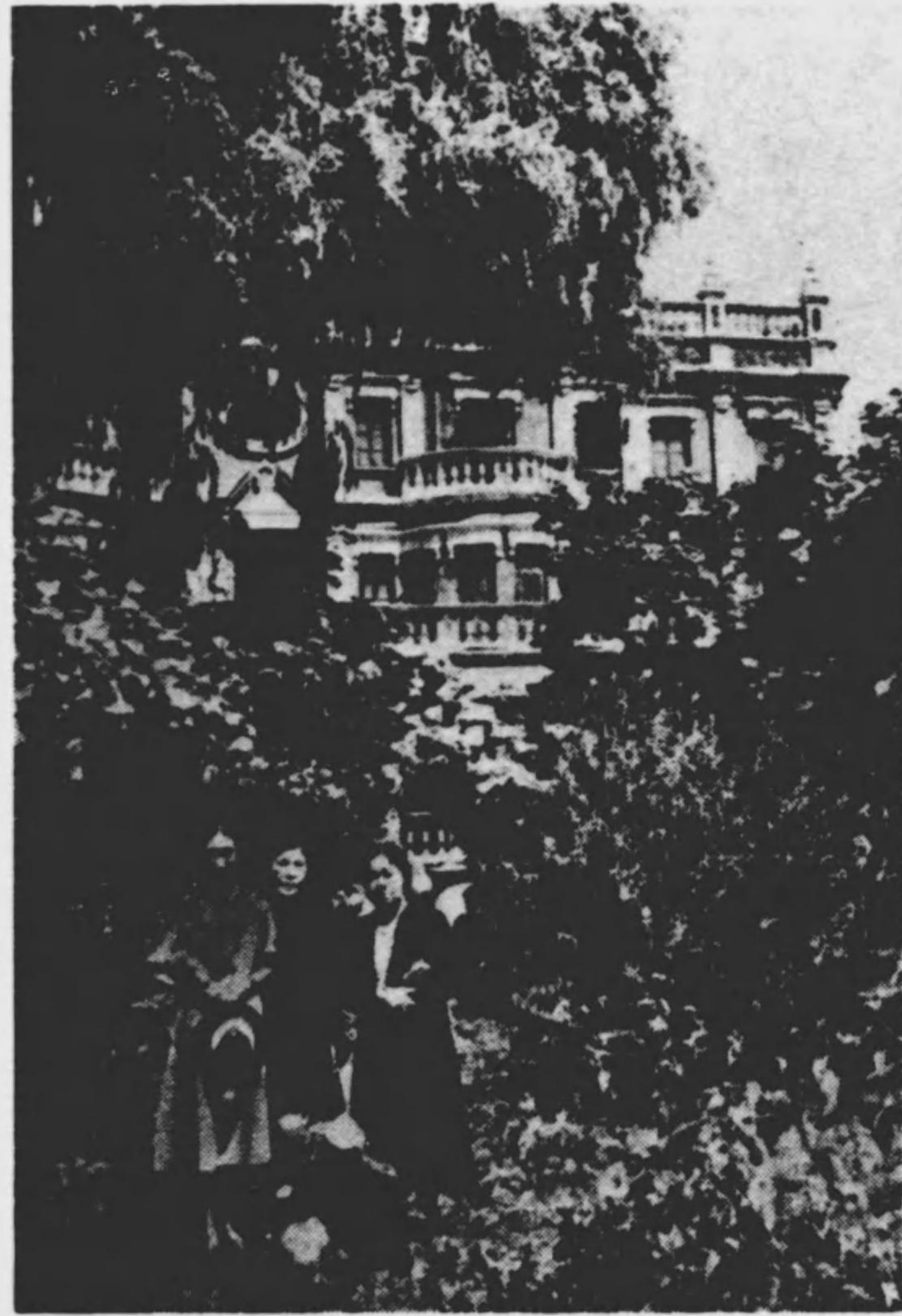


影 近 者 著

919
91

序

河内いね女史は鹿兒島縣種子島の人、夙に縣師範學校に學び、業を卒へて教壇に立つこと前後三十有六年、前には縣内小學校殊に男子師範附屬小學校に教鞭を執ること通じて十五年、後には志を立てて上京し、京橋高等小學校に職を奉ずること二十年の久しきに及んだ。其の間、日本大學夜間部に學びて業を成し、又汎太平洋婦人會議に列しアメリカの教育を視察し得る所が多かつた。而して母思ひの女史は傾く家運を母一人に委するに忍びず、遂に家の爲めに獨身生活を續けた。頃日自己の踏み來つた跡を追想して其の經歷を叙し「生ひ立ち」と名づけ上梓せんとして序文を求められた。就いて之を見るに種子島の誇りより筆を起し、自己の



滿洲視察途上、奉天の國立圖書館前の著者（中央）



汎太平洋婦人會議に出席中布哇在住者と木曜午餐會の時の著者（前列向つて左より二人目）

家と自己の教養に關することを述べ、終りに教壇人として多年の經驗により體得せる所を擧げて、其の經營と所見所思とを縷述した。叙事詳密、文章流暢、構想も能く、思考も精緻で着眼亦見るべきものがある。殊に教師として女史の烈々燃ゆるが如き教育愛と其の純眞にして不拔なる教育精神とは筆端に迸つて躍如としてゐる。讀者は之に依つて啓發裨補せられる所が多からうと思ふ。肯へて世の教育者又は教育者たらんとする諸君、並に世の父兄母姉たる方々の一讀あらんことを希望し以て序とする。

昭和十六年六月

永田秀次郎

はしがき

私の過去から學童の教育といふ事を取り去つたら、一體何が残るでせう。十九の春師範を出て、此の道に第一步を印してから、顧みれば三十有六年の歳月が夢の間に過ぎてしまひました。思へば私の一生は只一筋に歩み續けた教育の旅路でした。

青春の夢も情熱も何もかも教壇の上に燃やしつくしてしまひました。

大氣を呼吸し御飯を頂いて私の肉體は生き續けてまゐりました。それと同じに私の魂は教壇によつて生き續けて來たのでした。

教ふると云ふ事は自らが學ぶ事でした。之れは私の過去を貫いた不動の信念でした。

人一倍不敏に生れついてゐる私に、學ぶと云ふ事がなかつたら一體どんな

教育者が出来上つた事でせう。

常に私はあらゆる対象を、あらゆる機会を修養の道場と心得て、己が生命の根本を培ふことにつとめてまゐりました。その意味で、過去に於て私の心に肉體にふれた限りのものは悉く私の育て親として感謝を捧げねばならぬものばかりです。

教育と云ふたつた一つの目をもつて見ても、三十餘年の長き歲月には随分と大きな變化がありました。而し今日といふ今日、否今後は更に――教育者の双肩に大きな重責が課せられてゐる事を思ふと居ても立つても居られない心地が致します。

私が自分の不敏をも顧みず、寸陰を惜しんで執筆した本書を世に送らうとする微衷を汲んで頂けるかと存じます。

人の運命ほど不可思議なものはありません。本書執筆中には豫想だにしな

かつた一つの運命に或る宿命的な意義を感じて、私の教育事業は幾分方向を轉ずる事となりましたので、今日までの長い――教壇生活は最後の幕を閉ぢ様としてゐます。

諸先生の熱心なお勧めと書房の懇請とによつて執筆を決し、何とか出版と云ふ處まで漕ぎつけたと思ふ時、それが計らずも、初等教育界への置き土産とならうとは、そこには解き難き神秘が籠められてゐる様に思はれて、何かひし／＼と胸に迫るものが御座います。

大きな信頼と愛の瞳みを送つてくれた教へ子達へ、不敏の私を友の一人に加へて、長い年月睦親しみ教へ導いて下さつた教育社會の同僚方へ、肉體に魂に數々の大きな恵みを與へて下さつた社會の人々へ、只一つ私の報恩の贈り物として本書を捧げたいと存じます。

昭和十六年六月十六日

著者しるす

目次

序

永田秀次郎

はしがき

生ひ立ち

洋上の小島なれど……………一
 険に浮ぶ父と母……………八
 はらから……………一五
 祖母の教へ……………二〇
 恩師の面影……………二四
 師範に入學……………三〇
 寄宿舎生活……………三三

父の死……………四〇
 その頃の師範教育……………四三

縣教育十五年

新任學校……………五三
 誘惑……………六〇
 恵まれた母校時代……………六四
 結婚を捨て、教壇へ……………七五
 優良學校へ赴任……………八三
 母の死……………八七
 男子師範の訓導となる……………九二
 學校とA家に訣別……………九九

帝都教育二十年

京高に赴任して……………一〇七
 日大で學んだ頃……………一二二
 二つの挿話……………一二六
 大震災當時の回想……………一三三
 婦人問題の究明……………一三九
 或年の新年雜感……………一四四
 職業指導の研究に没頭……………一五七
 叙勳の恩命に浴す……………一六一
 汎太平洋婦人會議代表に選ばれる……………一六三
 旅行の足跡……………一六九
 米國の小學校を見る……………一七三

女教師の地位を歎す……………一七六
 昇給問題……………一八一
 世界教育會議に出席して……………一八四
 女教師に望む……………一八六
 女教師のもつ教育力……………一八七
 各層の女教師に望む……………一八八
 興亞教育を目指して……………一九二
 或日の日記の一節……………一九五
 教育の衣替へ……………一九七
 六原青年道場を見る……………二〇〇
 學級經營に六原を學ぶ……………二〇五
 雜刀修業……………二〇八
 内原道場の體驗……………二二一

加藤完治先生……………二七
 興亞教育研究會の發足……………三一
 新體制下の教育……………三三
 強歩行と奉仕行……………三七
 念じつゝ更生へ……………四〇
 學級の新體制……………四二

世の母へ

母の偉さが國の強さ……………三三
 子供は總べて國家の寶……………三八
 體位の向上へ……………三九
 科學智識の涵養へ……………四一
 母は行ぜねばならぬ……………四三

教訓の與へ方遊ばせ方……………六一
 子女の經濟教育……………六四
 交友指導……………六七
 一貫した母の信念……………七〇
 信仰生活へ……………七三

生ひ立ち

洋上の小島なれど

原兒島縣大隅の國の南端佐多の岬を僅か隔て、細長い豆粒の様な小さな島を地圖の上に
發見するたであらう。又鐵砲傳來と云へばすぐ思ひ出されるであらう。周圍三十八里と云はれ
てあるこの島が私の大舅を産れ故郷であると同時に、又くさくさの思ひ出を包む懐かしい故
郷でもあるのだ。

吾國自慢は誰もしたがるものだが、私もその點では誰れにも負けぬ一人である。何かの機
會に自白紹介をする時があると何時も私は眞先きに「種子島の産」といふことを明瞭に紹介
する。それは又私の誇りなのである。

否私は故郷を愛するが故に誇るのではなく、誇り得る幾多のものを持ち合せてゐると信じ
てゐる。その氣持ちは私達が地球上に幾多の大陸がある中に一島國である皇國日本を誇る氣

持と一脈相通じるものがあると、思つてゐる。

今は種子島と書くが古くは多禰とか多嶽とか書いた。その頃は草昧未開の一絶島であつたさうだ。ところが源頼朝が鎌倉幕府を開いて勢威を天下に敷く様になつた頃からこの蒙昧の地種子島がだん／＼と開發の道を辿る様になつたのである。

平清盛の長子に基盛といふ人があつた。この人は溺水して早世したが、その孫に當る人に肥後の頭平信基といふ人があつた。

平氏が西海に滅亡した際父行盛もその一族と運命を共にしたが、一子基信は母と共に臣下筋の北條時政に身を寄せた。時政は潜かに之れを己が養子として掬育した。後之れが發覺し頼朝は後難を恐れて其生命を斷たんとした。時政極力助命を乞ふて、遂に種子屋久其他の群島十二の島主として之れを南海に封じたのである。

其後二十六代七百餘年間島主は治所を種子島に定め世々茲にゐたので其名を取つて氏としたとの事である。

島主はよく領民を愛撫し文武の道を奨励し産業を興しなどして、十五代頃までは儼然たる

南海の一諸侯として雄を海上に稱したときくが、後島津氏に従屬するに至つたのである。

鐵砲傳來で有名な時堯は十四代目の島主である。

十六代の久時は特に賢母古田御前の薰陶によつて成人し、父早世の後よく文武の道に秀で、豊臣秀吉の朝鮮征伐には藩主島津義弘に従つて出征し領民によつて鐵砲隊を組織して數回敵軍を撃退して勇名を走めたといふ事である。

十九代の久基は産業の發達に意を用ひ、領民の困苦を未然に防ぐべく特に琉球から甘蔗を取寄せて栽培させ、やがてそれが關東地方にまでひろまつたと傳へられてゐる。その功を愛でて藩主から栖林大權現の神號を賜はつたとか、今の栖林神社は久基を祭つたものである。之等の出色した名君の勳業が一孤島の領内に止まらずして、それ／＼國家的に意味づけられた事を吾等は特筆大書して世に誇りたいのである。當主は第二十八代種子島時望男爵である。

臣下の中にも幾多の人材を出してゐるが、茲に二人だけあげて見たい。

其一人は所謂鐵砲傳來に功績ある八板金兵衛清定である。ポルトガル人は中々要所を教え

てくれないし島主からは矢の催促を受けると云ふ状態で切腹して中譯をしやうとまで決心した事が幾度かあつたと云ふことだが、遂に之れを完成して島主に奉り、後それは藩主に奉納され、種子島の名で戦國時代以後の戦術をさへ一變するに至つたが、陰に隠れた功勞者の名を没することは出来ない筈だ。

近く前田豊山先生といふ碩儒がある。學徳一世に高く、其高風は普く郷黨に及び其門下から幾多の人材を輩出させてゐる。其の最も秀でた人に碩儒西村天囚博士や陸軍中將河内禮藏（私の叔父）などがある。なほ先生は没落に瀕した島主の家の復興を計り、六歳の孤兒となつてゐた守時君を掬育して成人せしめる等、其功績没すべからざるものがある。

次に女性についても多數ある中に、特に出色した二人について擧げて見ると、二十三代の島主久道の夫人で島津家から、入嫁された松壽院である。夫早世の後よく其志を繼ぎ、難攻とされた波戸を竣工して港灣をよくし、鹽田を作つて其の増産を計り川波へを爲して交通の便を開く等領民の福利増進を計つた男まさりの女傑であつた。

又才色兼備で有名だつた若狭が、一身を犠牲にしてポルトガル人の妻となり、父八板金兵

衛清定をして遂に之れを完成せしめた等の美談が残つてゐる。

之等の人物點描を通して、そこにかもし出される島内の氣風を知る一助として欲しいのである。

私は明治二十年六月十五日この種子島西之表の地に河内家の次女として生れたのである。

河内家の祖先は島主第十二代武藏守左近太夫忠時の第七子攝津守時定で、小さい乍ら今の南種子村下中を領し、役目は地頭であつた。第三代時元は朝鮮征伐に出陣し八月十五日の夜南原落城の時、二尺八寸の陣刀を揮つて馬上の敵將を一刀の下に切り伏せ、その首級を切り落して戦功を立てたといふ事である。刀は誰の作か無銘であつたが、首と共に敵將の長い鬚を切り落したといふので、之れを「鬚切丸」と名づけ家寶として傳へられてゐる。

又時元は關ヶ原の戦に島主の副將として出陣し、豊臣方に味方したが敗戦となり中央突破（徳川方を突破したといふこと）で歸つたといふ事である。四代から臣下としての最高祿を戴いて臣下となつた様であるが、その後零落した時代もある様である。當主時中は第十四代であつて私の弟に當るのである。

それで家柄としても悪くない方だつたし、又維新前は相當な石高を取つてゐたさうだが、御維新の際三十石に減らされたとかでたいした財産があるといふほどではなかつたが、大きくはないまでも米倉もあれば雜穀倉もあつた。家も八疊の間が四つに大小九間位ある相當大きな平家造りであつた。庭に二本の大きな檜が、中空高くそより立つてゐて、遠くからの目印ともなれば家の品格をも添へてゐた。

幼少の頃は下男下女が一人づゝゐて既には二匹の馬が繋がれてゐた。又其の頃は數人の家來と云ふものがゐて、時折農耕その他の手傳ひにも來てくれた。田作はやらなかつたが雜穀や甘蔗などの耕作は相當手廣にやつてゐた。而し私達が七つ八つの頃になると、すつかり農耕をやめて召使等も居なくなつてしまつた。

男尊女卑の風は武家時代からの遺風であらうか、一般に男は餘り働かないで大切にされ、女は朝から晩まで働き通しで、寸暇ないといふ風だつた。私の家の家風は特にそれがひどかつた様に思ふ。鹽や物干竿まで別にし、風呂など下男でも先に入れるといふ風だつた。男を温室の花に例へるなら女は野に咲く雜草と云ふ様な具合であつた。

だから幼少の頃を顧みれば、私など女だといふので一向かまつて貰へず跣足になつたり、尻切れ草履など履いて石ころ道を走りまはつて遊んだり、又使ひばしりなどしたものだつた。西之表の町は島内第一のお城下町であつて、前に太平洋を控へ、大隅半島や馬毛島などが視界に入つて雄大な眺めであつた。

赤尾木港には鹿兒島との間を航行する汽船が出入し、町も縣下では五指に入ると云はれてゐた。

而し何と云つても島の事だから天氣でも悪くなると四日も五日も汽船の入らぬこともあるし、天氣でも一日おきか二日おきである。それで子供の時は鹿兒島から船が這入つたといふ事が何より嬉しいものであつた。

曉の夢が汽笛の音に破られる時の心地よかつた事、今でも忘れられないものゝ一つだ。「あゝ船が這入つた」とむさぼる様に聞き入つたものだつた。

又高い崖の上などに登つて大きな汽船が黒い煙を吐いてゐる姿を見て喜んだものだつた。氣候は南國の事だし、又海に取り巻かれてゐる島の事だから無論暖かには相違ないが西風

が強いので、冬になると襟や袖口から吹き入る風は相當寒かつた。無論襟巻や手袋など用ひなかつたし、足袋などもがんばつてはかないで冬を通した事もあつた。

春夏秋冬の區別はあるけれども、冬は黄櫨が紅葉する位で常緑樹が多く丸坊主になる木は極く少ない。だから春になつても新芽の萌え出るのをぞく／＼した氣持で見ると事はないが、それでも生桓に赤や緑の新芽の出る氣持はよいものだつた。

私の郷里では和歌が特に盛んで、女の人でも文字を解すると否とを問はず和歌をよく詠じ歌會なども盛んである。

又生花が盛んで、女の子は大概習つてゐる。

流儀は池の坊である。東京の池の坊の元祖は羽生慎翁道則と云つて種子島の人である。高輪泉岳寺境内に其功績を傳ふる碑が建つてゐる。

險に浮ぶ父と母

私は時折靜かに險を閉ぢて、今は遠い過去の人となつた父母の面影を偲ぶことがある。す

ると今でも生きて人の如くありし日の事がはつきり浮び出てくる。

父には二人の弟と二人の妹があつたが、弟は二人共軍人を志して上京し、長弟は陸軍士官となり、末弟は不幸病死した。妹達は二人共他家に嫁いでゐた。

父は長男で家の相続人だといふので家に止まつたのである。父母からも誰よりも愛せられ尊敬せられて育つたらしかつた。

八疊の茶の間には眞中に圍爐裏が切つてあつたが、玄關八疊の間に續くところの柱を特に亭主柱と呼び、その間に挟まつた一枚の疊を特に横座と稱へて父の座する場所に定めてあつた。私達がそこを跨いだりすると、祖母や母に「其處は跨ぐところではありませんよ、足がはれますよ」とよく戒められたものだつた。父は茶の間では何時もその横座に座つてゐた。

眞黒な髪の毛が額際まで生えつまつてゐて、色の白い品のよい人であつた。冬などは母が丹精して織つた生糸織の細い縦縞の袷に廣巾の縮緬の兵子帯を締め、玉虫甲斐絹の裏のついた大島紬の羽織など着てゐた。下女や下男などがゐて農耕をやつてゐた頃でも、父が畑などに出た姿は只の一度も見つた事なかつた。何時も胃が弱く、胸がやけると云つて健胃散など

呑んでゐた。又冬になると風邪を引き易く、全體に於て蒲柳の質であつた。そんな事で別に生活が困らなかつた爲か、餘り務めなどにもつかないで内にゐる事が多かつた。郡役所に一寸つとめた事があつたが、晩年に近い頃人のすゝめで郵便局長をやつたり、郡會議員などやつてゐた。

暇の時は大概道樂に網などすいて、川や海に網打ちに出かけたり、又鐵砲をかついで鴨撃ちに出かけたりしたものだつた。

今の言葉で云ふならばお坊ちやんとか、高等遊民とかいふ言葉がよくあてはまるかも知れぬが、私の國ではお大名といふ言葉で呼んでゐた。

酒が大變好きであつた。いや酒と云ふのは種子島に出来る唐芋からとる自作の芋焼酎のことである。已に祖父はなく祖母だけ残つてゐたが、その祖母が又大の焼酎好きで、夜になると二人横座に向ひ合つて晩酌したものだ。酒の肴といふ事をよく云ふが、酒飲みには肴はつきものらしく、私などよく町まで肴買ひにやらされたものだつた。

この様に父の生活は有閑そのものであつたから、普通の常識から云ふならば母の生活は更

にそれに之繞しんまうをかけたものとなつて居るが、それは全く想像以外である。

母は父より一つ年上で體格もがっちりしてゐて病氣一つした事がないと云ふほどの健康體であつた。髪の毛が黒く肌のきれいな人であつたが、面形は十人並と云ふのが當ると思ふ。私の國では妻の方が一つ年上だと倉が建つと云ふが、そんな事で縁組した譯ではなかつたらうが、倉は建たなかつたまでも、ほんたうに母は一家の大黒柱であつた。

母によつて河内の家が立つてゐたと云つても過言ではなかつた。母は朝から晩まで只黙々として家の爲めに働いて働いて働きぬいた人であつた。

祖母は盲目だつたし、父は所謂お大名だし、子供が七人もゐたのだから、それを一人で背負つてゐたのだ。

下女や下男が居なくなつてからは、家業も搦いたし、水は三丁ばかり離れた谷底から擔いで來なければならぬし、宅地に續いた相當の廣さの菜園の手入れもしなければならぬのである。又畑も一二枚唐芋を作つたからその手入れもある。春蠶夏蠶と少しは養蠶もやつたから桑の手入れもあるし、又養蠶期は中々多忙であつた。雇人もしたり家來達も來てはく

れたが、母はいつもその中に立ち雑つて働いた。

又上納米の来る頃などまるで戦争の様な多忙を極めたものだつた。一々拵で計つて俵へつめさせて倉へ納めさせたのである。又それ等の人々へ飲ませる喰はせるの世話もしなければならぬし、味噌や醤油等も總べて自給自足だつたから、その仕込みもやらなければならぬ。それよりも一番骨の折れたのは焼酎作りであつた。一切の仕込みも自分でやつて、今度はそれを淨溜させて焼酎にするのだが、非常に水を必要とするので、その日になると谷底からの水汲みが大仕事であつた。

其他機を織つたり、着物を縫つたり、洗濯や家のふき掃除等もあり、又炊事といふ毎日の大仕事があるのだから、大家族を抱えた母の勞苦は言語に絶してゐた。

母が暢氣さうにお茶でも飲んで遊んでゐた姿はどうしても暇に浮んで來ないのである。どんな忙がしい時でも父に仕事を頼んだ事もなく、又父の日常に不平らしい言葉を洩した事もなかつた。

私の家には又よく父の友達が訪ねて來た。その都度、焼酎を出し肴をそなへなければなら

なかつた。母はそれにも嫌な顔を見せた事はなかつた。

母は愛嬌たつぶりの笑顔を見せるといふ人ではなかつた。

仕事に追はれ／＼の生活には愛嬌を見せてゐる暇もなかつたと云ふ方が當るかと思ふ。それほど母は忙がしかつたのだ。

或日私は母に「も少し樂に出來ないか知ら、それではとても體がもたないではないか」と云つた事がある。母は、

「働くことには慣れてゐるから何でもないよ、お嫁に來た頃などお婆さんが中々きつくて仕事を次から次とやらされるので、後にはこちらから先手を打つて、一つの仕事を早く片づけ、その次何しませう、と持ちかけて行つたものだ」と話してくれた。

祖母と云ふ人は小柄で鼻が高く面長で、若い時は美しい人だつたらうと思はれる人だつたが、私達が覺えてからの祖母は全くの盲目で、耳も遠くなつてゐたからその世話も又一通りでなかつた。大概は母家に續く八疊の隠居部屋にゐて、麻やからむしを紡ぐ仕事をして日を暮してゐた。そして自分の子供達や孫達に着物や蚊帳などを織つてやる事を楽しみにしてゐ

たのである。中々勝気で氣むづかしい處もある祖母だったが、母は只忍従の一字で貫いて来たのであつた。

夜になると圍爐裏を隔て、父の横に母は座つたが、父にお酌をしてやるでもなく、愛嬌を振りまく譯でもなく、只座つてゐるだけであつた。父はそれだけで充分満足してゐる様であつた。

御馳走の出る頼母子講や宴会などがあつても父は中々出かけ様とはしなかつた。こちらから友達の家を訪ねると云ふこともなかつた。内で晩酌をするのが一番楽しいとよく云つた。今から思へば父は或は母の傍を安住の地の様に只信頼してゐたのではなかつたかとも考へられるのである。

家庭内で両親の口から野卑な言葉を聞いたり、野卑な態度を見せられたりした事がなく、清淨といへばよいか、殺風景と云へばよいか、性問題などについては何にも知らずに過したが、學校などで友達などの口から卑しげな事をきいて驚いたものだつた。

父は晩酌の時、興が乗れば時折燭瓶をお箸で敲き乍ら、下手な淨瑠璃など語る事などあつ

た。又働く外何の趣味もない様な母だったが、嫁入りの時持つて来たのだと云ふ三味線をつ持つてゐて、たまには爪弾などして小さな聲で歌などうたふこともあつた。又淨瑠璃の一節を語つたりもした。

母が着物や帯など新調したといふ記憶は一つもない。

家族にお肴など盛り分ける時は、自分のお皿は残りものをちよつぴりにしてゐたが、小さな子供達が自分のものを平けて母のものをねだる様な時、母はおしげもなくそれを挟んで子供の口に入れてやるといふ風であつた。

はらから

私達は男二人に女五人の七人兄弟であつたが、末弟は父の死の直前で私の師範入學の直後の誕生であるから、男一人に女五人の生ひ立ちを書いた方が當るかと思ふ。

さらでだに男が大切な私の家にとつて、弟はたつた一粒種の男の子であるから掌中の玉と云ふか、家の寶と云ふか、兎に角大事にされ可愛がられて強い風にもあてない様にして育て

られたのであつた。殊に私の祖母など、どうして愛すればよいか迷ふ風であつた。いつも弟の事を祖母は主様と云ふ愛稱で呼んでゐた。

女の子五人に替へられない家の寶だと口ぐせの様に云つてゐた。何でも弟がまづ第一で、凡そ欲して充たされぬものはないと云つてよかつた。私達も誰れよりも弟は大事であり、又可愛かつた、自分の欲しいものでも弟の口に入れてやる事が嬉しい位であつた。弟は目白が好きで、露のしたゝる椿の花などを仕掛籠に入れて大きな籠の上のせ、下の籠の中には囀を入れて鳴かせる様にして山の目白を誘ふのだが、よく弟と一しよに鳥籠をかゝへて山の中を歩きまはつたり、鳥が仕掛籠にかゝつたと云つて喜んだものであつた。弟は毎朝鳥の播餌を作るのに夢中であつた。弟は又大變學問の出來がよく、神童と云はれた位であつた。

女の姉妹達も成績は皆級で三四と下がる人はない位出來たが、皆技能科が下手であつた。當時を思へば、雑誌一冊あるではなく、學校で學ぶ教科書があるだけであつた。母が忙がしかつたから、私達女の子は寸暇もないほど働かされた。

九つか十のやつと米臼に背が届く位の頃から、母のお相手をして姉と私は米や麥を搗いた

ものだ。米搗きと一口に云ふが、あの重い杵を振り上げ振り下ろして白米に搗き上げる勞苦はなまやさしいものではない。それも續けて幾日も／＼も搗くのだから、時には息切れがして一休みしたくなる所を、勝氣の私は「何、人が休まぬ前に休むものか」と、がんばつて決して人より先きに休んだ事はなかつた。手の裏には堅い豆が幾つも／＼出來、時には血豆さへ出したものだ。今でも手の裏を押して見るとその頃の豆のあとが堅く残つてゐる。

それと今一つ大變な勞働は水汲みである。何にしる三丁位の距離を隔てた而かも石の段々が三四ヶ所もある谷底から汲み上げてかついで來るのだから大變だが、七つ八つになつた頃から小さなバケツで汲んだものだ。

重い水を肩にかついで坂を上ると息切れがしてつらくなるが、今一つあの坂を越してからと思ひ、それを越すと又一つ越してからと云ふ風でたうとう一休みもせず家までかつぎ届けた事などあつた。やつと家に辿りついて大きな水甕の中にきれいな清水を汲み込んで、幾度も／＼それを繰り返して、たうとう水甕が一杯になつてあふれるばかりの水面を見る時の氣持は實に愉快なものであつた。而かもそれは殆んど毎日の行事であつた。

五つ位からは何時も子供のお守りをさせられたから、一人で友達と暢氣に遊んだ記憶はないと云つてよい位だ。夏の夕方など背中に子供をおぶつてゐると田舎の事だから蚊がぶんぶん羽音を立て、顔にあたり又足にたかつて来る。赤ん坊はきまつて暗くなつて来ると母の乳房を求めて泣き出すのだ。一刻も早く背中から子供を下して貰ひたいと思ふが、母は父や祖母にそなへる焼酎の世話や肴のお料理、子供達への夕飯の仕度で姉を相手にてんてこ舞をしてゐるから中々子供を取つてくれないのである。そろ／＼じれつたくなつて背中の子供と自分と一しよになつて泣いた事も度々あつた。

姉は小さい時から炊事や織り物縫ひ物などの方を母に仕込まれてその方の手助けをしたが私には餘りそんな事は教へてくれなかつた。

春夏と蠶も飼つたが、桑摘みをしたり桑畑の桑を刈り込んで背負つたり蠶に桑をやつたり筵を取替へてやつたり随分忙がしい思ひをした。上簇前後は夜を徹してやつた事もある。繭になつてから屑繭などは家の使用にあてたりしたが、眞綿にしたり紬を延いたり、糸を繰つたりする事は主に姉の仕事であつた。

畑にもよく行つた。鋤で耕した事もたまにはあつたが大方は草取りなどであつた。また新芋など背負つて遠い畑から持ち歸つたりしたものだつた。

それに又洗濯が大變であつた。大家族の汚れ物を家で灰水洗ひして、濡れた洗濯物を、肩も折れる程竹竿の両端にかけて程遠い流れ川までかついで行つて、洗濯して歸るのである。

よその叔母さん達が、よく働くと云つて賞めて下さつたものだつた。

私の先生が私の肩をなで乍ら、餘り水を汲んだり洗濯物をついでりするから、こんなに肩が下がつたのだと云つてなで肩の私をからかひ乍ら賞めて下さつた事もあつた。

自分でも體力の乏しい幼少時代によくあれだけの労働が出来たものだと感心してゐる。

こんな風であつたから、學校の勉強などは子守をし乍ら本を読む位が關の山で、殆んど豫習復習などの時間はなかつた。

その頃は學校でも餘り豫習復習と云ふ事を奨励しなかつたし、家庭でも餘り重要視しなかつたから試験の時以外は勉強などした事はなかつた。

その頃は何でも暗誦する事が流行して、讀方などでもよい文章はよく暗誦したものだつ

た。

こんなにもいつも兄弟が多い爲に、遊びも出来ず勉強も出来ず、おいしいものも六つにも七つにも分けねばならず、分けても大きい者は少なくといふ風だから、兄弟の少ない友達などがうらやましく、兄弟は自分の幸福を奪ふもので有難いものではない様に思つた事もあつたが、今日かうして成人して見ると七人でも足りない心地がする。

父母はなくても兄弟が何よりの力である。七人の中東京に五人大阪に二人なので時折寄り合つては勵まし勵まされ力になつたりなられたりして、親身の愛を味はつてゐる事が何よりの幸である。

祖母の教へ

祖母は非常に敬神崇祖の念の強い人であつたから、盲目で不自由な身を一週一度は必ず二丁ばかり離れた河内家の墓所にお詣りをした。墓碑の数が四五十も並んでゐて、相當な面積があるから、一寸お参りして一寸で歸るといふ譯に行かない。先づ水を井戸から汲み上げて

来る、それから家のまはりの花を切り集める、水をかつき花を抱へて祖母の手を引くのだから、一人では駄目である。大抵は姉と一緒にあつた。

お墓へ着くと先づ祖母は最初に御先祖様の前に禮拜させ、次ぎに祖父、叔父、その次に全體を拜するといふ順序におじぎをさせてから仕事に取りかゝらせるのであつた。

墓石の間々に枯れ葉一つない様に隅から隅まできれいに掃除をするのである。盲目の祖母も自ら箒を取つてよくはいたものだが、はき目が曲んでゐて枯れ葉が其處此處に残つてゐるので、よく姉と二人目を見合せて笑つたものだつた。次に枯花を抜き、水を花立てや水受けや茶碗に入れ、その後からお花を挿して行くのだから中々時間がかゝる。やつと終つたと思ふと、祖母はよく

「御先祖様の御恩を忘れてはなりませんよ、河内の家が立つてゐるのは御先祖様のおかげだからね、」と教へたものだ。

それから私等に手を取らせて、そちこちの墓碑について、このお方は經濟家で家を興した方だとか、このお方は朝鮮征伐で功を立てた方だとか、このお方は學者で有名な方だつたと

か、一々その人についての故事來歴を話してくれた。

私達は子供心にも一々頷うなづつき乍ら之れを仔細にきき取つては祖先の勳を思ひ、之れに感謝し、家の大切な事をしみるゝと感ずるのであつた。それにつけても私達は祖先の名を恥かしめぬ、否祖先の名をいやが上にも輝かす様な立派な人にならなければならぬと心に誓つたのであつた。

そして又來た時と同じ順序に禮拜して家路につくの为例としてゐた。

又内では朝に夕に神棚を拜まされるのが家風だつた。毎朝花立ての水を取替へ新らしい花を挿しかへ、又お茶をそなへた。又朝夕は御飯を上げる習慣になつてゐた。

他所からの到來物は必ず一度神前におそなへしてから子供達にも別けてやる様になつてゐた。

又叔父が軍籍にあつたので、小床には常にお神酒や陰膳をそなへて武運長久を祈つてゐた。

かうした家風の中に育つた私達は何時とはなしに、神を敬ひ神に仕ふることを覚えて行つたのであつた。

夜はよく女のきやうだいたちが代るゝ祖母の隠居部屋に泊りに行つた。祖母は毎晩一位の焼酎を頂いてゐたが精神は中々しつかりしてゐて、色々種子島の故事來歴についてお話をしてくれた。又昔話をしてあげ様と云つては、何時もおきまりの猿蟹合戦などしてくれた。種類はほんの二つか三つのもを毎晩繰り返しゝやつてくれたのだが、それでもそれをきくのが楽しみでよく泊りに出かけて行つたものだつた。

盲目的な上に耳まで遠くなつてからの祖母は随分うるさくていやな事もあつたが、而し今から思ふと、よい事だけが印象に残つて、只々有難い祖母であつたと慕はれてならない。

又毎年私の家では八月の十五夜になると、河内家の分家の人々を呼んで刀祭りといふ事をやつた。

それは前述した様に三代時元が島主久時に従つて朝鮮征伐に赴き、十五夜の月のほのゝと上りかけた時、家傳の寶刀鬚切丸をふるつて敵大將の首を打ち落した事に起因し、敵將の靈を弔ふ意味と祖先の武功を稱へる意味で催されるのがこの刀祭りであると祖母は教へてく

れた。

恩師の面影

私の學んだ小學校を榕城校と云つた。見晴しのよい高臺で、大きな五葉の松が幾本も並んで立つてゐた。氣根のからみ合つた太いたくましい軀幹の榕樹が豊かな枝を四方に張り擴げて、春夏秋冬青々と葉を茂らせてゐるのも偉觀であつた。

茲はもと城主の居城のあつた跡なので、榕樹の榕と城とを取つて榕城と命名したといふ事である。

その頃はまだ義務教育は尋常四年迄であつた。私は尋常の間は幾人かの男の先生に受け持たれたが、高等科では四年間を中田といふ美しい女の先生に受け持つて頂いた。

先生の母君は「若狭」の血を引いてゐられるとかで非常に美しい方だつたが先生もお母様によく似てゐられた。父君も和漢の學に通じた立派な紳士で幼少の頃から先生は父君の御薫

陶で和漢の學を學び、殊に鹿兒島の師範に學ばれたので、學才は益々輝き才色兼備の名は全島にきこえてゐた。

少し吊り上つた切れ長の目が黒く澄んでゐて、脹やかな頬の色が匂ふ様に白く、面長の方ではあつたが、瓜實顔と云つたのつべりした美しさでなく、個性のはつきりした理智的な輝きに満ちた美しさをもつてゐられた。中肉中背ですらりとした肩のすべり、

今もはつきり目に浮ぶのは大きな緋鯉の帯の模様だ。黒縹子裏の晝夜帯をきゆつと上品に結びあげられた氣品のある後姿であつた。先生が垢じみた身なりをされてゐた事はかつてなく、いつも清楚な氣高さをもつてゐられた。

こんな美しいそして頭のよい先生をほれ／＼と眺め乍ら學業に勵んだ私はほんたうに仕合せであつたとしみ／＼思ひ返される。

先生から流れ出る教室の雰圍氣から私の情操はもつ／＼高いところにあげられてゐる筈なのだが不肖の悲しさにそれほどのものとなり得なかつた私なのである。

その頃の女の先生方は中田先生の様に美しい方ばかりではなかつたが、概して身だしなみ

がよく清楚な感じがもてたものであつたが、何時の間にか女の先生は少しも身なりなどをかまはぬものになつてしまつた様だ。先生といふ看板をかけておればどんな汚ない身なりをしてゐても世間が通ると云つた風である。之れは一體どんなものだらうか。少なくとも教へ兒の情操教育といふ事が大きな一つの教育要素である事を思ふと、今少し考慮する必要があると思ふのである。東京の真中にゐてさへ先生と名がつけばどんなやばな身なりや髪容でも結構通つて行けるので生活は安易であるが、考へ直す必要がある様に思ふ。さうかと云つて女優はだしのけばくしいモダン姿は更にく教へ兒の情操を害ふものであるから戒めねばならぬが、教壇を守るものに取つては服装だけの問題でも中々容易に片づけられぬものがある、最近つくづく感じてゐる。

先生は少し首を左に傾けられる癖があつた。それが又何とも云へぬ風情に見えたので、いつか又私も先生の身振りを真似て首を左に傾けて歩いてゐたりしたものだつた。先生は和歌に堪能で名人の域に達してゐられた様であつた。

先生の授業で一番嬉しかつたのは國史の時間であつた。先生が大きな本を抱へこんで教室

に這入つて來られると「あゝ又面白いお話をして下さいさる」と喜んだものだつた。その頃國史の時間で先生に伺つたお話を今でもつきり覚えてゐる。

私は今日でも非常に國史が好きであるが、それは小學校時代に受けた先生の感化だといふ事をはつきり云ふことが出来る。

小さい頃は私はどちらかと云ふと理數科の方が好きで成績もその方がすぐれてゐた様に思ふが、それも先生の説明が微に入り細を穿つて居り、又明晰で熱意があつてよく分つたからではなかつたかと思つてゐる。先生が曇み込む様に繰り返しく説明して下さいさるので、もうよいのに、もうわかつたのに、とよく思つたものだつた。今考へると分りのわるい人達にまでよく分らせ様との先生の熱意からであつたといふ事はつきり分つたのである。

然し當時は全然實驗と云ふ事がなかつたし、又その設備もなかつたのであるから、顯微鏡を手にとるとか、又は實際に機械をいちくつて観察したり研究したり發見したりするといふ教授法ではなかつた。發問法はよく用ひられてゐたが大體において注入主義の教育であつた。言葉によつて教へられ言葉を通して理解すると云ふ行き方が當時の教育であつたから、

結局は説明の上手な先生は教授法の上手な先生であつた。私の先生は教授法でも最上の先生であつた。かうした古い時代の教育を受けた私達の過去に比べて今日の教授法には實に隔世の感がある。其當時もつと設備が完備してゐて、もつと實驗的に掘り下げた物の見方をする様に教育されてゐたら、も少しは自分が何とかなつてゐたのではないかと思はれもするが、それは時代の相違でやむなき慾ばつた願ひである。私は其時代の教育としての最高の幸福をかち得てゐたのであるから、それ以上を望むと云ふことは或は慾が深過ぎる事になる譯である。

私はこんな立派な先生の薫陶を受けて來たので天下で一番偉い人は私の先生だと思ひ込んでしまつた。従つて女で先生になると云ふことは又一番偉くなる事だと思はれた。それで何時からともなく私は師範に這入つて先生になるのだといふ考へを持つ様になつたのであつた。父母に乞ふて許しがあつたので、夜など先生にお願いして難解の數學など見て頂いたりした事もあつたが、先生は親切に手を取る様に導いて下さつた。

クラスの中で私にとつて一人の競争相手があつた。理數科では決してひけをとらぬといふ自信があつたが、技能科の下手な私は高等卒業の時たうとうその人に首席を奪はれてしまつた事は終生の痛恨事であつたが、然し私には今一つ大きな難關突破の闘ひがあつたので、何時までも氣に病んでもゐられず、師範受験に全靈を傾けて立ち向つたのであつた。

今日でも女子師範入學には相當の競争がある様だが、其頃は縣下に於てたつた一つの最高學府だつたし、それに僅か二十人とると云ふのだから競争の激烈な事は想像以上であつた。その年は二十人に對し四百人の受験者で二十人に一人の率であつた。

島の事だから男女共、郡役所で試験があつたが男女の受験生で廣い試験場は一ぱいであつた。

試験の成績はさう悪かつたとも思はなかつたが、どうせ駄目だと觀念してゐた。

ところが何ぞ計らん、女では私一人が合格の電報を受けたのであつた。男もたつた一人だつたさうだ。あの時ばかりは一生一度の嬉しさであつた。「鬼の首を取つた氣持ち」とか、「天に昇る氣持ち」と云ふのはその時の私の胸中であつた。父も母も祖母も兄弟たちも叔母たちも先生も皆んな／＼私の爲めに喜んでくれた。

私のクラスの競争相手も一しよに受験したが不合格の憂目を見た。私は一面勝者の喜びを味はつたが又つくづく氣の毒でならなかつた。

あゝ私は之れによつて恩師の足跡を慕ひつゝ長い教育道を歩み續くべき運命がこの時已に決せられたのであつた。

師範に入學

四月にもなると南國の春は暖かだつた。山櫻は散つて日に日に若芽がのび、冬の間強い西風に騒ぎ立つた白い波頭もすっかり消えて油を引いた様な長閑かさである。透徹る様に澄んだ青さで視界に入つた大隅半島や、可愛い馬毛島のスマートな姿等も茫とした春霞の中に夢の如く浮いて見える。

師範合格の通知があつてからの私の心は嬉しさに胸がぞくぞく震へて居た。眼に入るものは何もかもが楽しさにふくらんで行つた。

あゝ私の理想の人中田先生と同じ師範に學び、それを卒業したら私は先生になれるのだ、

私は一生懸命勉強するのだ、そして日本一の良い先生になるのだ、こんな事を考へて毎日を暮した。

此の位の年齢の時は、豪傑時代と云つて、大きな夢を見る時代だといふ事を、後日心理學を學ぶ様になつてから知つたが、私はよく天を仰ぎ無數に光る星空を眺めては、天も一呑みと云つた様な大きな夢をよく見たものだ。

師範入學といふ事は此頃の私には其の大きな夢の中に融け込んだ一つの大きな夢だつたのだ。其れが夢でなく現實となつたのだから天下を取つた様な嬉しさであつたのも無理ではない。この大きな夢を見るといふ事は私の生活には随分長く續いた様に思ふ。

今はかうした夢が消え幻滅の悲哀をまざまざと味はふても、次の夢を追ふといふ氣力の少くなつた事は悲しい事だと思ふ。大きな成長は大きな夢の中にあるのではなからふか？

「先生は學校の方で着物も海老茶袴も下さるから何も着物の心配はゐらない事、舍費も、食費も納めないでよいから、費用は小遣錢だけでよいのだ」といふ様な細々した事まで教へて下さつた。

父はその頃體の調子もよかつたし、又大變嬉しがつてゐたので、自分が鹿兒島まで送つて行つてやると言ひ出した。私は又飛上る程嬉しかつた、私はどちらかといふと母より父が懐しかつた。

黄昏時、佐多岬の燈明臺に明滅する赤い灯を眺めては、あの灯のその又遙かの彼方に、鹿兒島といふ繁華な都があるのだ。一度そこに行つて見たいと日頃憧れてゐた鹿兒島に行く事になつたのである。

海はよく風いでゐた。船は夜十時頃港を出て、翌朝六時頃着いた。初めて見る鹿兒島の美しい港には櫻島が聳えてゐて雄大な景色だ。岸壁に見える美しい大きな家の屋根が、高く低く、重り合つてゐるのに眼を驚かせた。港内には黒煙を吐く蒸汽船が幾艘となく並んでゐるのに眼を見張つた。

やがて島の子、風の子、自然の子は、夢に見てゐた美しい鹿兒島の町中を、おそろおそろ父に従つて歩いたのであつた。宿についてから父はその日の午後、舎監の竹下榮子先生のお宅に私を連れて行つてくれて、懇々と私の事を頼んでゐた。

竹下先生は後に山本先生となられたが、震災當時の總理大臣であられた山本權兵衛伯の姉君に當る方である。眼のぎよろ／＼光つた、色の淺黒いきつさうな先生で、はき／＼ものを言ふ方だつた。お年は五十位に見えた。

富士類はよく美人の形容に用ひられるが、この先生の眞黒に生えつまつた額は、くつきりと直線的富士形に區切られてゐて、寧ろ精悍な強さを象徴してゐる様に見えた。

「よろしい、お引受けしました。安心してお歸へり下さい」と力強い言葉で父に答へられた時、父はほつと安心したかの様に、眼尻に一寸皺をよせてほ／＼笑みつゝ、幾度も頭を下げてお禮を述べてゐた。その翌日父は私を連れて寄宿舎に入れ、其の夜の汽船で歸島したのであつた。

寄宿舎生活

師範學校は海岸からあまり遠くない山下町といふ所にあつた。男子部、女子部と分れてゐて、學生は通學が許されず、全部寄宿舎に收容される様になつてゐた。

寄宿舎は古びた木造建で庭には大きな藤棚があつた。又大きな松等も一、二本立つてゐた。年、二十名づつであるから全部で六十名の入舎生であつて、皆一つの大きな室に机を並べ、それを挟んで座る様になつてゐた、その外に廣い寢室があつて食堂を兼ねてゐた。それから狭いお納戸があつて、一人一人の行李や調度品等總べてそこへしまふ様になつてゐた。

見ると上級生達の着物や、道具がきちつと定規を當てた矩形の様に重ねてたゞまれてあつた。私達もまたその通りにするのだと上級生に教へて貰つた。

朝の起床は早かつたが幾時だつたか今一寸記憶が無い。洗面、着替等が終つた所で廊下にきちんと整列し、舎監の先生立合ひの下に、人員點呼が行はれた。それから朝食をすませて學校へ出かける事になるのである。

授業がすむと皆お納戸に這入つて袴をぬぎ、きちんと疊んで定位置におき、きちつと帯をしめる様になつてゐた。そしてそれ／＼自習室兼居間である机の前に座つて勉強等するのである。夕方の食事は五時だつたかと思ふが、その後は一日の中で一番楽しい時間であつた。三々、五々、打ち連れて、庭内を散歩したり、藤棚の下で談笑に耽つたり、時には數人が一

列横隊に並んで手を敲きながら、唱歌や軍歌等、大きな聲で歌ひながら歩くのである。

その頃は勇ましい軍歌がはやつてゐたので、女學生でもよく歌つたものであつた。

「進め矢玉の雨の中……」等はよく歌つたものゝ一つだ。

「火砲の響遠さかる」といふあの日本赤十字の歌だの、「汽笛一聲新橋を」とか、「箱根の山は天下の險」等今では微が生えたかと思ふ様な、單調なりズムのものが盛んに行はれたものだつた。

夜は自習室に入つて皆勉強するのだが、二時間位黙讀時間といふのがあつて、その間は咳一つ立てる事が出来なかつた。眞面目に一生懸命勉強する者もあるが、机にくつついて眠つてゐる者もたまにはあつた。

時たま廊下にさら／＼と草履の音がして、舎監の先生が見まはれると、皆はそらとばかり眠い眼を見張つて勉強するといふ有様であつた。その時間が過ぎると、急に開放された様に心もくつろぐのであつた。寢に着く前、又起きた時と同じ様に廊下に整列して人員點呼が行はれ、十時に寢に着く事になつてゐた。寢る時も大きな帯を締めたまゝ、後ろを前にまはし

て寝るのである。起床から消燈に至るまで總べて劉唳と嗚り渡る喇叭の合圖に従ふのであつて、實に一糸亂れぬ規律的の生活であつた。それに上輩、下輩の秩序が嚴格で、上級生の前を通る時は一々うや／＼しく會釋し下級生は常に謙遜を旨とし従順之つとむるといふ風であつた。

上級生は又長たるの範を垂るべく、禮儀を守り規律に従ひ、我儘をつゝしみ下級生を愛してくれた。

よく私達は髪等結つて貰つたものだ。その頃の髪は束髪でなく銀杏返しか、桃割れであつた。ふつくらと前髪をふくらませて格好よく上級生に結つて貰つた時は本當に嬉しいものであつた。

私の郷里からは三年に一人二年に一人先輩がゐたので、何から何までよく面倒を見て貰ひ、分らぬ所は手を取る様に親切に導いてくれたから、大船に乗つた氣持ちで、だんだん寄宿舎の生活にも馴染んで行つた。

一年の新生は二十人であつたが、私と同じ年の十六歳といふのは三人で、中でも私が一

番生れ月が若かつた。外は二つ、三つ、四つ、五つの年上で、中には地方で准教員を勤めた經驗を持つ者も二、三人は居た。

私と並んだ人は、私より五つ年上の二十一で所謂准教員の經驗者だつたが、私を子供扱ひにするのは少々癪であつた。

三年生の中に、室長、副室長といふものがあつて、一切をまとめるのが役目であつた。

炊事當番は一クラス二人位づつだつたと思ふが、六人がよつて先づ一週間の献立表を作成し材料や、分量もきちんと定めて、それを女中に渡し、料理や、御飯を炊くのは大概女中がやつた。お茶碗や、お皿に盛つて運んだり、跡片付けをしたり、お茶碗を洗つたり、拭いたり中々多忙なものであつた。

何しろ發育盛りの食慾旺盛な時代であるからお晝の授業の終る頃になると、炊事場や、食堂からのお菜の匂ひによく唾を呑んだものだつた。膾に鯛の目差し等がどんなにおいしく戴けた事か、それを思ふと當時の自分がしみ／＼羨ましくなるのである。

だん／＼學校生活に馴れて來ると、授業が了へてお納戸等でお袴や、着物等疊みながら、

雑談に耽るのが楽しみであつた。話題は大抵先生の批評である。身振りを真似たり、聲色を真似たり、又變なニツクネームを奉つて笑ひこけたりした。

實にあの時代はよく笑つた。教室等で授業を受けてゐると何といふ事なしにおかしくなつて、誰かゞ笑ひ出すと、もう堪えられなくなつてくすくす笑ひ出す、先生はあつげに取られて「顔に何かついてゐるか」と聞かれたりするが、それが又おかしいといつて、どつと笑ふのだつた。一寸女じみた聲を出す先生があつたが、その先生の時は特によく笑つた。すると先生は「貴女方の時代は、木の葉の落ちるのもおかしい時代だからなあ」とおつしやつたものだ。

寸刻のよどみもなく燃えたぎる若き生命力の躍動は、何かの形で發散しなければならぬのが、青春期の心理現象なのかも知れぬ。

ほんたうにあの頃はよく笑つたものだ。時たま開かれる夜の茶話會等も面白かつた。よく男の先生方をお招きして雷遊びをして穂の落ちた者が隠し藝をやる。それをわざと先生に落して、お話を伺つたり、詩吟等して頂いたりして、嬉しがつたものだつた。

こんな事等書き綴つて見ると、中々朗らかな、楽しい寄宿舎生活の様に取りれるが、規律は中々厳格だつた。外出には必ず外出帳といふものがあつて、時間を正確に記し、行く先を明記して、舎監の印を頂き許可を受けるのである。又先方でも印を押して貰つて歸り舎監室へ行つて一々挨拶し、外出帳を點検して頂くのであつた。又外出は一人では出来ない事になつてゐた。

華美な風は絶対に許されず、頂いた着物も三十か、四十の人が着る様な、地味な柄のもので袖の振り等に赤を用ひる事は禁ぜられてゐて、黒か白であつた。今まで持つてゐた着物も皆振の赤を黒か白に縫ひかへねばならなかつた。入學と同時に、腰揚は元より肩揚も皆下してしまつて、一時に大人にされてしまつた。十も年を取つた様な氣持ちになつたのである。こんな具合で青春時代を教育された私達には心はともあれ、形の上の華やかな娘時代といふものはなかつたと言つてよい。

一體に地味作りと云ふ事は當時の風であつたが、竹下舎監の堅實主義が更に之繞をかけて、かうした舍風が出来上つて行つたのである。

竹下舎監は前にも一言した様に、一生を獨身で通され、中々氣象の強い、男まさりの女丈夫で、典型的な薩州女子といひたい、秋霜烈日の感のある方であつた。そして師範學校の舎監に身を投じてからは、質實剛健なる舎風の許に、生徒を薰陶されてゐたのであつた。上級生の人々は竹下先生と呼ばず、竹下様、竹下様と敬稱を用ひ、敬慕以上に畏敬してゐたもので、先生を悪口するもの等はなかつた。少し派手なもの等身につけて先生の前に出ると、先生は「貴女の衿は派手ですよ」とか「貴女の前髪はふくらみ過ぎてゐますよ」等と人前も憚らず、すばりと遠慮なく戒められるといふ風であつた。其の後もすつと舎監として薰陶を垂れてゐられたが、其の後山本と改姓され、令弟山本權兵衛伯の、愛婿元の海相財部海軍大將の邸内に、老後を養はれ、今は故人となつてしまはれた。

こんな風であつたから、吾等若人の心に、形の若さはなかつたが、心は強く正しく、又克己・忍耐・規律・謙讓・禮儀等のよきものがはぐくまれたのだと感謝してゐる。

父の死

入學してから一學期は過ぎた。野育ちで幼なかつた島の子もかうした寄宿舍生活に馴染むに連れて、だん／＼と身も心も成人した。此處で一學期の假入學の名が解除され、これからは眞正眞銘の、師範生たる事が許され、夏休みを迎へたのだ。

喜びを胸一杯に包んで船に乗つた。皆が健やかで私を迎へてくれる事を思ふと、私の顔は一人ではほころびて來るのであつた。それに「男の子が生れた」といふ嬉しい知らせもつい最近あつた。兄弟六人に不足は無かつたが、男の子の少い私の家に取つても、私達に取つても、それは大きな喜びである。どんな男の赤ちやんが生れて居るだらう？

朝早く船は港に着いた。汽笛が鳴る。かつては此の汽笛の音に憧れたものだが、今はその船が自分に乗せて歸つたのだ。此の一聲を聞いて家の者達がどんなに喜んで私を迎へに、駆けて來る事だらうと、懐しい故山の風物を、四月目の今日物珍らしく眺め入る私であつた。やがてはしけに移された私達は、間もなく海岸に着いた。弟妹達がかけつけて來て私を四方から取り卷いた。皆にこにことして元氣で嬉しさうであつた。而し其所には必ず來てくれると豫期してゐた姉の顔が見えないので「皆元氣？姉さんは？」と聞くと、弟妹達は急に

顔を曇らせて「お父さんが少し體が悪くて、手がかゝるから姉さんは來られなかつたの」と上の妹が答へた。

私はどんとつき飛ばされた感じであつた。「お父さんが悪い、手がかゝる」その言葉はとも只事ではない、ひどいのだ。暫くして私は「病氣ひどいの？」と聞くと、「お父さんが血を吐いたの」今度は弟が答へた。「どうして私に知らせてくれなかつたの？」と聞くと、

「お父さんが知らせると心配するからと言つて止めたの」と妹が答へた。

私は歸つて眞先に元氣で迎へてくれる父の顔が見たかつたのだ。それなのに、血を吐いて重病の床についてゐる父を見ようとは？ 私はそこで大聲を立てゝ泣きたかつた。やつとがまんして家に歸り着いて見ると、父は絶對安靜のまゝ青い瘦せた顔を天井に向けて、蚊帳の中に寝てゐた。私を鹿兒島まで送つてくれたあの時の父の元氣な姿が、たつた四月見ぬ間にかくまで變り果てゝしまふと誰が思ひ設けよう。私はこの痛ましい父の姿を一目見ると、もう我慢が出來ず、つい見せてならぬ涙を父に見せてしまつた。

涙をおさへながら「只今歸りました。」と挨拶すると父は瘦せた顔に笑顔さへ見せて、「元氣

で歸れてよかつたね」とそれだけ云つた。それから又「男の子が生れて嬉しかつたか」とあへぐ様に云つた。病苦の中にも出るこの言葉を聞いて私は、男兒を設けた父の喜びを察する事が出來、「嬉しかつた」と答へると、父は嬉しさうにほゝ笑んだ。

生れたばかりの赤ん坊は元氣な可愛いゝ子であつた。父が作郎と命名したさうだ。それは自分の様に弱くては困る、作男の様に丈夫に育つ様にとの心遣ひからであつたとの事である。

それからは私は父の側につききりで看病した。體をさすつたり、手足をもんだり、頭を水で冷したりした。それから赤ん坊を父に見せる事は忘らなかつた。

私は何とかして再び父の健やかな顔が見たい、あゝ今一度。と神に念じた。それはもとより家内一同の願ひであつた。お拂ひだの、祈禱だの、平素迷信と冷笑してゐた事までも眞剣な氣持でやつた。

醫者は父が吐いた血は、肺から出た喀血で無く、胃から出た吐血だといつたが、病名は中々判らないらしかつた。今にして思へば胃潰瘍であつたかと思ふ。其後血も出ず稍小康を得

たと秋眉を開いたが、其後今度は喉が痛んで食物が通りにくい様になつた。それも醫者には病名がなか／＼分らないとの事である。鹿兒島に行つて名醫の診察を受け、せめて病名でもはつきりさせて貰ひたいと願つたが、病み衰へた父は、動かす事すら出来ないのである。さうなつては只管神を念する外に道がない。只祖先を念じ、神を念じたが更に効果が見えなかつた。

四十日の休暇はたうとう父の看病で暮れてしまひ、いよ／＼上鹿兒といふ事になつた。その頃何とか小康を保つてゐたので、學業が大事だから立つ様にと父も家族もすゝめてくれたが、私の心はすゝまなかつた。ところが幸にも、學校から赤痢が流行してゐるから休暇を延期するといふ知らせがあつた。之こそ神の助けと私は父の病床を離れず看病につとめた。其後再び父は少量の血を吐いたが、その時もうやら落ちついて小康を得た。私達は神の奇蹟をのみ念じ求めたのであつた。然るに忘れもせぬ九月十六日の夜、月が清く照つてゐる晴れた夜だつた。弟妹達は皆綱引に出て私達は父の看護をしてゐた。すると父は又多量の血を吐いたなり、首をがくりと垂れてしまつた。

スワ大變と、母は父の元に馳せつけて来る、私と姉とは醫者の許にと家を飛出した。子供達の綱引く聲が夜空に澄んで聞えてゐたが、私達は夢我夢中で月の夜道を駈け続けた。そしてやつと醫者を雇つて家に歸つた時は、已に遅かつた。父はこときれて、早や冷い物言はぬ人になつてしまつてゐた。私は大聲で父の名を呼んで泣き続けた。

父は四十三歳の若さで世を去つてしまつたのである。

今でも月の冴えた夜は、あの夜の事を思ひ返して思はず涙ぐむ事がある。殊に中秋十六夜の月は来る年々に、亡き父に涙を手向ける夜となつたのである。

その頃の師範教育

私は父の死に逢ひ始めて嚴肅で最も深刻な世の悲しみを味はひ暗い気持ちで、再び母校に歸つて來た。而し私はさう何時までも悲しまなかつた。父は私の師範入學を最後の喜びとして死んだのである。何の遺言もなかつたが、只生前「弟妹達の事はいねが見てくれるだらう」といつた信頼の一言は正しく私には父の遺言として受け取れたのである。一生懸命勉強する

事が、地下の父への孝養であるといふ氣になつて勉強にいそしんだ。

此所で私達の受けた師範教育を一寸懐古して見る事にする。當時は女子師範學校でなく師範學校女子部であつた事は前に述べたが、在學期間は、男子四年、女子三年でその内最後の年の後半は教生として、附屬小學校に出向き、實地の練習をする事になつてゐたから、みづちり學科を學ぶ期間は、二ヶ年半であつた。

而も當時吾々の受けた教育は悉く注入主義であつた。女子に取つて最も樞要な學科と思はれる家事科の如きも、校内に何等の設備もなかつたので、調理や洗濯法等でも先生が教室内で口授されるのである。

今にして思へば、吾々は生きた學問をやつたのでなく、死んだものを學んでゐた感がある。注入主義教育にしても、小學校で學んだ時の様に、親切に疊み込んで貰ふのならよいが早口に一人でしやべると云ふ教授が多く了解するのに困難な事が多かつた。

化學室は男女共用になつてゐたが、男子は女子よりも一年も在學期間が長かつた故か、よく化學室等で實驗等やつてゐたが、女子は之もやつぱり耳から説明を聞いたり、先生が机上

で實驗されるのを見るだけである。

物理でもやはりその通りである。本當に情ない教育を受けたものだと思ひ返される。

當時は數學等は最も大事な學科の様に思はれてゐたに拘らず、我々は代數も學ばず幾何もほんの初歩のもので、今の高等科の程度にも劣つてゐた。頭を用ひる學科が大事がられて、書方だの、圖畫だの、裁縫等の技能科は、非常に輕んぜられて、あまり本氣になつて勉強しようとしなかつた。

音樂も極く幼稚でピアノ等は無く皆オルガンであつた。ペビーオルガンが幾つか備へてあつて練習はよくやつた。ヴァイオリンは其の頃よく流行つたものである。

體操は徒手體操の外は、球幹とか、亞鈴を用ひてやつたものだが肋木に上つたり、臺を飛び越したり、マットの上をでんぐり返つたりする様な勇敢なもの無く、ダンス等も極く單純なものを、一二種習つたきりであつた。大體に於て技能科や、體操・音樂といった様な學科を非常に輕視してゐたので、自然先生方にも學科の輕重感に比例して、輕重をつけて考へた様に思ふ。

こんな教育の中にあつては特に何の學科が好きといふものは出来なかつた。私は小學校で特に理數科が好きであつた事を前に述べたが師範に入つてからはそんな特徴もなくなつてしまつた。

勉強と云つても試験が有るから點を採る爲の勉強で、趣味的に勉強するといふ風はなかつた。只小學校と較べて有難いと思つた事は、豫習・復習の時間を充分持つてゐる事である。家庭の仕事に追ひかけられて殆ど自分の時間を與へられなかつた過去に比べて、今は悉くが自分の爲に用ひるのであるから、努力さへすれば、實力の向上は計られたのである。兎にも角にも勉強は眞面目にやつた様に思つてゐる。小説は割合よく讀んだ。徳富蘆花、尾崎紅葉のものをよく讀んだものだつた。

私はクラスの誰よりも年が若く經驗も乏しかつたので、判斷力や、常識等に於て初の中は周囲からの壓迫を覺えたがクラスが進むにつれて、成績も進み卒業の時は席次も上位の方を占める事が出来た。

吾々が二年の時校長三浦先生が轉任され、教頭の野島先生が校長となられ、教頭の後任と

して赴任されたのは、今の奈良女高師附屬主事木下竹次先生であつたが、流石後日大をなす人物だけあつて、當時から實に底光りのする先生であつた。

教育や教授法の學科を擔任して頂いたと記憶してゐるが、先生は右に或は左に首をかしげてお話をなさる癖があつた。御教授は少しも華やかではなかつたが諄々と説き進められる教授の流れに、じわ／＼と熱が加はり私達をいつの間にか話の中に融かし込んでしまはれるのであつた。一二度御教授を受ける間に凡庸の先生でないといふ事を感じたのであつた。一時胸を患つて呼吸器専門の海濱病院に入院された事があつたが、先生の偉大な精神力は、遂に肉體の病魔を克服して、再び教壇に立たれ倍舊の健康力を今日に保たれてゐるが、其後男女師範の分立と共に、女子師範校長となられて後、今日の位置に進まれた方である。

私が二年になると弟が縣立一中に合格して、上鹿し寄宿舎に入ることになつた。そして時々私の寄宿舎を尋ねて来てくれた。小さな體に霜降りの制服を着た姿は、丸々と肉付がよく健康さうに見えるのが、私には一入いじらしく嬉しかつた。

三年の後半は教生となつて、實地研究にいそしむ事になつた。私は高等三四年の複式學級

であつた。自分と年が三つか四つしか違はない大きな生徒の前に初めて立つた時は夢我夢中であつた。顔をあげて生徒の顔をまともに見る事さへ出来なかつた。後の高師訓導、東京府視學官、東京市學務課長に歴任された肥後盛態先生等が附屬訓導として敏腕を振つてゐられた頃である。

令名ある東京市廣尾小學校長赤崎氏は私と同窓である。が尋一から尋四までの單級の教生となつてゐられたが、訓導はだしの老練な教授ぶりに、女子教生が大學して參觀に出かけたりしたものだつた。

時に十人も二十人も男子の教生達に不意打ちされ、面喰つてどぎまぎして何をやつたかさつぱりわからなくなつた事等もあつた。教生時代には寄宿舎の話題が多く、お納戸會議を賑はしたものだつた。

學校在學中勃發した國家的の大事變は日露の開戦であつた。大國ロシアを相手の戦争故、前古未曾有の國難として上下の心は灼熱の火の如く愛國心を燃え立たせた。

軍籍にあつた、私に取つては大事な一人の叔父が、第二師團第四聯隊長として出征した。

私は日本の國難突破を祈る心と叔父の武運長久を念ずる心とで、心はいやが上にも緊張した。遼陽の戦には叔父が輕傷を負ふた知らせを受けた。勝利を報ずる號外の鈴の音に若き血は湧き肉は躍るのであつた。

かうした國家的總力戦の眞只中にあつて私達には三度春が訪れた。いよいよ卒業である。

厳かな式典に望んで、校長先生よりうやうやしく卒業の許文を頂戴した。

夢の如く流れ去つた學窓三ヶ年の後を思ひ返した時私には只感無量のものがあつた。

「仰げば尊し……」と式場で歌つてゐる自分の聲がしめやかなリズムに乗つて陽にしみ透つて行つて熱い涙がはふり落ちた。嬉しさ、悲しさ、希望等を織りませた名狀しがたい涙であつた。

かくして私は兎にも角にも十九歳の三月先生となつたのである。若き日の大きな一つの夢が結實したのである。榮ある姿を見て喜んでくれる父のないのが只一つの悲しみであつた。

縣教育十五年

新任學校

縣廳に出頭して知事さんから本科正教員の免許状を頂戴し、又新任校の辭令も同時に拜受した。胸轟かせ乍ら開いて見ると私の郷里から七里の遠距離にある中種子村野間尋常小學校で初任給は大枚十三圓であつた。

野間といふ所は私の郷里西之表に次ぐ開けた土地とは聞いてゐたが、一度もその地を踏んだ経験がなく、七里を遠しとする理由は徒歩するか、馬の背をかりる外、何等の交通機關がなかつたからである。郷里の母校へと願つたが、然しどこでもよい命ぜられるまゝの處でうんとやらう、さう覺悟がきまつてしまふと、まだ見ぬ土地、まだ見ぬ學校を懐しむ氣持が湧いて來て様々に想像して見るのであつた。

十八人のクラスの友もそれ／＼赴任の地がきまつて、悲喜こも／＼であつたが、先生となつた喜は皆一つであつた。そして思ひ思ひの希望に輝く眼に涙を光らせ乍ら三ヶ年の思出をこめて抱き合ひ、手を握り合つて、遂に分れ分れになつてしまつた。それから三十六年になるが、一度も逢はぬ友の方が多い。東京に二人の友がゐたが、一人は一昨年物故し、今は一人だけになつた。それも三十年目に東京で始めて邂逅し、赤い帯を締めて別れたあのつやつやした顔に幾筋もの皺が疊まれてゐる姿を見た時は、實に感無量であつた。夫を亡ひ四人の母となつてゐる。

十八人の中已に物故した友が六人迄ははつきり分つてゐるが、其後の消息さへ定かならぬものが随分ある。私の最も親しかつた一人の友は數名の母となり、長男は醫博となつて八幡に住んでゐる。文通してゐるのは此の友一人である。

私は三枚の許文を握つて郷里に歸つた。皆喜んで迎へてくれたが、父の亡い事だけが涙の種子であつた。私は早速神棚に三枚の許文を供へ、父の靈と祖先の靈に感謝した。祖母と共に募參して、新しい父の墓碑に額づき同時に祖先の靈に榮ある今日を報告し感謝した。又恩師をお訪ねして心から喜んで頂いた。

任地にはわざ／＼母が連れて行つてくれる事になつた。七里の道程を、荷物だけ馬に積んで、私達は徒歩で行く事にした。朝家を出て夕刻着いた。初めて見る野間の町には商家の屋根が並び、道には垢ぬけのした女等もたまには歩いてゐたが大方は鄙びた人が行き來してゐる。學校は町はづれのだら／＼坂を下つた左側のところに建つてゐたが、四學級しかない學校だからこぢんまりした粗末な木造建であつた、その傍に土間を中に挟んだ小さな二軒長屋の住宅があつて、その一方には校長の四人家族が住み、他の一方が私の住宅に當てられてあつた。八疊・三疊の二間に臺所がついてゐた。八疊の間には一寸した床の間があつて南側に陽當りのよい縁側がついてゐた。

母は何くれと私の事を校長夫妻に願ひして一兩日の後歸つて行つた。

校長は二十九歳の青年で、色は淺黒かつたが病身らしく細長い體格であつた。右足に故障があるらしく、少し足を引きずる様にして歩いてゐられた。外に四十がらみの一見之れも病身ではないかと思はれる様な體格で、作りは大柄だが胸がうすくばかに肩幅の廣い人が居つた。口の上にはぼさ／＼した油氣のない八字鬚を生やし顴骨が出つ張りぼ／＼がへこんでゐ

た。よれ／＼になつた着物に小倉の長い袴を地に引ずる様にして歩いてゐた。今一人は准教員の若い青年教師で、之は中々眞面目できび／＼した人の様であつた。そこへ私が一枚加はつたわけだ。

尋常一年から四年といへば子供は腕白盛りである。此處の子供は筒袖に垢じみた帯をしめてゐた。女の子達も男の子と見分けのつかぬ格好で、廣い校庭に蜘蛛の子を散らした様に跣足で飛びまはつて遊んでゐるのが眼に入つた。

私は學生時代のまゝの筒袖の着物に海老茶袴をつけ靴ばきといふいでたちであつた。

型の如く新任式が擧げられたが、お粗末な身なりの可愛い／＼眼が珍らしいものでも見る様にきよろ／＼眼を輝かして私を見てゐる。式がすみ私が運動場に出るとぞろ／＼たかつて來る、私が頭を撫でてやると、嬉しさうにつこり笑つて私の海老茶袴を撫でたり引つ張つたりするので。天真爛漫な自然兒達は師になづむのも早かつた。私は尋常三年を受持たされたがこの學校では總て男女混成學級であつた。

だん／＼聞いて見ると校長は結核性の關節炎らしく膝頭が圓く腫れ上つてゐる。熱がある

といつて休む日が多かつた。

四十がらみの先生が校長代理でやるのだが、始業の鐘が鳴つても中々立ち上らうとしな
い。目尻にお人好の皺をよせてあいそ笑ひをしながら「まあゆつくりでいゝですよ、お茶で
も一杯お上りなさい」とゆうくたるものだ。ふかくと煙草をふかし乍ら言ふのだ。新任
早々でさうすげなくも振舞へないと思つたが教室でわい／＼騒ぎまはつてゐる児童の聲を聞
いては、そんな言葉にかまつてゐられず、さつさと出かけて行つては授業をやつたものだつ
た。廊下を通りがかりにその先生の教室をのぞいて見ると、豆の様な児童を前にどつかと椅
子に腰を下し、悠容せまらず、竹の鞭等動かして、何か説明してゐるのである。子供等はそ
んな事におかまひなしにわい／＼騒ぎ廻つてゐる。

或日の事、ふとその先生の黒板を見ると草書めいた字で大きく「擇友」と記されてゐる。
綴方の時間らしい。それが題目なのだ。「擇友」あれが一體尋常二年の作文の問題か知ら、と
つぶやいたのであつた。流石に私も黙するにしのびず先生に聞いた。

「先生あの擇友といふのは綴方の題目ですか」

「さうですよ」

と又目尻に皺をよせて笑ひ乍ら答へる。

「あんなむづかしい言葉の意味が子供に解るのですか」

「わかりますよ」

と誠に簡単な答へである。

「も少しやさしい題の出し方はないでせうか」

と私が又押返す様に云ふと、先生はやつぱり目尻に皺をよせたまゝ

「教へんでも飯を食ふ事を覚える人間だから、子供だつてあの位の言葉は解りますよ」

私は一本やり込められた形である。此所まで行けば児童心理も何もあつたものではない。
先生が少しでも若いものゝいふ事を聞いてやり、取るものがあれば用ひてやらうといふ眞摯
な向上心を持つてゐてくれたら、學校で習ひ覺えた新智識の一端をも吐露して見る氣にもな
るが、相手は更に無關心に笑つて片づけようとするのだ。私はだまつてしまった。それから
私の心はこの先生を擇友先生と呼ぶ様に印象づけられてしまった。

擇友先生は放課後になると、小使にお茶を入れさせて、私達にも振舞ふのである。一生懸命綴方を見たり、習字の直しものなどしてゐる私達にいろ／＼と雑談しかけるのである、それも普通の世間話なら耳を傾けて聞く氣にもなるが、此の地方の裏面や自分達のみだらな行動を憶面もなくしやべつて聞かせるのである。

清淨の家に育ち、厳格な寄宿舎生活しか知らぬ私には只驚く事ばかりであつた。そんな世間もあるのか、それはまだよいとして、神聖なるべき教壇の人が学校の職員室でかうした猥談等口にするとは言語道斷と心に怒りを覚えつゝ、成るべく聞かぬ事にしてゐた。然しお人好の擇友先生は、人が聞かうと聞くまいとそんな事はあまり問題ではない。自ら談じ自ら楽しんでゐるのだ。

ひよく／＼びつこを引きながら青年校長は時々學校に顔出しするが、やはりこんな話に興味があるらしく、笑ひ乍ら聞いてゐる。否聞いてゐるだけでなく、調子を合せて談笑に耽るといふ風だつた。

眞の教壇人としての面目を發揮してゐるのは、准教員の若い先生であつたが、私が赴任して二三月経つと、此の青年は志を立て、上京し勉強にいそしむことになつて學校を去つた。

何と情ない學校になつたものだらう。後は病人の校長に擇友先生と私だけである。が私は若かつた。精力は幾ら使つても使ひきれないものを貯へてゐる。教育を愛し、教育に殉ずる心構へは充分出来てゐた。情ない學校に赴任したものと時々悲しくはなつたが、かうした學校であればこそ私が必要なのだ。と心に語り聞かせては、校庭で子供等の頭を撫でたり、鬼ごつこなどして遊んだり、あの學級、此の學級のかけ持ち等して働いて働いて働きぬいた。やがて准教員の若い先生が見えた。非常に明朗で研究心にも富み、教育を楽しむ人であつた。

そのうちに學校長は病氣が重り、鹿兒島のさる病院に入院する事になつて、學校は留守になつたが、たうとう其の年の冬を越す事が出来ず、再び學校に歸らずして黄泉の客となつたのである。

先に上京した青年教師は、上京後非常な苦闘生活を續けて、勉學にいそしんでゐると聞い

てゐたが、遂に胸を病んで倒れ、小さな白木の箱の中に白骨となつて歸つて來た。

自分の身邊にあつた人々がかうして次々に、朝露の様に脆く死んでしまふのを見るにつけ、若くして動き易い私の心は、暗く閉ざされてしまふのであつた。

さうかうする内に一年は経つた。三月末の或日、私の母校榕城校への轉任辭令を受けたのである。此の時大枚一圓の増俸があつた、思ひ設けぬ事であつたので、びつくりしてしまつたが郷里に歸つて、自分の家から母校へ務めるといふ事は、私としては嬉しい事であつた。教師に恵まれぬ教へ子達に思ひを残し、幸あれと祈りつゝ、此の地を後にしたのであつた。

誘 惑

母校には恩師も待つてゐて下さるのだ。かつては師に憧れて教育の道に躍り出た私だつたが、今はその師と机を並べて育英の道を進むことになつたのである。始めて學校へ出勤して見ると非常に喜んで、而も言葉さへ改め同輩に對する如く迎へて下さるのには只々恐縮する外はなかつた。

それと私の先輩が三人ゐて私を迎へてくれると楽しんで來たのに、私より一年先輩の友の姿が見えないのを不思議に思つて尋ねて見ると、意外にも數日前不意打の辭令を受けて、島の南の端の小さな學校に赴任したのだと云ふ話である。私は母校に榮轉した喜びを持ち、友は母校から轉落して田舎に赴かねばならぬといふ不思議な運命を、何かすまぬ事でもした様に心が痛むのであつた。若し私が前任地に止まつて友が助かる事だつたら、私は喜んでそれに甘んじた筈であつたが、只命ぜられるまゝに動いて來た私であつたので、如何んともなす術がなかつたのである。

赴任して數日経てからであつた。前任地で一度參觀に來られて親しく挨拶を交はした顏馴染の某教育上司の許に赴任の挨拶に出かけて行つた。その節又私の一友人の妹の事で裁縫教師になりたいといふ希望をきいてゐたので、一寸その事を頼んで見た。するとその人は快諾し、よい口を見つけてやると口約されたのである。其時この上司の人は

「あなたをこちらに轉任させる爲には随分無理をしたよ」と云はれるのだ。

私にはそれが始めのうちは何の事を云つてゐられるのかさっぱり判らなかつたが、はつと

思ひ當つたのは友の左遷された事である。

何かそれと連絡がある様に疑つたが、然し何の工作をも用ひなかつた私に何の理由で榮轉させる譯がないと思ひ返して、私はさりげなく禮を述べて其日は歸つたのであつた。

數日経つた或日その人から手紙があつて、依頼の件についてよい口があるから一寸自宅まで来る様との要件が認めてあつた。

この人は内地に妻子を残し、單身某家に下宿して役所に勤務してゐたのである。

私は指定された時刻にその下宿を訪れた。すると私の依頼を叶へる爲め非常に骨を折つた願末についてつぶさに物語り、遂に某校に奉職する様に取きめた旨を告げられた。

私は心からその厚意を謝し幾度か禮を述べつゝその家を辭し去らうとした。すると、一寸、と呼び止めて、

「今夜の幾時頃、某所に待つてゐるから、出かけて来てくれないか」と云ふのである。

思ひもよらぬ時、思ひもよらぬ事を云はれたので私は只茫然としてその人の顔を凝視したのである。

頃には返事も出なかつた。「この人は一體何を私に求めんとしてゐるのだ。何を求めんとし、て私を榮轉させ、又私の依頼に盡力してゐるのだ」と云ふことを擇友先生から散々人生の裏面史を學んでゐる経験者の私にはすぐに了解出來たのであつた。

おゝ唾棄すべきその言葉、憎むべきその行爲、清淨に育つた私の若き正義感は押へ難き怒りをさえ覺えたのであつた。

然し男尊女卑に馴らされ、又長幼の序を強く植ゑつけられた私の心は、自分の激情にまかせてこの人を面罵するといふ事をしないだけの冷靜な心の用意が出來てゐたらしく、何げない風で、

「私の家庭は中々嚴格で、夜など一人あるきをした事がありませんので、折角の御言葉ですがお許しを頂きたい」と嚴然と衿を正して答へたのであつた。

然しこの言葉はその場の出たらめではなかつた。事實私の家庭から暗い田舎道を一人で夜など出歩く様な事は一度もなかつたから、巧まずしてかうした言葉が出たのである。

流石に其人は二の句を繼がうとしなかつた。そして私の顔をまともに見るに堪へない風情

に見えた。其後は學校などに參觀に見えても、何時も私から目をそらす様にしてゐた。

私は前任地で擇友先生に、神聖なるべき職員室で様々の聞くに堪へない話の數々をきかされてすら、教壇人として許すべからざる事の様だに思つたものだが、之れは又吾々を指導監督の任にある上司なのだ。悪徳行爲の部下を取締るべき重責を帯びるものが、何といふ教育冒瀆であらう。擇友先生は自ら談じ自ら楽しむといふ風で決して人を毒する様な行爲に出たのではなかつた。然るにこの人は實行に訴へて部下を誘惑し之れを毒せんとしてゐるのである。悪質の點に於て數等上手である。世には上司といふ權威に物を云はせ、親切を賣りものにして恐るべき毒牙の魔手をのばさんとするものが往々にしてある。私は幸に嚴格な家庭教育によつて救はれたが、その後同じこの上司にまつはる艶聞を二つばかり耳にしたのであつた。

恵まれた母校時代

母校に轉任してからの私は安全地帯におかれた様な心のゆとりを感じた。前任地に比べて

校舎も大きく立派だつたし、設備もよく、先生達も手揃ひであつた。殊に恩師先輩と机を並べてゐるのだから子供の様な氣持になつて、只一筋に己が托された學級を經營すればよかつたのである。

下學年は考練な男の先生が擔當し、高等科は恩師や先輩等の擔任となつてゐたので、私の最初の擔任は尋常三年だつたかと記憶してゐる。

内地の學校で鍛へ上げて歸島し、新らしくこの學校に赴任したMといふ先生は實地授業の老練な點に於て頭の下がる人であつた。私はよくその先生の處に教科書をもつて行つて教案作成について指導を受けたり、先生の學級を參觀したり、特に私の授業を見て貰つて批評を仰いだりした。

師範で私より二年の先輩である大牟禮女史は一見男と見まがふ様な容姿の人であつたが、接して見ると氣だてが優しく親切で、頭もよく教育には實に熱意をもつてゐた。綴方の添削は綿密にやるし、書方には毎日の様に朱を入れてゐた。又辭書を引いては教材の研究に餘念がないといふ風であつた。

私はいつに變らぬ眞摯な態度で精進される恩師と共にこの先輩を學ぶことにつとめた。縣から縣視學が見えて研究會が開かれた時恩師とこの先輩と私と三人揃つて研究教授をやり、三人共好評を博して嬉しかつた事も忘れられぬ思ひ出の一つである。

その頃は作業主義の教育とか體驗主義の教育と云つた様なものもなかつた時代で、教育のやり方も生活指導と云つた様な方面に頭をむけて考へると云ふ様な事はなく、大體に於て注入主義の教育ではあつたが、然し今までの様に教科書をまる暗記させると云つた様な教育の殻を破つて、問答主義によつて兒童の智能を啓發する方法など取り入れられて來てゐた。地理教授などでは盛んに有機的取扱ひなど云ふ事など稱へられて來た事などから見て、教材を打ち砕いて眞に生命の血とし肉とする爲にこなして行くと云ふ風に進んで來てゐた様であつた。

母校は先きに分立して男女の兩校となつてゐたが、兩校は兄弟學校としていつも仲よく共同で研究會など開き、お互に切磋琢磨してゐた。男子校のIといふ先生はすばらしい新智識の所有者で、その述ぶる教育意見や批評など一頭地を抜いて吾々を啓發するものが多かつた。

た。この先生は非常な勉強家で、當時は倫理の文檢を取るのだと云つて専心その研鑽にいそしんでゐられた。又學校では潑刺たる元氣で教壇にその蘊蓄を傾けてゐる。その敬虔な態度は私達若いものゝ心に大きな刺激劑であつた。

「人を教ふるものは先づ自らを培ふべし」などと云つて私なども此の時代には盛んに勉強した。そして私も一時は倫理の文檢を受けて見ようと決心して、難解の哲學書や倫理學・心理學・教育學、さては支那哲學の古學派や朱子學派・王陽明學派等の大冊の本を抱へ込んで難解の漢文など嚙み砕かふと一心不乱に讀書したものだつた。

遂に一度も受験しなかつたので、その頃の勉強が今のところ形に現れて何になつてゐるといふ譯ではないが、瘦せて赤茶けたかさ／＼の地質でも肥料を施せば軟かな黒土と變質する様なもので、吾々の智能の地盤となる潜在意識の中にしみ込んで、私の生命力を濕ほしてくれてゐるのではないかと思つてゐる。今日では雑務や世事に忙殺される事が多く、新刊書でもゆつくりひもとく暇がなくなつたが、昔讀んで養はれた潜在力が何かの場合に役立つられる事が多い様に思はれる。この頃は又よく私は文章を書いて楽しんだものだつた。それを

何にするといふ目あてがあつた譯でもない。雑誌や新聞に寄稿する爲でもなく、研究論文にする譯でもない。只書いたのである。大方論文體の堅いものであつた。その頃書いたものをしばらくたつて読み返して見ると、とても幼稚で讀むに堪へず、破棄したものだつた。それだけあの時代の自分には成長があつたのだと思はれる。今日では前のものを讀み返しても破棄したくなるものがないばかりか、寧ろ昔のものによいものを發見したりするが、それだけ生命の進展がストップしてしまつたのかも知れぬ。

當時を回顧すれば何等の迂餘曲折もなく、坦々たる教員生活であつたけれども、非常に恵まれた教育環境の中に浸つて、眞の師道を實踐し得たと共に、又よく自らを養ふ上にも悔なきを得たと喜んでゐる。

家の窮乏

母校に轉任して家庭に起臥する様になつた私は、公生活に恵まれてゐた様に家庭生活に於ても恵まれたものであつたらうか。肉身の愛の中に起臥する事は無論不幸である筈はないの

だが――。

私の家庭には父の死後様々な不幸が重なつて、母の勞苦が痛ましい程倍加され、それが又延いては私達の苦惱の種子でもあつた事を記さねばならぬ。

それには先づ遡つて家の經濟状態から書き出さなければならぬ。

私の家の石高は維新の際三十石に減ぜられた。然しそれは私の地方での最高額であつたのだから他から見ると相當の財産家でもあるかの様に考へられてゐた。

然し内部の經濟状態は決して豊かなものではなかつた。小作からの上納米を十人の大家族が一年中食べなければならぬ。それを天引した残りのものを賣却して、相當額の税金を納める。その剩餘のものが一家の諸經費にあてられるのであるから、贅澤どころの沙汰ではなかつた。

きやうだいの多い私達は他所の子供の様に満足な藁草履も履かされず、尻切れでちぐはぐになつたものを履いて小學校にも通つた位であつた。

私が師範に入學して間もなく父が病死してからは、母は急に内外多端の身となつて、經濟

一切の切り盛りまでしなければならぬ様になつたのであるが、如何に費用のかゝらぬ學校とは云へ、私の小使錢位は送金して貰はねばならないのである。又その翌年弟が縣立一中に入學してからは其の方の送金が増はつたのである。弟は父同様強い風にも當てないといふ大名育てをしてゐるのだから私の様に切りつめた小使錢では足りないし、又總てが私費であるから月々相當な送金を必要としたのである。

上納米の外に何の収入もない私の家では、何もかもそこから絞り出さなければならなかつたのである。

祖先が大事、家が大事で固められた私の家では祖先傳來の財産に手をかけるといふ事は、天地が逆さになつてもすべき事でない。命よりも大切なものとお大名の父ですら考へてゐたらしかつた。

父の病が重つて治療費を作るため、母は死ぬ思ひで父の枕頭に坐り、「杉山を賣りませうか」と父に相談をかけてゐた事があつたが、父は「賣るに忍びない」と答へて、たうとうその時も手離すことをしなかつたのである。父の命を救ふ爲にすら躊躇されて、大切に守り通

されて來た財産であつた。又それあつたが爲に家の權威も保たれて來たのであつた。

ところが父の死後思ひもよらぬ大異變が勃發して、この祖先譲りの大事な財産が大きな危険に曝されなければならなかつたのである。

父は所謂お大名育ちで何の苦勞も知らずに暮した人であつたが、家庭をのみ楽しんだ人であつたから、金錢を浪費する様な事はなく、死の床にあつてすら自らの治療費に杉山を賣る事を肯んぜなかつた位であつたが、此父に一代の失策が死後に残されてゐようとは誰れも知るよしがなかつたのであつた。全く寢耳に水の驚きを喫しなければならなかつたのである。父の生前母は只家事一切の事に忙がしく身も世もあらず働いてゐたから、表面上に立つ事は一切父の領分おんぶんで母の親おやひ知る處ではなかつたのであつた。又父も母に何事も語らなかつた様である。

父には生前澤山の友達があつた。父に多少の財産があり又家に遊んでゐる事が多かつたので、取まきの友人達と共同で網だの、椿油だの煙草だのと可なり大規模の事業をやつてゐた事があつた。それもしばらくで止めになつてしまつたが、それ等の資本が總べて借金になつ

てゐて、私の家の田畑がその擔保に這入つてゐたのであつた。かくまで守り通されて來た河内家の財産であつただけに、家の一大事であり驚天動地の大異變であつた。これを如何にして突破するか、當面の大問題であつた。母はあちこちと血のにじむ心の痛手を忍びつゝ奔走した。

肉體の勞働には馴れ切つてゐる母であつたが、初めて嘗めるこの精神的重壓には堪へ難いものがあつたに相違なかつた。さうした中から私や弟への送金はどんなに苦勞であつたか想像するだに私の胸は痛んだのであつた。

やつと私が卒業して十三圓の月給にありついたと云ふことは家にとつての大きな福音と云はねばならなかつた。私も母の勞苦を幾分でも軽くする爲に、月々の送金を少しでも多くし様と自分の生活を極度に節約これつとめたものであつた。

私が母校に轉任した頃も未だにその問題は片づいてゐなかつた。そして財産差押への憂き目をさへ見なければならなかつた。家財調度一切のものに封印の紙が貼られた時の氣持は一種悲愴なものがあつた。

氣丈で何事も黙つて忍ぶ母であつたが、此頃の母はひどく面やつれがして、時々やるせない吐息をさへ洩らす事があつた。

家内は何だか火の消えた様に、暗く心が閉ざされて滅入つてしまふ様であつた。

中學に入學中の弟はその頃だん／＼體が弱くなつて風を引いたり氣管を痛めたりしてゐる事の知らせがある。母は苦勞の中から鶏のスープを混じたお米の飴あじを煎じて送つたり、卵を方々から買ひ集めたりして送つたりした。

その中弟はどうか中學を卒業したが、體にむりが行かない様にと早稻田大學文科に入學した。ところが一年位たつた頃再び健康を害ねて歸島したのであつた。大切な跡取り子が病氣で歸つたといふ事は又家をあげての心配の種子であつた。

その中に上の妹は女子師範に入學する事になつた。女の子にも何とかして中等教育だけは授けてやりたいと云ふのが母の念願であつたと思はれる。

母のがんばりで何とかここまでつばつて來た擔保や保證の方が、この頃になつてもう如何ともする事が出來なくなつてしまつて、たうとう祖先傳來の不動産の大半を人手に渡して

しまはなければならなくなつた。

祖母は愚痴るし、力になつてくれるものはないといふ有様である。母は刀折れ矢丸はつきたといふ思ひで、只々祖先に申譯ないとの言葉を繰り返すのみであつた。

あんなに元氣だつた母はその頃からめつきりからだが弱くなり氣力をも失なつてゐた。

胃が悪くて食慾が進まないといふ日が多かつた。

軍人の叔父には何も知らせてなかつたが、祖先の財産に手をつけたと云ふ事は黙する譯に行かず、たうとう家の窮乏を知らせる事になつた。叔父は母に同情して妹の學費だけを助けてくれる事になつたので幾分愁眉を開くことが出来た。

こんな中にあつて少ないにもせよ私の月々受ける給金がどんなに役立つたか、私の力で母を助け母をいたはる道は只一つ、月々の月給をそのままそつくり母の手に捧げると云ふことであつた。さうした意味で私は月々の俸給日を鶴首して待つたのであつた。それが又父の生前の一言にも答へる道と私は信じてゐた。姉は又母に家事の辛勞をかけまいとして臺所一切の世話を引き受ける様にしてくれた。又妹達もだん／＼成人して來て手傳ひ等には手をかゝ

ぬ様になつてゐたから、母もその點では昔ほどの苦勞はなかつた譯である。

結婚を捨て、教壇へ

若い娘時代には自分の將來と云ふことについて様々な夢をもつものである。

殊に私は誰よりも大きな夢を見たがる方であつたから、自分の配偶者と云ふものに就いても絶えず何かの夢を見續けてゐた。

家庭に起る様々な現實にかうした夢を打ち碎かれつゝも、なほ不思議に夢を追ふ私であつた。

月並な結婚はしたくない。何か素晴らしく奇抜な人と結婚したい。こんな考へがいつも胸中を去來してゐたものである。

然し小さな島の中のことである。さう澤山奇抜な結婚の相手が見つかる筈はない。

又私の郷里では向學の風が強く、相當な頭と、どうか學費が貢げるといふ家の青年は大都會に遊學して身を立てるといふ風であつたから、郷里には之れといふ様な見込のある青

年は残つてゐなかつた。

私が郷里の母校へ轉任して二三年経つた頃のことである。私の郷里で只一つの女子中等學校と名のつく女子職業學校と云ふのが母校と並立されてゐた。校長が同じで職員室も皆一しよであつた。

そこへ熊本から來てゐたMと云ふ青年教師があつた。熊本で相當な資産家の次男であるといふ噂であつたが、本人は少しもそんな顔を見せないし又口にもしなかつた。

實に快活で氣取つたところがなく、又親切で親しめる人であつた。

よく庭に出てテニスなども一所にやつたりした。然しそれだけのことで私としては同僚以上の何ものでもなかつたのである。

ところがふとした機會にこの青年は、熱烈な眞情を披瀝して直接私に求婚して來たのである。當時この人には親のすゝめる縁談があつて、親々の間に殆んど話がまとまり、只本人の最後の確答を求めて來てゐるのだといふ切迫した話であつた。

この事情をきいて私の若い心は何か熱いものを感じなかつた譯ではないが、さうかと云つ

て躍り立つ様な心の感動は何も湧いては來なかつた。

その頃は技能科といふものを非常に輕視する風があつた。工業學校を出たこの年若い教師は機織や染色を擔任してゐた。女のやる様な仕事を男がやつてゐるといふ事は何かその人に品位がない様にさへ思はれたのである。

何の奇抜さもない月並な結婚といふ風にのみ考へられて、私の夢が喜んで之れを迎へ様としなかつたのである。然し男の少ない土地の事をも一應は考へて見なければならなかつた。或は似合の結婚かも知れぬ。さう考へると中々判断がつかかねたのである。誰に相談かけるでもなく獨りで思ひ悩んでゐた。

さうする中に様々な家の財政問題が私を押しつぶす様に、この悩みぬいた心の中に織り込まれて來た。そして父の遺言を今更の如く思ひ返して見るのであつた。

弟の事、妹達の事、家の事、私の月々の俸給が今では殆んど一家の命の綱である。それをも振り切つて自分の幸福を求めんとする心を私は淺間しいと思つたのである。家の爲に、この縁談を断念し様と決心してその旨を答へ、話を打ち切つてしまつた。然し今にして思へば

家の爲とは矢つ張り私の夢が満たされぬ體のよい心の逃げ場所ではなかつたらうか。

この人はその時非常に落膽した風であつたがやがてその話の人と結婚し、若い美しい花嫁を郷里から連れて來た。そして間もなく神戸へ去つて行つた。

この人が後に百數十種の發明王となり、今は關西方面の實業界に相當大きな事業をやつてゐるとかきいた。して見ると若い日の夢もあまりあてにならぬものとはほゞ笑ましくなる事がある。

それから又しばらく経つた或冬休みの事であつた。弟が未だ中學に在學中の事である、鹿兒島の第七高等學校三年に在學中のTといふ一青年をつれて歸島した事があつた。

柔道三段とかいふ事であつたが、柔道選手特有のがつちりしたたくましい體格が如何にも男性的に見えた。又二本の白筋の這入つた七高の學帽が何とも云へぬ魅力となつて若い私の胸にしみ入つて來るのであつた。

だん／＼話にきくと實に數奇な運命の青年であつた。父は鹿兒島の内地人であるが、妾腹の子で生母は屋久島の人である。それでこの青年は屋久島が郷里だと云つてひどく母の事を

大切に云ふのであつた。一時父の許に引き取られてゐたが、青雲の志を抱いて着のみ着のみ家を出して上京し、住むに家なく食ふに食なく、水を呑み青天井の下に寝た事があると云ふので「呑水」又は「抱天」と號してゐた。その後新聞配達などやつて苦學し乍ら東京の某中學を卒業し七高に進んだといふ奇抜な經歷をもつ青年であつた。この人には又非常に力になつてくれる盟友が二人ゐて、その友の紹介で當時内務次官であつた床次竹次郎氏から學費の補助を受けてゐた。それで床次氏からの送金や手紙などが來ると、恩人に對する禮を失はず、一度押し頂いて開封すると云ふ風であつた。如何に南國と云つても極寒になると西風が冷たくて、手足が凍える事もある。それにこの青年はひどく薄着をしてゐた。そして中々酒脱で豪放なところもある。荷物としては何一つなく、只刀を一本携えてゐた。そしてその刀を持つて無人島・馬毛島に單身行つて歸つて來たのであつた。

母なども氣の毒な又面白い人だと云つて、弟のメリヤスのシャツなど寒からうと云つて着せてやつたりしたものである。

この青年の過去又現在否將來に何か偉大なものを包藏する奇抜な存在の様に私の眼に映じ

た。今は夢でなく初めて現實となつて私の前に現はれたこの青年こそは私が多年憧れてゐた異性中の最高のものゝ如く思はれてならなかつたのである。

冬休みが終つて學校に歸る日が來た。青年は私との婚約を母に願つた。その頃家は窮乏のどん底にあつた時であつたが、母は私の將來を考へてくれたのか、あの人ならばと云ふ信頼をもつて婚約を許してくれたのであつた。

然しこの婚約は其後私から破棄してしまつた。その事情など今更云々する必要もないと思ふから省略する。「家の爲に」或はそれもあつたかも知れぬ。然し私の氣持はそんな條件を最後のものとして片づけたくはないのである。この氣持は誰に求められたのでも強ひられた屈從のものでもなかつた。全く私の自由意志なのである。私は何かそこに偉大な不可抗的な宿命が潜んでゐたと思つてゐる。

私はその後再び異性に對する夢を追ふことをしなくなつた。

この青年もその後學校を止めて大陸の方に行つたと云ふことをきいた。

そして私は父の遺言を座右の銘として家に殉じ、又一筋に教育道を邁進せんと心に誓つた

のであつた。

その後上の妹も師範を優等の成績で卒業し、一年位國上といふ學校に奉職したが良縁あつて高嶋家へ嫁することゝなつた。現在は東京の阿佐ヶ谷に教會と幼稚園とを設立して、傳道と教育事業に専念する夫を助けて元氣に働いてゐる。

次の二人の妹達もそれ〴〵ミツシヨンスクールの梅光女學院に校費生として入學し、家からは小使錢を送ることにした。上の妹は成績優秀で卒業後女子英學塾に進ませて貰ひ、しばらく母校に奉職してゐたが、今は産業能率研究所長上野陽一に嫁して夫の事業を助け又自らは家庭能率を研究して聊かなりとも社會に奉仕せんとしてゐる。下の妹も女學校を出てから保姆學校を卒業し今は東京柿ノ木坂に幼稚園を設立して幼児教育に没頭してゐる。

姉は小學校在學中から優秀な頭腦の持主であつたが、遂に一家の犠牲となつて私と等しく家に殉ずる事となつたが後に黒田家に嫁し今は三男兒の母である。

優良學校へ赴任

私には身内に燃えたいぎる情熱と、母譲りの強き理性とがいつも車の兩輪の如く併行してゐる。熱する割に諦らめも早い。一つを失へば又必ず何かを求める。だから私の心はいつも何かに希望が繋がれてゐる。

結婚を諦らめた私は家の爲に強く生きねばならなかつた。否かつて私の青春が憧れた日本一の先生にならねばならぬ。こんな夢がいつの間にか私の頭を占領する様になつてゐた。

さうして又二三年経つた時の事である。當時優良學校々長として縣下に名聲を馳せてゐた吉田といふ校長から恩師の許に一通の手紙が届いた。その中には禮を厚うした招聘の言葉が認められてあつたのである。

この校長と恩師の夫君とは師範の同窓生で、恩師の夫君が東京高師を出て和歌山師範に在職中不幸病を得て物故され、恩師はその忘れがたみの一男子を抱いて再び母校に教鞭を取つてゐられたのである。そんな關係からその奮起を促されたものであつた。

然しその頃舅姑も健在であられたし、幼児も抱へてゐられ、家のお世話もあつてどうしても其招聘に應ずる事が出来ないからと云つて私にどうかといふ御相談があつたのである。私も母校に来て已に八年を経過し、前任地を加へて前後九年島の教育につくした事でもあり、又どうせ教育者として身を立て様と決心した以上、再び島に歸るにせよ一度内地に踏み出して磨きをかけなければならぬと決心したのであつた。

家の事、最近めつきり健康を害してゐる母のこと、年老いた祖母のこと、病弱の弟や小弟のこと、一家の柱石になつて働く姉のこと、總てが心がかかりでありすまぬ氣もしたが、私は思ひきつてこの話を母に打ち開けたのであつた。

病弱の母としては身を切られる思ひであつたらうが、母は聊かの弱音も吐かず快よく許してくれ、姉も後の事は心配せぬ様と激励してくれた。

この時の母を今でも私は忘れる事が出来ない。自らの弱り行く身を顧みず、悲愴な決意をもつて許してくれた母の愛は、盲目の母に見る溺愛にあらずして、私に「偉くなれ」との暗示を含む最高の愛であつたのである。

私は母に感謝し心に泣いたのである。その代償にはどんなにしてもよい先生にならう。そして又母の勞苦を軽くする爲、どんなにでも自分の生活を切りつめて、少しでも多く送金する事にし様と堅く心に誓つたのであつた。

X

X

X

私はたうとう大正三年十月二日附の轉任辭令を受けたのであつた。即ち肝屬郡大根占尋常高等小學校訓導に補せられ、俸給二十圓を給與されたのである。又實業補習學校を兼務して二圓の手當をこの外に頂戴する事になつた。

赴任して見て成程優良校と首肯^{うなづ}ける校内の雰圍氣を感じた。職員達は大方、濼刺^{うたが}たる若手揃ひで、全身にも目の色にも何か自信たつぶりの充實した力を感じた。「見せてやるぞ、どこからでもお出で」と云ひさうな張り切り方であつた。

島の學校にゐて内實はともあれ形の上では比較的長閑な生活をして來た私には確かに大きな刺戟であり大きな活を入れられたのである。

私はこゝに赴任して始めて尋常一年といふ可憐な子供達を受け持たされたが、優良校の名

に背かず參觀の客はひきもきらすの有様で、十人、二十人と團體で見えるものもあれば又個人／＼で見えるものもある。兎に角心が忙がしくて落ちつきが保てず、ゆつくり子供の手を取つて遊んでやる暇がないのである。子供達が頭を撫でて貰つて喜ぶことも知つてゐるし、鬼ごつこや隠れん坊に師をまつてゐる事も知つてゐながら、子供の氣持を充たしてやる事が出来ないのであつた。

遊びは子供達の生活である。この家庭といふ暖い遊び場から學校へ運ばれて來たこの學校の子供達は一體どんな學び方をしたものであらうか。

口もしつかり結べない様なあどけない子供達に、手を堅く握らせて両手のこぶしをきちんと机上に並べることになつてゐた。時間中は頭をびくとも動かさぬ様とお達しである。朝禮の時など尋常一年から高等に至るまで、整然と一糸亂れぬ態勢を取らしめる様に仕込まなければならぬから、動き易い尋常一年擔任の教師は氣がもめて仕方がなかつた。が可愛いもので、叱られる事と知れば無理にもがまんしてくれたものだつた。だから全校生徒が校庭に整列した朝禮の式などは實に壯觀と云ひたい位立派であつた。

その教育の妥當なると否とに係はらず、これを徹底せしめるまでの努力は容易なものではないのである。

この頃の教授法は、教師一人がしやべつて我が事終れりと云つた様な涼しい顔である注入主義の教育はあまり流行らず、發問法による教授が流行つてゐた。この學校ではその教授のやり方にも一つの型があつた。即ち教師の質問に對しては矢の様な反應の早さで、一齊に「ハイ」と云つて右手のこぶしを解いて舉手にするのである。實に美事なものであつた。私なども校風を遵奉して盛んにそれをやつたものであつた。

全職員は實に努力した。なまけてども居やうものなら突きとばされる様な權幕であつた。それは確かに優良校として買つてやらねばならぬ良風美俗であつた。ここまで全校の職員が呼吸を合せ一丸となつて教育に當れば何事でも必ず成るのである。

只私は此學校職員の一員となつて自らの成しつゝある教育に聊か疑問を抱かずにはゐられなかつたのである。一言につくせば無理があるといふ事である。私はかつて、擇友先生を笑つたが、教へる事の内容はともあれ、幼稚なあどけない子供達を前にして、彼等の肉體に又

彼等の精神に擇友先生以上の無理を強要してゐるではないか。驚くべきこの矛盾、あゝ擇友先生は遂に自分の頭に蒙らしむべき名であると知つて恥かしくならずにはゐられなかつた。「見て貰はう」見せてやる」そして好評を、こんな考へが先きに立つて生み出される教育には、ともすれば生命の根本を培はんとする心の用意が忘れられて、形へ形へと走り去つて行くのではないか。

私はこんな事を考へながら夜となく晝となく思ひ悩んだものだつた。

かく來客の多い學校では人々の接觸からも様々の形で啓蒙される事が多かつた。

たま／＼通俗講演に來校された、男子師範の教諭松下友一先生を知る事が出來た。先生は獨學で四課目位の文檢をパスされた立志傳中の人であつた。私はその頃頻りに倫理學の本を繙ひもといてゐた頃であつたから、先生に對してよく質問などして其御指導を仰いだものだつた。

母の死

春が去り夏も暮れて早晩秋の頃となつた。或日郷里の弟から手紙が届いた。封を切るとそ

の中にはひどく私を悲しませる事が認められてあつた。

最近めつきり母の健康が悪くなつた事、胃がひどく弱くなつて食慾が進まぬこと、肝臓も少し悪い様な醫者の診断である事等が書かれた後に、今のところそれほど危険といふ病状ではないからあまり心配せぬ様とあつた。

この手紙を私は職員室の机上で讀んだのであるが、人を憚る心のゆとりを失つてそこに泣き伏してしまつた。

そして私は今更の如くこの學校への轉任を悔いたのであつた。

勞苦にやつれ病弱となつた母を残して何故私は轉任しなければならなかつたのだらう。

さう思ふにつけても母がその苦衷を押し包んで轉任を許してくれた心根を思つては只泣かれるのであつた。

二三日経つと私の手紙と行き違ひになつて又弟から手紙が來た。

母の病氣が思はしくない、母の生命に異變がある様な感がある。食慾も全くない、少しづつ流動物を嚥下するのみである。學校に願つて歸つて欲しいと云ふ事が認められてあつ

た。これを読み終ると私の心は絶望の爲何かぼんやりしてしまつて涙も出なかつた。早速校長に願つて歸途についた。その夜船は鹿兒島を出たが、俄かに風波が起つて灣内を出る事が出来なくなつて一晝夜を大泊といふ港に過さねばならなかつた。「翼あらば」とはこの時のほんたうの氣持であつた。私の心は焦燥の中に、ひたすら母の病床を思ひ海波の鎮まるのを祈らねばならなかつた。鹿兒島を出てから翌々日の朝船はやつと島の港に入つたのであつた。もはや絶望と半ば諦らめてゐたが、母は死なずに私をまつてゐてくれた。あゝ、七ヶ月目に見るこの痛ましき姿よ、已に全身に水氣が見えて病みほゞけた母の顔は青白くはれてゐた。母は私を見ると力ない聲で、

「なぜ歸つて來たか」とがめる様に云つた。母は私を待つてゐたのではなかつたらうか。

この言葉をきいて私には、まだ母は自分の生命に絶望を感じてゐない様に受け取れたので母に失望を興へまいと私は強ひて笑顔さへ作つて云つた。

「おかあさんが少し具合が悪いと聞いたので、心配してゐたが中々癒らない様なので氣が氣でなく、是非一度見舞ひたいと校長先生にお願ひしたらお許しがあつたから一寸歸つて來ま

した。お母さんの顔はちつとも瘦せてゐないし模様も良いから安心しました。どうかがんばつて早く癒つて下さいね」と母の心を引き立てる様に云つた。

母は只簡単に「人には壽命と云ふものがあるからね」とそれだけ云つた。

私はこの母の大悟徹底した生命觀に對して自ら頭が下るのであつた。

母が自己の生命に望みを繋いでゐると思つたのは私の錯覺であつた。

母は己れの最後の日を己に自覺してゐたのである。

「なぜ歸つた」の一言は私の職務を大切に守らせたかつたのであつた。

自己の私情に捉はれて教壇を忘れさせなくなつたのであつた。

母の透徹した理性と忍苦に鍛へた鐵の意志とは、肉體の將に亡びなんとする最後の瞬間に至つて尙凜然と光芒を放つたのである。

下の關の梅光女學院に在學中の二人の妹はまだ歸着しなかつたが、母は一言も妹達の事を口にしなかつた。矢つ張り學業大事とそれのみ最後まで念じ通してゐた母であつた。

遂に母は、私の歸つた日、大正四年十一月二十二日の夕刻、妹達の到着を待ち得ず心臓麻

痺を起して父の後を追ひ大往生を遂げたのであつた。行年五十六歳であつた。

河内の家に嫁して三十餘年、只の一日と雖も晏慰を食ふ日とはなく、働くことを之れ生命とし、父なきあとには廢顏に類した家を護り忍苦以て家に殉じた母であつた。

七人の子供の母としては、己れの與へ得る限りのものを與へつくして、之れを育くみ、乏しき家計の中からそれ／＼學業につかして己が生命を枯らして行つたのである。

私はいつも日本の女、日本の母の偉さを自分の母に見る様な氣がする。

あゝ、死の直前まで「教壇を守れ」と暗示した母の訓へは、終生私の心の中に脈々と生きてゐる。

男子師範の訓導となる

私は再び教壇に歸つたが、母に逝かれてからの私は、父の亡くなつた時流した甘い悲嘆の涙の味と異なり、何か心の心棒を喪失して放心した様なわびしさであつた。

さらでだに淋しき秋なるを、晩秋の木枯に散る病葉わづらばに誘はるゝ孤愁の感を、どうもてあつ

かつてよいか自分にもわからなかつた。

その内に年が暮れて新玉の年を迎へ、學校は三學期に入つた。

或る日の事金縁眼鏡をかけた小肥りの上品な紳士が私の學級を參觀に見えた。後で鹿兒島縣男子師範附屬小學校の松本主事であつた事が判つた。然し參觀人の多い學校の事であるから別に氣にも止めずに過した。ところが數日の後師範の松下先生からお手紙があつて其中に意外な事が認められてあつた。

「今度本校の附屬小學校で女の訓導が一人入用となつたについて其候補者の相談を受けたから貴女を推薦しておいた。他に今一人候補者があつて、其比較研究の爲主事が直接御地に出向かれた筈だが、その結果是非にあなたを望んでゐられるから奮起したらどうだ。自分としても是非決心する様おすゝめし度い」概略こんな内容であつた。

私にはそれで始めて先日の主事の參觀が讀めたのであつた。それにつけても松下先生の御厚情をしくしく感謝せずにはゐられなかつた。この學校に來て未だ一年に足りないし、この學校に推薦して下さつた恩師に對しても義理が立たぬとは思つたが、やる瀬なく暮らすこの

明け暮れに何か心の轉換が欲しかつた。又、縣教育の中樞部にある研究の府たる附屬小學校であつて見れば、より多くの心の糧も得られるであらう。どうせこの道に終生を捧げたいと心に誓ふものであつて見れば、かゝる好機をにがしてしまふのもをしい事であつた。やつぱり有難くお受けし様と心に決したのであつた。

その旨恩師に申送つてその許を乞ひ、又校長の方にも恩師から頼んで貰つて總て順調に事が運んだのであつた。

そして大正四年十月二十日私は鹿兒島縣男子師範附屬小學校の訓導に轉じたのであつた。大根占校には在任僅かに一年であつたけれども、この學校獨特の雰圍氣から、今頃の言葉で云ふならば、教育への體常りをするといふ心構へは充分出來たと思つてゐる。

男子師範は鹿兒島市の郊外武町と云ふ處にあつた。今はすつかり人家が建て込んでしまつたさうだが、その頃は學校のまはりは大方向や田圃であつた。九町四方の石垣で圍まれた境内に、どつしりと立竝ぶ校舎や寄宿舎の屋根を見ると何か氣壓さるゝほど壯觀であつた。

私は之れで四回目の新任式を受けるのであるが、今も鮮かに印象づけられてゐるのはこの

時だけである。

主事先生に案内されて講堂のドアの前に立つた。先きに立たれた先生が、ハンドルを取つてドアを開かれると、堂々たる大講堂に、ぎつちりと腰かけてゐるスマートで可愛く美しい服装の子供達が目に入った。

訓導の先生や教生がずらりと直立不動の姿勢で居竝んでゐる。皆洋服や校服の男ばかりである。

女の先生の一人はピアノの前、裁縫擔任らしい先生だけが一人だけ立つてゐられる。女の先生はそれだけしかなかった。

その雰囲気によれた瞬間體中が射すくめられた様な壯嚴な感に打たれた。

やがて私は主事先生と共に立派な壇上に立つた。三音階のピアノの音が静かな場内の空気を破つて凜と鳴り渡つた。それが私の最初に受けた敬禮の合圖であつた。

私は此時初めてピアノといふものを見初めてその音を聞いたのだから、未だにその時の音色まで鮮明に印象に残つてゐる。優良學校にもまだピアノは備へてなかつたのである。

そのあと主事先生がどんな挨拶をされて自分がどんな事を述べたかそれは少しも記憶に残つてゐない。

私は高等一二年女子の複式學級を擔任した。今一人のMといふ女の先生は尋常五六年の擔任であつたが、何時も放課後になると男の教生四五名を前に竝べて堂々と、その日の授業を批評してやつたり指導したりしてゐる。又どん／＼命令して使などさせてゐるのを見て私は何か奇異の感を抱いたものであつた。

私は家庭で男尊女卑の教育を受け、男であれば下男にさへ一步譲るといふ風に習慣づけられてゐるせい、男を見ると誰でも偉く見え、又誰でも尊敬しなければならぬものゝ様に先入觀念がこびりついてゐるので、特にさうした感をもつたのであらう。

高等一二年女子には青年期の性問題の危険を慮つて、教生の配屬がなかつたのでほつとした。

然しどん／＼と馴れ親しんで来るにつれていろ／＼用も頼んだものだつた。

當時の男師卒業生で今日東京在住の知名の士が多いが、大先輩などと冗談を云はれながら

種々の會合などにもよく招待を受けるので私は都合のつく限り出かける事にしてゐる。

宿は松下先生御夫妻の御世話で、先生のお宅から程遠からぬところで、八十位のお婆さんと四十近い娘さんと二人暮しの閑静なお部屋を借りる事にした。

學校には歩いて十分位で行けるところであつた。

學校の職員達は縣下から優秀な人材を抜擢して集められただけに、その個性の中に人の追従を許さぬ何等かの特徴をもち、自信たつぷりの落付きある態度であつた。私は之等の人々の中に身を投じただけでも自己の生命がふくらんで行く様な氣がした。

食堂兼會議室があつて、毎日晝食は主事を中心に全職員がこゝで會食したから、職員の間も充分計られる様になつてゐた。

流石研究の府だけに參觀人は毎日の様にあつたが、何時もの事で職員達は平氣であつた。別にお祭騒ぎの様な事をしたり、又特別見せてやるぞと云つた風に力み返る様な事がなく、生徒達にも決して無理な要求をせず、心理の發達段階に即した頗る自然な行き方であつた。教生の指導と云ふ事はこの學校の一つの大きな使命であつたから、教材の研究や教授法の

研究と云ふ事を充分やつて兒童の力を養ふと共に、教生へ範を垂るゝ事を忘れなかつた。そして毎日放課後になると教生達を前に並べて批評や指導をする事になつてゐた。

主事を中心とした訓導達の會議も、毎日の様に開かれ訓導や教生の研究教授、その後の批評會などもよく開かれた。

生徒は皆試験をして取る様になつてゐたから、劣等生とか低能兒はゐなかつた。

私の學級は女學校の不合格者が多く、高一から今一度受験して女學校へ入學し様といふものが多かつた。又女子師範入學を目指してゐるものも少しはあつた。

別にこの頃の様な激烈を極めた準備教育はしなかつたが生徒の大部分は目的の學校へパス出來て非常に愉快であつた。

私には教生指導といふ大役がなく、總べて自分で教へたから只々子供達にみっちり力をつけてやるといふ事に全身全靈を傾けたものであつた。

それから私はよく子供達を連れて武岡に上つたものである。

武岡は學校から程遠からぬ處にある小高い岡である。

その道中には畑があつたり田圃があつたり小川があつたりした。教へ子達と一しよになつて唱歌を歌つたり、手を引つぱつたり、後を押したり、たはむれたりして、快い汗を流し乍ら岡を上つたものである。

岡の頂きからの展望は何とも形容しがたいものがある。藁を竝べた市街の彼方に、静かな銀波を湛へた錦港灣が眺められる。

黒煙を立てゝ走る汽船、風を胎んだ白帆の行き交ひの中に、天地の悠久を暗示するかに櫻岳の偉容がどつしりと蟠踞してゐる。右手の一角には青松を乗せた天保山の長州が突出し、一轉して目を左方に移せば、西南の役を回顧し大西郷の終焉の地となつた思ひ出多い城山が指呼の間に見られるのである。なほ目を次第に此方に移せば、美しい高突川の流れに添うて西郷隆盛、大久保利通の誕生地が指摘される。なほ東郷大將の誕生地は第一高女となつてゐるから一目瞭然である。又脚下には大西郷の一子西郷菊次郎氏邸があつた。

春になると草花が咲き蝶が飛び鳥が鳴く、夏になると翠緑滴る木々が枝を交へて快よい涼風が吹いて来る。秋になると黄ばんだ木の葉に澄んだ空から軟陽がさして、千草の中に蟲の

音がする。私はいつも、かうしたそれ／＼の趣き多い武岡を自然の教室として、草花や雑草を集めさせて其名を教へたり、観察させたりした。又郷土地理や郷土史を學ばせたり、時に又修身や國史や綴方や圖畫などを勉強させた事もあつた。

いつもおきまりの四角で無趣味な教室の中で學ばせるだけでは子供の心は餘り楽しまないが、かうした自然の中に開放され、青天井の下の草原に圓座して話をきいたり、又三々五々と點在して思ひ／＼の作業に耽つたりする事は、生きた教材を蘊穢させるに充分なものである様に私には思へたのである。

それに快い汗を流して岡に上るといふ事が、體位向上の好機會ともなつて一舉兩得であつた様にも思はれる。

學校とA家に訣別

大正三年の七月に歐洲大戰が勃發した。我が國にはこの歐洲大戰によつて俄成金が殖え通貨は膨張し物價は鰻上りにはり上つて行つた。米騒動の起つたのもこの頃である。

學校の周囲の田や畑がだん／＼模様がへをして地鎮祭が行はれ一軒二軒とそこに家が建つ様になつた。大工や左官などの工賃などは大變な高値で、一日七圓だの八圓だのといふ噂であつた。そんな具合であるから職人達の鼻息の荒さと來たら大したもの、先生などの通るのを見ると、洋服細民が通るなど、侮蔑の言葉を浴せたりしたものであつた。事實安月給取りの學校教師など細民に見えたのも已むを得なかつた。それだけ學校教師の生活は苦しいものであつた。然しこの時は總花式に臨時手當がついて急場の對策が講ぜられ、それがだん／＼本俸に繰り入れられて行くと云つた具合で相當優遇法が計られた。然し男教師の中には財界の好況に招致せられて教育界を去る者が相當あつた。だがそれ等の人々は其の次に來つた財界の反動時代に非常な悲境に陥り、廻れ右をしゃうとした時は既に教育界から占め出しを喰つてしまつた形で、氣の毒な状態に落ちた人々も隨分あつた。

世界の交戰國といふ交戰國は、敗戰國は因より捷てる國でも、五ヶ年といふ長期に互つた戰に厭き果て、戰爭を人道の敵として呪ふの有様で、再びこの悲慘を繰り返すまじとする平和思想が膨湃として漲り、全世界は只々平和の一色に塗りつぶされた形となつてしまつた。

この思想と前後して流れ込んで來たのは所謂デモクラシーの名によつて齎らされた自由思想であつた。

私の學校では先の伊藤校長が物故され、其後任として白哲長身のスマートな淺賀校長が來任されたが、私達はこの先生の口から初めて、デモクラシーといふ言葉を聞いて珍らしがつたものであつた。附屬小學校の會議室に備へつけてあつた二面の黑板に一ぱい板書されて、その言葉が持つ内容の梗概について解説して下さつた。

財界の好況と世を擧げての平和主義と、デモクラシーの思想とが三ツ巴にからみ合つて水の低きにつく如く、自由主義、個人主義の西洋思想が一般世人の心に浸透して行つた。その結果獨立自尊の精神は高められたが、一方には我が國家構成の基調たる家族制度に對する觀念等も至つて薄弱化した感があつた。

従つて教育界にも個性尊重の教育が叫ばれ、人格尊重の美名の下に自由に走り克己忍耐等の意志教育が輕んぜられ、智識偏重の教育が次第に盛んになつて行つた。

性道德などについての見解も從來の如き志操堅固な貞操觀念は時代おくれの道學者流に解

釋され、厨川白村氏の戀愛至上主義などはその時代の思潮に投じて随分世にもてはやされたものであつた。

婦人界などではその以前から平塚雷鳥女史等の新人によつて青踏社が組織せられ、青い酒や赤い酒を呷り乍ら赤い氣焔をあげてゐるさうだなどゝの誇張された評判が鹿兒島あたりまでも聞えて來たものであつた。之れが新時代に向つて呱呱の聲をあげた婦人結社の最初のものであつたかと思ふ。兎に角女子の社會活動などゝいふ事へはひどく世人の好奇心をそゝつたもので、演説などには必ず黄色い聲とか赤い氣焔などと云はれたものであつた。

數奇な運命のヒロインとして所謂筑紫の女王の名で通つた白蓮女史や、九條武子夫人の名が竝べられて新聞や雑誌等に現はれたものであつた。

白蓮女史作の

わたつみの沖に灯もゆるひの國に吾れあり誰ぞや思はれ人は

の和歌などは世人に愛誦せられて、女史の意中の人を詮議したりする物好きな人々もあつた。

十年獨居の武子夫人に對しては佳人薄命のヒロインとして世人の同情を呼んだのであつた。

白蓮女史は遂に伊藤家を飛び出し、宮崎龍助氏に走つて全國に騒然たる話題を投げて非難の的となり、武子夫人は宗教に悟入して生佛の如く崇められるに至つたのは後日の話である。

又與謝野晶子夫人作

柔肌の乙女の血潮にふれも見で淋しからずや道を説く君

の所謂固い道學者先生を笑つた歌なども時代に投じた代表作の如くよろこんで世に迎へられたものであつた。

石原純氏對原阿佐緒女史の三角戀愛關係についても甚だ憎惡する氣持もあつたが、又一面そこに人間性を發見し一種の深刻味と情味とを見出さうとする様な氣持で眺めるものもあつた様である。

私の學校では先に三人ゐた女教師中本科擔任の女先生が退職されたが後に女教師を入れず裁縫教師は死亡されたので其後任として伊東女史が附任した。女史は木下校長が稀に見る秀

才と折紙をつけられただけあつて、實に才氣潑刺たるものがあつた。又非常な讀書家で文藝物に對する批評眼などには實に高い見識がうかゞはれた。

年は私より遙かに若かつたが私などいつも女史に引きづられてゐる形であつた。

男教師の中でたつた紅二點といふ有様であつたが、中々氣焔萬丈談論風發と云ふ具合で、若くて進歩的な男教師を相手にデモクラシーを論じ性道德を批判し、哲學・政治・經濟・文學・宗教等の見解について意見の交換を行ひ、時事問題を論じ合ふなど、お互に切磋琢磨し又啓發さるゝ處が多く、今から回顧しても實に愉快な感に浸る事が出来る。

だが、かうした環境に身をおいた私は、過去の生ひ立ちに深く根を下した、只一途な生き方をして來た私の人生觀に、他の一角から大きなメスを入れて自己を批判してゐた。何かそこには萌え切らぬ生命が、大きく息吹かんとする様な心の躍動に引きづられてゐる自分であつた。

之れは又私の精神生活に於ける大きな危機であつた。この間に私の心に喰ひ入つて來た一つの力に私は眩惑され魅惑されつゝあつたのである。此の時私の胸奥に根強く植ゑつけら

れた家の教へや父母の像、強い教壇人への憧れがなかつたら、この大きな危機の敗者となつて私は人生の岐道に迷ひ入つたかも知れぬが、私は遂に人生の公道を正視して進むべく、下宿を去つてA家の家庭教師となつたのであつた。

そして晝は校務に夜は家庭に待つ數名の教へ子に、夜となく晝となく自己の精魂を只一念教育一筋に没入したのであつた。

A家には女學校在學中の長女を頭に、來年受験の次女その他數名の弟妹を導くのであつたが、それ〴〵異なる個性の持主達を教導するのは相當苦勞であつた。

この家の主人は尋常逸しか修學しなかつた人であつたが、赤貧の中から身を起し數十萬の富を作つた人格の高い立志傳中の紳商であつた。

深く宗教を信じ、信念固く、この人の口からきく話は人生の行路から闘ひとつた血のにじむ教訓であつて、私はここに又一つの大きな人生を學んだ。

夫人も中々氣だてのよい人であつたから、家族の一員としての厚遇を受けつゝ、親身となつてその子女達を導いた。

その間にあつて私の弟は早稲田を卒業して鹿児島の新聞社に就職し、妹達は三人共東京に在住してゐたので盛んに私の上京を促して來た。私は卒業以來まる十五年を縣教育に盡粹して來たので學校にもA家にも別れが惜しまれたが、帝都に於ての大きな試練も又自分として望ましき事であつたので遂に意を決し、大正九年七月病氣退職して上京した。

私はその時三十四歳であつた。

帝都教育二十年

京高に赴任して

帝都の地を踏んだのは之れが二度目である。祖母の計に接して歸島した叔父は、その留守中、中將に昇進し、間もなく第二師團長に親補せられて宮城縣仙臺市に在住する様になつたが、その翌年の夏休みに松島見物でもしたらどうだと勧められたので、嬉しく旅装を整へて松島に遊んだ事がある。よい序とばかり各地の名所舊跡を訪ねたものであるが、東京には妹達が住んでゐたので、數日足を止めて見物させて貰つたのであつた。

然しこの度の上京は單なる見物でなく、場合によつては永住の地とする覺悟である。そしてこの地のあらゆる文化を、あらゆる機會に大きく呼吸して、自らを立派な教壇人として大成させたいといふ強い念願で體中が張り切つてゐた。

この頃髪を七三に分けるといふ事が流行してゐたが、非常に新鮮味があつて私は魅力を感じ

じてゐた。然し學校教師と云ふものは常に舊體制を歩む事が通念の様になつてゐるので私なども遠慮して舊體を守つてゐたが、上京すると同時に思ひ切つて七三に分けてしまつた。心身共に舊體の殻を脱いで總べて新らしく再出發し様といふ氣持の表現であつたといふ事が今にして肯定されるのである。

夏休みが明けると私は當時高師附屬の訓導であられた肥後盛熊先生のお世話で、京橋高等小學校に勤務する事となり今日に及んでゐるが、當分の間赤坂區傳馬町の妹の家に寄宿して通勤する事にした。

この學校にはその頃奥田といふ校長がゐられたが、非常に上品で言葉遣ひが丁寧を極めたので返事に困る位であつた。何かにつけて荒削りの粗野な自分が恥かしく顧みられて、一日も早く都會の風になづみたいものと願ふ心で一杯であつた。

當時は今の高等家政女學校の前身である實業補習學校と同居してゐたから、先生の數も多く、女先生も随分多かつたが、髪を七三に分けた人は一人もなかつた。先生と云ふものは何れの天地でも先端を行くと云ふことを遠慮してゐるのだな、と思つた。そこに田舎出の私が

七三で出勤したのだから、おかしな矛盾が感ぜられた。

それで私は、大變な新人が飛び込んで來たものだと思つた様な白い冷い目で見られてゐるのではないかと云つた様な氣持がしばらくの間してゐた。

學校の中は至極閑靜なもので、今まで附屬小學校で一日をも一刻をも争ふ様な活動舞臺にゐた時代に比べると、まるで御隠居様の様な生活であつた。

その時私は高等二年の女子を擔任する事になつたが、教へ兒達の言葉づかひの優しさ、物腰のしとやかさ、愛嬌たつぷりの表情等を見てびつくりした。今日ではそんな事はさつぱり氣がつかなくなつたが、地方に比べてやはり環境の賜か、格段の相違があると思つた。子供達は學校がひけて家庭に歸ると、大概是、下町風の娘に歸つて赤い前掛などかけ、裁縫道具を抱えてお師匠さんの家にお針の稽古に通つたり、三味線やお琴、又は踊りの稽古に通ふ子供が多く、今日の様に職業戦線に進出する様になつたのはづつと後の事である。その頃は實に子供の姿態の上に江戸趣味の情緒纏綿たるものを感じたのであつた。その頃の三大祝日の儀式などには綺麗な桃割れに髪を結つて美しい振袖姿で出席したのも澤山居た。

二十年の星霜を閲みすれば、世の變轉も驚くべき展開を示すものだと思ひ返されてならぬ。

クラスの中にKといふ級長をしてゐた片目を失つてゐる子がゐたが、それは／＼氣だてが優しく、何から何まで氣をつけてクラスをまとめてくれたので、皆からも大變敬愛されてゐた。私は寧ろその子を教へるといふよりも、導いて貰つてゐる様であつた。

又Sといふ才氣煥發で明朗な、そして又非常にユーモアに富んだ子がゐた。私の九州なまりの言葉がおかしいと云つては、その口まねして私や級友達を嘖き出させたものであつた。それでだん／＼と自分の言葉や發音等に訂正を加へる事につとめたのであつた。

日が経つにつれて、だん／＼土地にも學校にも生徒等にも馴れて來た。さうなると周圍から氣壓される様な事も少なくなつて來たので、今まで只管謹慎し小さくちどこまつてゐた假裝の殻を脱いで、はつきりと自己の行動を決する事が出来る様になつて來た。

女の三十四歳と云ふと、人によつては中老の如く考へる人もあるが、私にはそんな考へは微塵もなく「寧ろ之から自己を建設するのだ」と云ふ意氣に燃え、まるで十代か二十代の人

の様な希望が鬱勃として胸中に湧きたぎつてゐた。

「夢を見る時代が永かつた」と云ふ事を私は前に一言したが、さうした私の特別な性格がそうさせたものか、又は家といふ桎梏しごに身の自由を失つてゐた私が、やつと開放されて獨立獨歩の境地に行く様になり、只一念教壇人としての教養を願つた爲にかくあらしめたものか。

教育といふ仕事は、人對人の交渉である。魂と魂の交流である。教師の胸に波打つ生命の躍動は直ちに教へ子の胸の鼓動に響くのである。

熱は熱を呼ぶ、方法は末梢である。

その頃は教師も兒童も元氣があつた。そして活氣が教室内に横溢してゐた。

その頃は學校の行事や事務にわづらはされる事がなく、又傍系的な教育事務の繁鎖なものもなかつたから、只々自分の學級が自分の天地であつて、教師の教育力を兒童教育の上のみ傾倒し得られた事は實に愉快であつた。

日大で學んだ頃

教育は方法ではない。人である。よき教育はよき人によつて生み出される。教育者はよき人たる事を忘れてはならぬ。力も養はねばならぬ、徳も磨かなければならぬ。この信念は何時如何なる處でも私の念頭から離れた事はない。さうした意味から私はより高き教養を欲し一刻も猶豫出來ない様な焦燥に驅られた。

たま／＼日本大學が初めて其門戸を女子の爲に開放し、第一回生は特に九月から入學を許可すると云ふことを聞き込んだので、私は大喜びで早速夜間部の社會科入學の手續を取りその許可を得た。

小學校の授業が了へ、放課後の學校事務をすませたらその足で神田に廻り、日大で夜學をやるといふ生活がその時から三年續いた譯である。

數ある大學に先んじて、初めて試みられる門戸開放に向學心をそゝられた女子の入學生も随分澤山あつた。國漢文科が最も多かつたが社會科にも七八名あつた。その中に私より十歳

年上の一婦人があつたので特に私は意を強くしたのであつた。

學校は設備も甚だ不完全で、粗末な机や腰掛にぎつちりと肩を接して男女學生は夜間の數時間を勉學にいそしんだのである。

殆んどが向學の念に燃ゆる勤勞者達であつたから、晝の疲れを忘れた様に活眼を開いて講し、又ノートしたものであつた。

だから、世人の恐るゝ様な風紀問題など起す様な事はなかつた。

科目によつては各科の男女學生が大講堂に數百人參集して聽講するといふ事になつてゐたが、講師の見える數分間或は數十分間は學生達が交る／＼登壇して政壇演説めいた句調で大演説を始めるのである。それに彌次が飛ぶ、その彌次に又彌次が飛ぶと云つた具合で實に騒然たる雰囲気がかもし出されたものだつたが、中には實に堂々たる名演説をやる人もあつた。そんな人は其後代議士などに打つて出て、今日社會人として相當の位置を占めてゐる人もある様である。

兎に角若人の胸は高鳴り血肉は躍ると云ふ元氣であつた。吾々もそれ等若人の群に投じて

心を躍動させたものであつた。

私はこの夜學に通ふ様になつてからは、赤坂からの行き歸りが不便であつたから、神田の猿樂町にあつた炭屋のさゝやかな二階を一間借りる事にして自炊生活を始めたが、忙がしくて仕度の出来ない時は近くにあつた食堂に飛び込んで食事する位平氣になつた。

學科は憲法・法律・政治・經濟・哲學、其他倫理や心理や植民政策等々種々のものがあつたが、學期々々の試験もあれば論文も書かされた。

男子に負けるものかと云ふ心の意地から夜の睡眠時間さへ惜しまれ、又電車の往復などには必ずノートか本を手にして寸刻を惜しんで読み耽つたものであつた。

然し日曜など只一人悄然と部屋にあつて、只一人の膳に向つて食事を取る時など、じいんと骨の心髓まで滲み入る様な寂寥を感じ、堪へられなくなつてつい涙がこぼれた事もあつた。

果してこの自分の選んだ人生がほんたうのものか知ら、私の人生觀に何かの錯誤があるのではないかなど、自問した事などもあつた。然し又晝の學校から夜の學校と目まぐるしい生

活圈に入ると、そんな淋しさなど何時か忘れ果て、しまつて又新らしい元氣が全身に漲つて來るのを感じた。

宿には南京虫がゐてよく私を喰つた。それが大きくはれ上つて何時迄もかゆさが残つて困つた。妹などが宿を訪ねてくれて、よくもこんな汚ない部屋で南京虫に喰はれてゐられる事だ、他に引つ越したらどうだとすゝめてくれたが、私はどうしてもそこから動く氣になれなかつた。それは私の性格の一面である。現狀に安住すると云ふ氣持、之は私が、京高に赴任以來動かずに現在に至つた事も之を裏書きするものと云へ様。

その頃私は又當時刊行されてゐた「趣味の婦人」と云ふ雑誌に協力した事がある。

此雑誌は當時吉岡、嘉悦、川崎等の名流、教育家や前の東京市保健局長宮川宗徳先生等が主宰してゐられた。私は或る人のすゝめで之に關係したのであるが、經濟上のたしなどにはならない仕事であつたけれども、私としては、より多く社會人との接觸を多くし、教壇人としての人格内容をより豊富にしたいといふ考への許に之に協力し、時に執筆した事もあれば日曜などには又名士の訪問記事など取りに行つた事などもあつた。

かうした校務以外の自己修養に時間を割愛した事を第三者が見たら、定めて教育力を低下せしめた事であらうと杞憂するであらうがその實私は、他の閑人達の教育より遙かに能率を挙げ得たと信じてゐる。

人間がより高い理念を求めて、高潮し切つた精神力から發散する迫力は、必ずや兒童の胸に迫るものがあつたに相違ないと私は信じてゐる。

二つの挿話

元來餘り胃腸が丈夫でない私は、睡眠不足や無理な勉強などが續いたあとは胃腸を弱める事が多かつた。胃腸が弱ると又よく貧血を起す癖があつた。

たしか日大に入學して二年目であつたと記憶する。第二學期の試験にひどく無理をしたので、たうとう胃腸を害して病床の身となり、三日ばかり學校を缺勤してしまつた。今日はどうしても出勤しなければならぬと起き上つて見たが、三日も絶食したあとであるから、足がふら／＼して目がくらみさうであつた。胃腸のあたりもすつきりしなかつた。然し今日は何

としても出勤し様と心を決して、七輪にお湯を沸かし、片栗粉をねつて少し食べて見たが、それが何時迄も胸にもたれていやな氣持である。不安を押して兎に角私は宿を出て電車に乗つたが、すぐから氣分が悪くなつて、ねつとりとした冷汗がからだ中ににじみ出て來た。貧血を起したらしい。困つたと思つたが、やつと馬場先門の乗り替へるところまで來て電車を降り街路樹の下にうづくまつて苦痛を忍んでゐた。ところが頭の上の方に「どうしました、氣分が悪いのですか」と云ふ聲がした。見るとどこかの勤め人らしい若い青年であつた。貧血で困つてゐる事を告げると、その青年は「私はすぐそこの市役所に勤めてゐます、兎に角そこまで一所に行きませう」と遠慮する私を助ける様にして、たうとう門衛の建物の處へ連れて行つてくれた。私はそこまで行くともう我慢が出來なくなつてそこに倒れてしまひ、あとから／＼と續け様に嘔吐したりしてその人に随分世話をかけてしまつた。

學校からはその事を知つて、Kといふ先生が見えて大變親切な看護を受け、夕刻になつてやつと赤坂傳馬町の妹の家まで歸る事が出來た。それから二三日休養してやつと學校にも出勤出來又猿樂町の家に戻つたが、その青年はその後の経過を心配して宿にも訪ねて來てくれ

たさうである。私が歸つてからも訪ねて来てくれて何くれと心配をかけるので、私は心からの感謝をこめて禮を述べた。

或る日の事例の青年は美しい花束などもつて訪ねてくれている／＼話してゐる中に「自分は最近大變おしやれがしたくなつた。きれいなネクタイをかけて見たくなつたりするが、之は何といふ心理状態でせう」と何だか謎の様な事を云ふので、私は何か心に警戒しなければならぬ様になつた。「お若いからでせう」など、笑ひ乍らさりげなく云ふと、青年は燃ゆる様な目をして、突然

「結婚して下さい」と云ひ出した。

私は驚いてしまつた。だが私はあくまでこの青年を誤らせてはならないと、冷静な聲で靜かにきいた。

「あなたのお年はおいくつですか」

「今年二十六歳です」

「私は今年三十五歳です。あなたより九歳も年上です。冗談にもそんな事お考へになるもの

ではありませんよ」とたしなめる様に云ふと、

「年など問題ではありません、私は眞剣です。女が年上の例は世にいくらかもある事です」と云つて平塚雷鳥さんの例など話してきかせるのであつた。

「然し結婚と云ふ事はお互ひ一生の大事ですから、一時の出来心や、情熱と、同情などでは出来ない事と思ひます。もう少し冷静にゆつくりとお考へになつてご覧なさい。きつと今の考へが不合理であること、將來の幸福とならない事がお判りになる事と思ひます」

「いや私は冷静に考へたりする事を好みません。結婚はその時の情熱で決行して不幸になるとは考へられません。第一印象は大概の場合確實性をもつと私は信じます」

私はこの言葉を思慮のない随分暴言として受け取れた。女の三十五歳と云ふと已に理智と意志の方が勝ち過ぎて冷静に物を考へる様になつてゐた。私はその青年が熱すれば熱するほど冷静になつて行くのを覺えた。時に不良青年ではないかとも思つて見たが、それはすぐに打ち消す事が出来た。やつぱり私の過去に経験した夢の世界にゐるのだ。純情な青年なのだ。この人を誤らせ不幸にする事は恩を仇に着る事となる。と思ひついたから、私はきつと

した言葉と態度ではつきり云つた。

「私は今勉強中で頭は今其事で一ぱいです。結婚などいふ事を考へてゐる暇がないのです。御恩を受けた事は心一ぱい感謝してゐますが、それと之とは別問題ですから、今のところ留保して頂きたい。考へるなら學校を卒業して後の事にしたいと思ひます」。と答へてその日は歸らせた。

それかは數日経つた日曜の朝、妹の家に出かけ様としてゐると又その青年が訪ねて来て、くどくどと同じ事を繰り返すので私はほとくもてあましてしまつた。

「何れにしても今日は急用で出かけるのだから失禮させて頂きます」と云ふと、

「それではどうか自分と一しよに歩いて下さい。その位の時間を割愛してくれてもよいです」と云ひ出した。

たうとうと神保町から九段をぬけて赤坂の傳馬町まで同じ事を押問答してやつて來たが、妹の家が近くなると私は逃げる様に、

「さようなら」と云つて別れてしまつた。

それきり再びその青年は來なくなつたが、その後一封の封書がどこやらの山の宿から届いた。中には和歌が二首ばかり書かれてあつたが、今のその山の名も歌の文句も忘れてしまつて記憶にない。

その二

矢張りその年の夏であつたと記憶する。鹿兒島で大變お世話になつた恩師松下先生が上京されたお知らせを受けて宿をお訪ねした。

先生は當時長崎縣視學に轉じてゐられたが、公用の爲、社會教育課長と共に上京されたのであつた。私はお二人の先生にお目にかゝつたのであるが、その時思ひも寄らぬ御相談を受けたのであつた。お話の要件は、

「自分の生地宮崎縣で女の校長を作つてゐるが大變成績が良好である。それで長崎縣でも新しい試みとして女校長を出して見たいのだが、どうだ一つやつて見る氣はないか」と云ふ事であつた。

身に餘る大任を不肖のこの私にやらせて見ようと考へて下さつただけでも有りがたい事で

あつた。どうせ一生をこの道に捧げたいと覺悟してゐる身である。お言葉に甘へて見ようかといふ氣持ちも多分にはなかつたが、而しこの未成品の現在の自己を顧みてそれは餘りに荷が勝ち過ぎてゐた。先生方の御期待に添へる自分ではない。せめて今の學校でも卒業した暁ならば、と云ふ考へが頭に上つて來た。それでたうとうその旨をお答へして折角の御厚意をお断りしてしまつたのであつた。その後長崎縣に女校長の出來たといふ事をきかないから、それ以來その事は立ち消えとなつて實現しなかつたものと見える。

X

X

X

こんなエピソードまで生んで勉強にいそしんだ日大時代も三年の星霜は矢の如く過ぎて、無事に卒業の日が來た。成績は決して人後に落ちなかつたと信じてゐるが、いざ卒業といふ時になつて吾々は啞然たらざるを得なかつた。

大學令にないからと云ふので、中等教員の免許狀を出されぬと云ふことであつた。國漢文科でも無論同様であつた。

私は最初からそれを目ざしてゐた譯ではない。只々教壇人としての教養を欲したのであつ

たが、而しこの三年間の苦闘の汗は何らかの形で報わられてもよい筈である。

學校が最初からそれを知らせなかつたのも心外であるが、吾々がそれを詮議しなかつたのも手落ちであつた。

何れにしても「女といふ名は禍ひなるかな」とつくづく悲しまれてならなかつた。

大震災當時の回想

上京して三年目の夏を迎へた。即ち大正十二年の九月一日で、所謂日本の厄日として恐れられる二百十日である。だがこの日は朝から空がよく晴れて雲一つ浮んでゐなかつた。隱やかな二百十日だと人々は共に喜び合つた。始業式をすませて、兒童は早く家に歸つた。いよ／＼お晝が近くなると少し早晝にといふ譯で職員達はそれ／＼の腰辨などを机上に並べて食事を始めてゐた。時計の長針が將に十二時のところにさしかゝらうとする二分手前の時であつた。何か體がグラツと突き出された様に思つたが、續いて大きく揺すぶられてびつくりした。あの瞬間私の前の男の先生の黒い目がぎよろつと大きく光つた。あの時の目や顔が今で

も強く心のカメラに焼きついてゐる。今に止むかといふ風で、ひと時皆はためらつてゐる風であつたが、次の大きな動搖にすわつとばかり立ち上つた。私も立つた。前のめりになつて駆け出さうとしたが、前へ後へと大搖れに揺れるので、目の前の地面が盛り上つて見えて、中々進むことが出来ない。丁度夢の中で駆ける時、氣だけがさきになつて足は一向進まない時の様な具合であつた。職員室と前の校舎との間の狭い中庭には煉瓦建の屋根や壁が崩れ落ちる音と砂煙りで恐ろしい形相であつた。やつとの思ひでそこを通りぬけて広い大庭にのがれ出た。あゝ命拾ひをしたと一息ついて安堵の胸をなでおろした刹那始めて氣がついたのだが、若いKといふ男の先生としつかり手をつないでゐた。氣がついた時は流石におかしくなつて二人共ほゝえんだ。その先生は人一倍内氣でいつも沈鬱な表情をしてゐる人であつたので特に滑稽であつた。それほど皆は無我夢中でにげ出したのであつた。庭に出て校舎の方を見やると、第二第三……と續いて起る大搖れに屋内體操場のガラス戸が、パツ／＼と倒れるのが一際はつきり見え、やがて屋根が崩れ落ちてしまつた。流石堅牢であつた煉瓦建の校舎も大崩れに崩れてゐる。

職員は校長を中心に、先づ御眞影や御勅語の御安泰を計ることや重要書類の始末を始め校務一切の事についての前後處置を協議した。

數時間の後やつと許されて歸途についた。私は日大を出てから赤坂新町に一家を借り受け妹二人と住んでゐたが、歸途様々な震災受難者の痛ましい姿に逢つた。私の学校の煉瓦に撃たれて死んだ人、死者や傷者を擔架に乗せて運ぶ者などがある。

その頃市内には所々に火災が起つて幾筋も／＼の黒煙が西に南に北に上がつてゐた。赤坂見付の上の處まで来ると、新町の私の家の方向に火の手が上り火の海となつてゐて歸る事さへ出来なくなつてゐる。やむなく傳馬町の妹の家に身を寄せる事にした。

その日から翌日にかけて東京市中は全く火の海となつて炎々と燃え續けたのであつた。やつと新町方面の火の手がおさまりかけた頃、ブス／＼と燃え残りの熱氣を身に浴び乍ら自分の家まで歸つて見ると、家は無慘に倒壊してゐたが幸周圍に綠地帯があつた爲焼ける事だけは免れてゐた。

學校の事が氣にかゝつてならぬが、交通遮断となつてゐるので只々氣を揉むのみである。

その頃鹿兒島の弟は家族連れて上京し原宿に住んでゐたが、傳馬町より家が大きかつたので吾々三人は當分その方に同居することにした。

交通遮斷がとかれると焼け野原と化した東京の町をひた歩きに歩いて學校迄かけつけた。學校に来て見ると、黒焦げの焼けぼつくひや灰や、そこゝに廢墟となつた焼け残りの柱や煉瓦のかけらなどが散亂してゐるだけで昔の面影は更にならない。實に感無量で言葉も出なかつた。きけば當夜の宿直の先生を中心に二三の男職員の活躍で、火に追はれ、御眞影や御勅語等は御安泰に某所にお預けしてあるとの事でやつと胸を撫で下した。

職員の中にはまる焼けとなつて焼け出された人が數名あつたが生命には別條なかつた事は不幸中の幸である。淺草方面に住んでゐた老人の小使が行衛不明になつて今日まで判明しないから大方どこかで焼け死んだのであらう。

さて子供達は？ それは一番氣がかりな事であつたが、そこらの家といふ家は一軒残らず焼け失せて人の影さへ見えぬ有様で、子供達の行衛はさつぱり分らない。何とも手の下し様がなかつた。

それから引つきりなしに餘震が続いて屋内は危険なので夜でも屋外に蓆を敷き、夜露にぬれ乍ら睡眠を取るといふ有様であつた。二三日すると更に市民の恐怖をそゝる様なデマが傳はつて來た。

私の學校では職員が一致協力して教育の復興に突進した。

まだ取片づけも出來てゐない焼け跡を足にまかせて歩きまはつた。そして日に／＼建ち上つて來る豚小屋に等しい住居の中を訪ねて一人二人と教へ子を探し出して來た。青天井の下で兎にも角にも授業を始めたのである。何といぢらしいものだらう。圓る裸で焼け出された之れ等の可憐な少年少女達は身邊の一ばん大切な品物として教科書だけは所持してゐる子供が多かつた。又この大きな大災厄によつて彼等の受けた心の痛手を愛の手で撫でさすつてやる事や慰めの言葉をかけ又氣持を鼓舞してやる事も、大きな教育であつた。

又窮すれば通ずて、そこから何か机や腰掛けの代用となるものを探して來たり、焼け残りの木片や板切れを焼け釘で敲きつけて間に合せたりした。そのうちに、

教科書の配給もあり、バラックなど建つと云つた徑路を辿つて不完全乍ら學校の體裁を備

へる様になつて來、又子供達も一人二人と日に日に殖えて來た。

當時を回顧すれば總べては尊き血と汗の體驗記録でないものは一つもない。それ等は又尊い教へ子への教育資料となつた。

火に追はれてにげ惑うた子供達、焼け出されてからなめた困苦缺乏、玄米飯に鹽をなめて露命をつないだ經驗、焼けトタンにアンペラの家の起き臥し、露天の學校、物の利用、内外人に受けた同情、金品の配給、其他彼等の身邊に起る日々の事象をあげれば際限ない。私はそれ等の尊い教育資料を彼等の身邊から拾ひ上げて、それを丹念に培ふことにとめた。

この時私の最も恐れた事は、この雨の如く注がれる内外人の同情や金品の配給に馴れ、それに感溺して氣力を失ひ、所謂こじき根生を起す様になりはせぬかといふ事と、この荒寥たる環境と焦燥の生活の中にあつて心がすさみ豊かな情操を失つてしまふ様な事になりはせぬかといふ事であつた。そこで口ぐせの様に感謝感恩の念を呼びさまし、神を念ぜしめ、獨立獨歩の精神を鼓舞するにとめた。

其後十年間の市民の努力と意氣は言語の外であつた。どこにこの力がと云ひたいほどもり

くと盛り上つて來る復興の力の目覺ましかつた事、ぐんぐんと倍舊の品位と美觀とを具備した大道路が出来大建築が立ち上つて行く。それと並行して學校も一つ二つと鐵筋コンクリートの堅牢と美觀、文化施設とをそなへた校舎が立ち上り設備も完備したものとなつた。私の學校も前の焼け跡に立派な本建築が出来上つて、引きうつつたのは大正十五年七月であつた。

婦人問題の究明

デモクラシーの觀念が輸入されて以來、この考へがあらゆる思想界に浸潤して行つたが、特に婦人界に於ては、女子教育の普及向上に伴ひ、インテリ婦人層が目覺めて來た事や、文化の發展經濟界の招致などによつて、婦人が追々と職業戰隊に進出して來た事などで、だんくと女子が社會的又人間的な立場から自己を再検討する様になつて來た。

婦人公論で確か母性問題であつたと思ふが、山川菊榮女史と山川わか女史が數回に渡つて誌上討論をされた事などは、随分と言論界や一般婦人に話題を投げたものであつた。

歌人で通つてゐる與謝野晶子女史等もその頃は盛んに評論界に乗り出して婦人問題を評論され、歌人から評論家に轉向した形であつた。三宅やす子女史なども筆に口に大いに婦人の立場を力説したものである。その頃出版された著書なども幾つかあつた様である。

其他にも多数のインテリ婦人達が言論界に頭角を現はして婦人問題を論議した人は非常に澤山あつた。獨り女子だけでなく男子の間にも婦人問題の研究家が相當あつた。兎に角思想界の一角は婦人問題によつて非常に賑はつたものであつた。

大正十三年であつたと記憶するが、婦人公論に誌上論壇會といふ欄が設けられ問題を提出して婦人問題に對する論文を募集した事があつた。私は試みに二度だけ應募して見たら二度共當選して薄謝として一回六圓づゝの原稿料を頂戴して嬉しかつた事がある。最初の問題は婦人參政の可否論を問れた様に記憶してゐるが。

回顧して見ると平塚、市川兩女史達が中心となつて婦人參政權の獲得同盟をつくり、婦人の參政運動が盛んに行はれて世上を賑はした頃であつたかと思ふ。

次ぎは「戀愛の三角關係を何と見るか」といふ題について「私の三角戀愛觀」といふ題で

論究してゐるが、之れも當時流行してゐた戀愛至上主義が瀰漫し、性道德が放漫となり、世上を賑はす様な、戀愛問題などの續出した頃であつた様である。

私は三角戀愛の様々の形やその動機を截別し、結婚方法の不備から來る不満に動機する場合に同情し、エレンケイの自由戀愛論、自由離婚唱導の眞意を述べ、結婚法の改善といふ事で結んだ様に記憶してゐる。

この猛然と擡頭した婦人問題はなぜか非常な興味をもつて私の胸に響いて來た。

否、それは自己の問題としてのみでなく、教壇に立つ女教師として當然之れを看過する事の出來ない問題でもあつた。即ち女子教育の根本問題として充分之を究明し、その目標を誤らぬ様にしなければならぬと考へたのであつた。

兎に角當時の私の心境は、西洋思想直輸入の婦人開放運動に心醉する事もどうかと思つたし、又現在の婦人の状態をそのまま受け取るも妥當とは考へられなかつた。

それには矢張り眞の日本婦人の姿をつきとめて今日を批判し、そこに明日の日本婦人の正しき歩道を見出すのが至當であるといふ結論に到達したのである。

そこで私は先づ上古の日本婦人の眞の姿を究明する事に決心し、本も讀んだり思索もしたりしたものである。

が、而しこの新たな刺戟劑として持ち込まれて來た歐米のデモクラシーの觀念も、一應検討して見なければならぬ。成るほど形の上では日本古來の女性の姿と、この西洋思想とは非常によく似通つたところがある。而し個人主義に根ざした歐米の自由開放、男女對等の權利義務の觀念がそのまま現在の日本の國情に合致するものであるか否かと云ふことである。

我が國上古に於ても性の相違は自ら仕事の分野を異にしてゐた。そして天の御榿めぐりには男神まづ言葉を發し女神之れに續くことによつて相和の實があがつてゐる。ここの天理を忘れる事は出來ない。

そこから自ら發展を遂げたのが我が國の家族制度である様に私には信ぜられる。

家族制度についてもそれ／＼の利害得失は考へられるけれども、長い歴史によつて發達して來たこの制度を、よく純正なものとして之れを持続するといふ事は決して不合理とも矛盾とも考へられない。

之れは根本に於いてデモクラシーの觀念と相容れないところである。

而し又自然にのび／＼としたところは大いに取るべき點である様に私には考へられたのである。

要するに私の願ふところは、吾々女性としての立場がもつと正しく認識され、人間として正しく評價され、より自由にそれ／＼の個性を發揮せしめその成長が阻まれなだけ的機會均等が與へられて欲しい。

そして又家庭婦人の仕事に對しても又職業戰線の婦人の仕事に對しても、女性の名によつて少しの割引される事なく尊嚴を認め安住の地位を與へて欲しいといふことである。

而してそれが家族制度によつて統制され、男尊女卑にあらざる性の自然に基づく夫唱婦隨の美風を存續し、男女を表裏の關係に於て一致せしめ、二者一體となつたところに完全の姿を發見すると云ふことになつて欲しい。否かあるべきであると結論したのであつた。そしてそれを自分の人間として又女性として又女教師としての歩道とし、又女兒教養の道しるべともしたいものと考へたのであつた。

或年の新年雑感

私は常に生活の中心に何ものかをおいて、それに熱中し、それに全力を注ぐ癖がある。その爲めには青春を忘れ女性を忘れ又或る意味に於ては幸福をも捨て、顧みなかつた事さへある。そしてひたすら、人間としての自己完成に努力し、より正しき教壇人たらんと憧れに生き續けて来た。だが、果して私は教壇人として何をなし得たか。又どれほどの向上が遂げられたか。孔子は四十にして立つと云つたときが、已に四十の坂を越して人生の完成期に達しながら悲しい淋しい不安の目で自己を見つめなければならぬといふ事は何といふ不幸であらう。

「あゝ又年を一つ加へたのだ」この事實はかうした気持ちの今の自分に取つては實に大きな悲哀である。又この新しき年を迎へて何程の事が私になされるであらう。さう思ふと只いたづらに淋しさが憎して行く。

思ひはいつか過去に走る。私にも無邪氣さのみが己れの世界であつた少女時代があつた。

新玉の年を迎へ、今日から一つ大人になるのだといふ嬉しさをどる胸を抑へて雑煮の膳に向つたあの頃がなつかしまれる。

過去といふものは懐かしいものだ。しかし過去によつて何ものゝ收獲をも攫み得なかつた自分を思ふと只悲しみが残るだけである。

一休和尚は「門松は冥土の旅の一里塚、目度くもあり目出度くもなし」と云つた。獨り私ばかりでなく、一休和尚ばかりでなく、新年を迎へて心から嬉しいと思ふ人はまづ大人の仲間では、色々の意味に於て少ないであらう。私が悲しい淋しい目で自己を見つめてゐる様な意味に於て新年を呪ひたく思ふ人もないではなからう。さう思ふことによつて僅かに自分を慰める事が出来る様に思へる。

だが、又さう悲観ばかりしても始まらぬ。結果に於て何等の收獲がなくとも、否却つてそれが悪結果を齎らしても現在自己が是とする處を肯定し、非とする處を否定してよりよく、よりよくと力強く又そこに希望をおいて生活を續けて行く外はなからう。さうだ、人生の意義は過程にあるのだ。そんな風に自問自答してゐると幾分失望も薄くなる。

私は最早結果の如何を思ふまい、過去の最終横断面であつた去年といふ年を考へて見ると聊か變つた意味の自己生長に似たものがあつた様に感ずるふしもある。

私は去年さゝやかな新居を持ち、まがりなりにも家庭らしい營みをなす様になつてから、そこに随分變つた自己、要約すれば「人間から女性へ」とか、又は「闘争から協調へ」と云つた様な意味の生活視野の展開があつた事は事實である。

私は過去に於て「女たる前に人間とならねばならぬ」と云ふ考へから、内部的にも亦外部的にも随分と闘ひ續けて來た。然しその結果は随分と淋しいものだつた。それはやつぱり自分が女であつたからであらうか。女である私が女を捨てゝ逆な道に闘ひ續けたからではなからうか。そんな考へが俄に私の心の一角に芽を吹いて來た時、自分を見つめると、只寒々とした自己を見出ださなければならなかつた。そして今まで思ひつきもしなかつた事を思ひ當つた様に、又今まで失はれてゐた己れを拾ひ求むる様に、靜かに／＼自らを考へた。すると人生の眞意義、女性の眞意義と云ふものが割合はつきりと私の前に現はれて來た。それから總ての闘ひをやめて協調への道を取ることにつとめた。かうした舊殻を脱した私の生活の

新らしい姿の前には春の様な和やかさがあつた。そして總ては楽しい世界であつた。又なつかしいものばかりであつた。之れがほんたうの人間らしい、女性らしい向上である様に思へる。今年はやつぱりこの道を辿り進むこととしやう。

新居の上に神日がうら／＼かに昇りつゝある。新玉の年、輝かしい、又平和の世界を祝福するかの様に思はれてならぬ。

職業指導の研究に没頭

高等小學校の教育は、尋常小學校の教育とよほどその趣を異にしてゐる。なぜなれば彼等は大體經濟的に見て下層階級に近い家庭の子弟であつて、之から更に上級學校に進んで高度の教育を受け様といふのでなく、之限り學窓生活を終つて實社會に出ようといふ人々が多いからである。

尋常小學校は基礎教育であると同時に或る者にとつてはそれが直ちに進學の準備教育を兼ねるものであるが、高等小學校は基礎教育であると同時に完成教育である。従つて教育の行

き方にも自ら相違するものがある譯である。

そこで私は彼等が實生活に出て實社會で様々の修鍊を積んで行くに必要な基礎的鍊成を行ふ必要があると考へた。即ち實生活に即應出来るところの基礎鍊成である。

かうした見地から高等小學校の教育に當るにはどうしても社會の實情と没交渉では教育にならないのである。

常に社會の動き、その推移、實狀等生きた社會と睨み合の態勢で教育がなされて行かなければならぬのである。そして吾々の行ふ教育が彼等が實社會に出てからの生活により高度の能力を發揮せしめ又より幸福な生活が營める様にとの意圖による導き方が必要となるのである。

女子の立場と男子の立場とはそこに多少の相違がある。女子の第一義的な使命は一家の妻となり母となるといふ點にあるのだが、社會狀勢の變化は已にそれのみに没頭出来ない状態に推移してゐる。

私が京高に赴任した頃は、大體に於て家庭の主婦たるの教育を目標とすれば間違ひなかつ

た。ところが其後の情勢には甚だしい異變が起つて來た。

今日までの様に學校を卒業したら赤い前掛をかけてお針に通つたり、遊藝のお稽古をしたりして數年の後にお嫁入りをするといふ風から一轉して、彼等は日に／＼職業戦線に進出する様になつて來たのである。

それは云ふまでもなく第十八世紀頃から英に起つた産業革命の影響が全世界を風靡して産業の機械化となり、家内工業を工場工業に移轉せしむるに至つた。我が國は鎖國政策を取つてゐた爲め、歐米諸國に比べるとずつとおくれて發達したのであるが、デモクラシーの思想が經濟界に浸潤するにつれて、利潤を目的とする個人主義、自由主義に基づく大資本主義經濟の發達が日を追ふて盛んとなり、大會社、大商店、大工場等が雨後の筍の様設立せられ人的資源を必要とする様になつたので、勢ひ高等小學校卒業の女生徒等もその方に誘導せられる風潮が年一年と盛んになつて行つた。

そこで高等小學校の女子教育はこの風潮を肯定すべきか拒否すべきかといふことが先づ問題に上つて來た。即ち女子の就職を如何に見るかの問題である。然し好むと好まざるとを問

はす澎湃として漲り寄する時代の風潮に抗することは出来難い、寧ろこの風潮に對して如何に合理的に順應して行くかと云ふことが、教育者の取るべき賢明な行き方であると私は考へた。

當時東京市教育局の廣田視學等によつて職業指導が唱導され漸次その研究熱が高まつて來た。先づ東京市では研究調査會が出来て其指導要項を立案することゝなつたが、私も女子部の研究調査員の一人として、その研究に没頭したものであつた。そして女子の爲にも準正科として職業指導を一週一時間特設する事となり、最初は私達の立案した指導要項によつて指導を行つたのであつた。

私はその外に「母性に立脚したる女子の職業指導」と題する研究物を纏めあげて昭和八年二月京橋區教育研究發表會の席上で發表し、私見を社會に問ふたのであつた。その骨子とするところは、婦人の第一義的使命は家庭にある。然し文化の進歩社會の推移等から女子の職業生活を認めぬ譯に行かぬ。それを如何に調和し如何に結合すべきかと大きな問題である。私の考へは職業によつて母性を損はず、寧ろ職業生活によつて母性を育て之を伸展せしむる

意味に於ての指導でなければならぬ。今一つ母性をもつ大切な性能を職業の中に生かし、職業を聖化し純化し又その性能を大いに發揮せしめて文化の發展に資し國家の進運に貢獻すべきであると述べたのであつた。母性とは女性の代名詞に用ひた言葉であつて決して母の經驗者を指したのではなかつた。

この見方には非常に共鳴者が多く、豫期以上の反響があつて嬉しく思つた。

かうした理念の下に社會狀勢に順應せしむる、よりよき教育を施すべく學級兒の教育にいそしんだのであつた。

叙勳の恩命に浴す

昭和八年九月はからずも叙勳の恩命を拜し、勳八等に叙せられ瑞寶章を戴くの光榮に浴した。

私は若かりし日、恩師の足跡を慕つて女教師たらんと志し、然も青春の夢は日本一の女教師たらんと願つたものであつた。

十九の年師範を出、女教師としての第一歩をスタートして、茲に二十八年を閲みし、齡四十七歳にしてこの榮えある恩命に浴し、私の胸間に勳章を佩用させて戴くことゝなつた事は有難い極みでなくて何であらう。

よし最下級の勳八等であるにもせよ、それには二十八年といふ長い星霜が込められてゐるのである。よし日本一の女教師となれなかつたにしろ、何程の功績がなかつたにしろ、云ひ古した言葉かも知れぬが、兎にも角にも大過なく今日に及んだのである。

そのしるしとして拜受したこの勳章を父母が生存してゐたならどんなに喜んで見てくれる事であらう。いえ、地下の靈はきつと「よくやつてくれた」と褒めてくれてゐるに相違ない。又祖母の靈はきつと地下で祖先の前に今日の私を褒めそやしてゐてくれる事であらう。などゝ自問自答して人知れず私は嬉し涙にくれたのであつた。

はらからや親戚達も私の爲に心から喜んでくれて、墨一枚ほどもある大きな樺の文机を祝つてくれた。

私は禮服姿の胸に勳章を佩用して記念の撮影をした。或る人は私のこの寫眞をしみじく見入つてゐたが「高級の勳章を佩用してゐる人々は世にいくらもあるが、之は小學教師二十八年の汗のしるしであるが故に勳八等でも非常なねうちだ」と云つてくれた。この言葉は短いが千萬言にも増して私の胸にしみる有難い言葉であつた。それであればこそ私もほんたうに嬉しいのであつた。

小學校の女教師が勳章を頂戴する様になつたのは最近の事であつた。今までの小學女教師達は捨て石の如く黙々と働いて只黙々と去つて行つたのであつた。それが鳩山前文相が小學校の教職員に對する精神的優遇の意味で盡力され、たうとうその實現を見るに至つたとか、よき時に生れ合せた身の幸をしみじく感謝せずにはゐられなかつた。

それにつけても層一層この道の爲に心魂を傾けて精進しなければならぬと心に誓つたのである。

汎太平洋婦人會議代表に選ばれる

國際親善の促進、人類幸福の増進に資せんとの目的で、太平洋を取まく十一ヶ國の婦人か

らなる、汎太平洋婦人會議が布哇に初めて開催されてから早八年を經過し、第三回の會議がいよいよ昭和九年八月八日から同じ布哇で開催される事となつた。第一回には小學校を代表して木内キヤウ女史、石川房女史等が出席し、第二回目には、花木チサヲ女史、田中芳子女史等が出席したのであつた。今度第三回が開催されるに當つて計らずも私に是非代表として出席する様との交渉を受けた。私はもと／＼英語も不得手の方であるし、どうひいき目に見ても國際會議代表としての適任者であるとは考へられないので再三固辭したが、聯絡委員に出てゐた花木女史から是非／＼と電話口で勧誘され、實はその場のがれのつもりで「考へて見ませう」と答へて電話を切つてしまつた。その日教へ子達をつれて上野の科學博物館に見學に出かけ、夕刻帰宅して見ると之は又何とした事か、讀賣新聞記者が私を待ち構へてゐるのである。そして記者は「市川房枝女史に聞いたが、今度あなたがいよいよ小學校側の婦人代表として汎太平洋婦人會議に立たれる事に決定したさうだから、どうかその抱負を聞かせて下さい」といふのである。

私は全く面喰つてしまつた。まだそんな事ではない、只考慮を約したまでの事であると告げて見たが、中々聞き入れ様とせぬ。何だ彼だと質問してたうとう私に少しばかり喋べらせて寫真まで撮影してしまつた。だが學校にも何の了解を求めてゐない今日、新聞で社會に發表される事は困る事である。その旨記者に懇々と説明して私の通知するまでは決して發表しない様にと頼み、記者もその旨了解して歸つた筈であつたが、その翌朝の讀賣新聞は大きな寫真入りで私の話を誇張して大抱負でも語つたかの如く報導されてしまつた。かうなると私もしよいよ最後の腹をきめなければならぬ餘儀なくされた。校長にその旨述べて頼んで見た。順序の轉倒した事は實に申譯の立たぬ事ではあるが、事の成り行き上致し方がない。兎にも角にも許可を頂くことが出来た。

かねて親交あつた中野初女史も同行と決定したので私の心も急に活氣づいて來た。

當時市教員會の役員をしてゐた關係上、その時の幹事長上沼彦之丞先生や前幹事長下川兵次郎先生には親身も及ばぬ御厚志を頂き、又區關係については八幡校長や服部校長に特別の御配慮を頂き、諸先生の御恩は終生忘れじと心に誓つた。

出席と決してからは實に多方面の方々に喜んで頂き、又言語につくせぬ親切を受けた。

全國聯合教員會幹部市教員會幹部の方々は演藝の催しものを計畫し、切符を賣り捌いて旅費の一部にと奔走して頂いた御苦勞は心に銘記して忘れられない。桃井女史とは當時それほど親交あつた譯ではなかつたが、知人を尋ねて切符賣りに行つたが留守でむだ足をふみ歸るところだといふ女史に車中で逢つた。手土産もそのまま持歸つてゐると云つて、小さな菓子折を、むり／＼私の手に握らせて下さつた。さらでだに御苦勞をかけてゐる最中、お菓子折まで頂いたその時の女史の温情は涙の出るほど嬉しかつた。其後女史の眞情を無二の友として今日も今後も幾久しく親交を結ぶ仲となつてゐる。

又ほんの行きずりの顔なじみ位の或る女の先生はわざ／＼私宅を訪ねて下さつて御餞別にと云はれて靴下などを頂戴した。

人の心を捉えるものは物の多少ではない。只心である。一足の靴下、小さな菓子折一個がどんなに私の心を捉えた事か。

その反對に世間體やお義理一片で與へられるものは有難いものではない。

花木女史は熱き友情をもつて私を推薦し、女史の熱情に動かされて私は起つた。女史だけ

れば遂に私はこのよき機会を逸してしまつてゐた事であつたらう。

それから學校の服部校長始め諸先生方にも随分お世話になつた。郷里關係の先輩知己、其他數々の人々にも言語に絶した御厚情を頂いた。

キリストの教へに「與ふる者は幸なり」といふ言葉があるが、この時の私の心境は「受くるものは幸なり」といふあべこべの感激に満ちてゐた。

私はいつも自力／＼で生きて來た。自分の力以外に頼むものはないといふ信念で人生を闘つて來たのであつた。受ける有難さに浸つたのはこの時が初めてと云つてよかつた。この心境は今までにかつて経験した事のない、しん／＼と湧き出づる豊かな感激であつて、この時ほど人の眞情を有難いと思つた事はなかつた。之は全く物質で計られぬ心の問題である。

人はやつぱり受けなければならぬものだと感じた。そして私はこの恩を幾十倍にして何らかの形で社會にお返ししやう。否、渾心の力をふり絞つて教育報國へ精進しやうと誓つたのであつた。

同行の中野女史も私同様の感激を語るのであつた。

殊に女史の學校の老校長松下專吉先生は東京市教育界の大先輩と仰がるゝ徳望高き大人物であつたので、旅行と決してからは、自分の洋行中の經驗を通して赤子を導く如く様々の事を教へられたさうである。生水を呑んではいかぬ、寝冷せぬ様、御飯はよく嚙んで喰べよ、費用が足りない様なら心配せず電報で知らせよ等々、傳へきく私でさへ涙を催す様な部下を思ふ親身の愛情である。女史はいつも泣いて話してゐた。與へられるものには百倍にして報ひたいといふのが人情である。さうなれば「與へる者は幸なり」といふ言葉が生きる譯である。私はいつも「あなたは温室の花だ」と半ば羨み、半ばゝからかひつゝも大校長の面影を絶えずしので敬慕してゐた。乗船してからも女史の手には時々學校から安否を訪ねる無電が這入つた。この偉大な大校長も今は已に無き數に入られた。女史も今は嘸や、感無量のものが多い事であらう。

團長ガンドレット恆子女史は已に先發され小泉郁子女史(今の清水夫人)と共に眞夏の七月二十六日大洋丸の乗客として横濱埠頭に榮えある鹿島立ちをしたのであつた。埠頭には先輩知己其他各方面の方々が傳へ聞いて賑やかな見送りをして下さつた。今でも時々あの時

私の人生のクライマックスであつた様に思はれてならぬ。

以下二項に分つて旅程の足取りに諸感を加へた梗概と、加州の學校見學記とを摘録することにする。

旅行の足跡

船出

大洋丸で横濱を船出したのは七月二十六日であつた。奏樂の音が流れ渡つていよいよ船が岸壁を離れ握つてゐるテープが一つ二つと切れて感激の渦から次第に遠ざかつて行く時の感じは嬉しい様な悲しい様な何ともいひ様のない氣もちであつた。

眼ぞこに残る面影なつかしみ、テープの端をにぎりて立てり

之れはいよいよ船が岸壁を離れきつてなつかしい見送りの人々の影が、すっかり見えなくなつた時の心もちを歌つたものである。

陸も山も見えずなり行つたそがれの、デツキに立てば涙ぐまるゝ

なつかしの故國日本の土地が視界からすつかり消えて行かうとする時又感無量のものがあつた。

船 中

始めの中は少し氣もちが悪く、三日位は食堂にも出られなかつたが、慣れて見ると何でもなくなつた。

海と空眺めつくせし今日も又、雲の行方に波の音をきく

かうして毎日く／＼渺茫と打ち続く海と空ばかり見ての船路にも、船の上は又格別浮世離れのした楽しさがあつて、船客達とお友達になつてよく遊んだ。

國境のけじめを知らぬ語らひよ、美しの花洋上に咲く

布 哇 着

布哇についたのは八月四日であつたが、海岸に生えてゐるココヤシの木を見た時は、何だか自分がおとぎの國か夢の國に來た様な氣もちであつた。

うつゝなる心地こそすれ名にきゝし、洋上の島をまのあたり見る

ハワイは空がからりとほれてゐて山の色も水の色も大そうきれいで、上陸するとすつきりしたきもちのよい町が私達の眼に入つた。道がきれいで青芝の中にこじんまりした形のよい洋式の家が立つてゐて、目のさめる様な眞赤な美しい花が咲きみだれてゐた。ボンシヤナといふ花だといふ事である。

赤に黄に花咲き匂ひ常夏の、名にふさはしきホノル、の町

花の種類は非常に多く、ハイビスカスといふ花だけでも千數百種あるとは何と驚くではないか、其他色取々の花の色に常春常夏の國の感があつた。全市を行くに總て公園の中にある様な心地がする。

會 議

會議は八月八日から始まつたが、毎日出席した代表の數は八十名位であつた。其外に名譽代表などといふものもあつた。

太平洋を取りまく十一ヶ國の婦人が集まつて、國際親善の促進、人類幸福の増進に資せんとするを目的とする會議であるので、取扱はれた問題は國際社會教育衛生經濟家庭といつた

各部門に別れ各種の方面から取扱はれ、私達教育者としても非常に考へさせられたり教へられたりした事が大變多かつた。

會場の気分はほんとうになごやかなもので、國際親善はこゝからといふ氣もちがした。滿洲事變聯盟退等の後であつたから、日本の立場については相當疑惑の眼をむける事と思ひ、いろ／＼質問されたり、なじられたりする様な事がありはせぬかと話し會つて居たが、そんな事は何のそぶりにも見る事は出来なかつた。

鳥めぐり

代表全部が自動車を仕立て、鳥めぐりの催しがあつた。道中兵營を見學したが、中には活動寫眞館や、ダンスホール、ゴルフ場野球場など設備してあつて、贅澤極まつた文化生活を營んで居る。町を歩けばよく若い婦人と散歩してゐる兵隊達を見かけた。兵隊は皆月給取りであるから、その位待遇しなければなりがないのださうである。他系統のものは兵隊に採用することなく、皆米本土から來るのださうである。日本で見る汗だく／＼のカーキ色姿の兵隊に比べて、何といふ幸福な兵隊であらうと思つたが、いざ戦争といふ時の事を思ふと、

とても日本の敵でないといふ氣がして意を強くするものがあつた。

眞珠灣といふところも通つたが、そこには米國が太平洋の軍備をこゝに集注し、全力をつくしてゐるといふ事をきいた。労働者でも日本人だけ入れないといふ事である。

何にしる布哇には日本系のもが十六七萬人ゐるとの事で、全人口の過半を占めて、而かも年々一萬人位人口が増加して居るので、米國として見れば日系人の將來には非常に脅威を感じてゐるのである。それで布哇は面積からいつても、人口から見ても、當然獨立した洲制がしかるべきださうであるが、中々之れを實施しない。といふのは洲となれば大統領や洲知事等の選舉權が賦與される事になる。さうなれば過半數を占める日系人によつて大勢が決せらるゝ結果に到るからであるとの話である。

又其道中に不良少年を收容する感化院があつたが、日系人が一番少ないとの事で、日系のものが道徳的に非常に優秀であるといふことは、其後加洲に渡つてきいた少年審判所に現はるゝ日系人の非常に少數なる事と併せて米領の定評となつてゐるところであつた。非常によろこばしいことである。

職業界の日本人

日系人達は非常にたちがよいといつて職業界にも大變よろこばれて居る。白人の上流の家庭などによくお茶に呼ばれて行つたが、女中は大方日本の女性であつた。而かも日本の浴衣に褌がけといつたいでたちである。白人達は大變日本服が好きで非常に讚美して居る。そんな譯で日本服を着てゐないものは雇はないといふ事であつた。

私達の宿所となつて居たプレザントンホテルは白人の經營であつたが、食堂のボーイも女中も殆んど日本人であつた。大變私達をなつかしがつて親切にしてくれた。

けれども公職や會社銀行等は今のところ絶望といつた形である。日本人は母國を慕ふ心が強くいつも歸る事ばかり考へ、又故國に送金する風が多く、本腰になつてかゝらない爲、今尙大資本家が出ない。又共同して事をなすといふ風に缺けてゐるため、經營者側に立つものが少なく、勢い後進の就職上にも、さうした方面が非常に不利となつて居る。それは誠に残念に思つた。

而し日系人は頭もよく、道德的にもすぐれ、職業人としての性能も優秀で、而かも人口が

非常に増加しつゝあるのであるから、近き將來には其勢力は充分發揮し得るものと思つた。

二世の教育

二世の教育には未だ一定の見が出来てゐない様に思つた。甚だしく米國流の民主主義自由主義の教育をきらつて、あくまで日本流の忠君愛國と家族制度に基づく教育を徹底的にやつて行かうと考へるものがあるかと思ふと、一方日系人の米化主義を唱へる人もあるといふ有様である。

滿洲事變と二世

今までの二世は日本に對する理解がなく、ごくつまらぬ國といつた氣もちをもつてゐたさうであるが、滿洲事變が起つて、日本が堂々と己れの主張を斷行し、聯盟を脱退して滿洲國の獨立を宣言してから、急に日本の偉大さを知り、自分達が日系人たる事を誇りとする様になり、日本研究日本見學といふ事を盛んに行ふ様になり、又子供を故國に送つて教育する風なども多くなつたといふ事である。

あちらには日本人學校といふのがあつて、二世達は放課後一時間づゝ日本語を此學校で

學ぶ様になつてゐるが、言葉を通して精神教育も行はれて居る。

生活状態

暮しは大變樂で氣候も年中六十度から九十度といふのであるから、着物は一年を通して三四枚もあれば間に合ふ。地味肥沃で産業が發達して居るので、不景氣風も日本などで見る様な深刻さが無いから、就職難や失業問題も當地では大した問題ではない。従つてひどく生活に困る様なものは見受けなかつた。

故國を慕ふ人々

而し此地にある人々は、常に故國をなつかしみ慕つてゐて、私達にも大變親切にして下さつた。中には二十年も三十年も日本に歸らぬといふ人があるが、骨だけは日本に埋めたいなどいはれるのをきいて眼頭が熱くなつた。

骨だけは故山にといふ年老いし、人の言葉にふと涙しぬ

ワイパフといふ砂糖の産地がある。そこには日本人が澤山居る。一夜講演に頼まれて會場に行くと、暑い眞夏の夜を會場には何百人といふ老若男女があふれるばかり集つて居た。日

本人のお話ときいてなつかしむ思ひで集まつて來た様に思はれた。

我が妾見つゝ日の本戀ふ如き、瞳を見つゝ講演す我れは

米領の教育

米領は大てい公立小學校八年、ハイスクール四年併せて十二年が義務教育になつて居て、其間は無月謝で而かも教科書は貸與されるので、樂に學問が出来る。又入學難や試験地獄がないので眞の教育が出来てゐる様に思はれた。ハイスクールになると基礎になる二三科目を除く外は、皆選擇科目になつてゐて、將來自分の向はんとする方針によつて之れを自由に選擇して行くのださうである。

學生の勞働生活

又布哇では非常に勞働が神聖視されて居て、何の職業だから卑しいなどいふ觀念は少しもない。従つて學生でも餘暇を利用しては、パインナップル工場其他に勞働して、一年中の學費を稼いで居る。そして又此間に充分職業の實習をすることも出来、一舉兩得である。

第二世の長所

二世は中々キビ／＼してゐて、活潑で朗らかで氣持のよいところがある。私達の雇つてゐた人は、二十二歳の若い女性であつたが、中々役に立つてほんたうに感心してしまつた。土産物をこれ／＼買ひたいのだがなご云ふと、あちこちのお店に電話でかけ合つて比較研究し、よささうなお店に私達を案内してくれるといつた有様であつた。

加州にて

秩父丸で米本土に渡り、加州の方面を少し見た。き／＼にまさる廣大な土地であると思つた。それもその筈加州だけで日本全土の面積があるとの事である。ところが人口は東京市に等しいといふ事であるから、サンフランシスコや、ロスアンゼルスのような繁華な市を歩いてゐても、人がうよ／＼ゐて困るといつた感じはなくてのんびりしてゐた。

加州に於ける日本人

加州にも日本人が十萬人位ゐるといふ事であるが、日系人は非常に野菜作りですぐれた技術をもつてゐて、野菜や花卉果實等の栽培や取引等總て日本人の掌中に左右せられてゐるといつてよい位である。ロスアンゼルスで大變大規模な野菜市場を見たが、こゝでは日本人が

白人を使つてやつてゐる。

加州の排日

今日では加州には殆んど排日といつた氣分はないとの事であつた。日系人は總て獨立して農業を營んでゐるので、労働者の敵でなくなつたからだといふ事である。米でいふ排日は私達の想像してゐた政治的意味のものは殆んどなく、労働問題に屬するものが多い様である。今日猛烈に行はれてゐるアリゾナ州の排日の如きも、労働上の排斥であるときいた。

ロングビーチ

ロングビーチ一帯の地方から出る石油の生産には、全く眼玉をぬかれた。油を汲み出す槽の林立、タンクの數、形容の言葉がない。槽一本立てるのに二十五萬弗かゝるといふ事であつたが、無盡藏なる富の埋藏を思ひ全く羨みたくなつた。

不景氣對策

不景氣に對する對策は随分講ぜられてゐる様であつた。失業者救済には多額の豫算を計上し、又ガソリン一ガロンから四錢の税金を取り、道路の改修其他土木事業を盛んに行つてゐる

た。

なほ積極策としては、ル大統領の發案ときくがNRAといふ法律を作つて、産業の發達を計つて居る。之れは國家不況を回復する道德律といふ事ださうであるが、一般原理としては、勞働を均霑せしむることによつて、一般民衆の購買力を盛んにし、産業の發達を計つて國家の不況を回復し様といふ譯ださうである。各同業者間にNRAに基づく規約を作り、それに基つて職業が營まれて行く譯なのであるが、相當よい成績を見てゐる様である。

大學教授の街頭進出

又大學の先生方は、日本の様に象牙の塔に立てこもり、學理の研究と學生の指導に當るだけでなく、盛んに街頭に進出して一般人の相談に應じ、國家産業の指導啓發につくして居る。

大學にはそれだけの豫算があつて、一般人は何等の費用を要せずして専門家の指導を受け、非常に便利であるとの事。どん底にあへく日本の農村、早害冷害の凶作地の慘狀食料問題に行き悩む我國狀等を思ふ時、日本の爲政者等も今少しかうした方面に活眼を開くべきではな

からうか。

終りに

廣い土地にのんびりした氣もちで、大手をふつて歩いてゐるといつた氣分の米國を去つて、一度故國の土をふむ、いやにせよこましいさつたうの騒音に窮屈ないらだたしい思ひのする様な感じがする。

只漠然とせまるものない様な生活が、彼の地の生活であるならば、非常時氣分に全國民が緊張して、油断もすきもない日本である事を感じる。

その上關西地方の風水害、次いで東北地方の冷害凶作と、何といちめぬかれる日本である事よ。けれど總てを試練の鞭と心得て、如何なる困苦缺乏にも屈せずして、立ち上り行く日本人のガンバリが、大和民族の眞の姿である様に思はれる。天意の存する處かも知れない。

(昭和九一二二稿)

米國の小學校を見る

實驗的教育法——一學級二十人

布哇滯在中にも、米領の公立小學校を是非見たいものと心に願つてゐたが、何にしる休暇中な爲目的を果すことが出来なかつた。米本土に渡つて、サンフランシスコに来て見ると、幸ひ學校が始まつてゐるとの事、而し充分時間を持たぬ急ぎの旅であるので、一寸覗いて見たいといふ程度に過ぎぬが、參觀して眼にふれたこと、きいた事、感じた事を少しばかり摘録して見よう。

私の見學した學校は師範大學附屬小學校で、かつてパーカスト女史がダルトンプランの教育法を創め、其後ウォツシュバーン氏が實驗心理學の立場に立つて、實驗的教育法を実施して有名になつた學校で、一名實驗學校と稱へられてゐる。

一學級の兒童數は二十人以下で、それに二人の教生がついてゐるが、きくところによると、訓導は四五學級に一人の割だといふことである。この日は會議とやらで、訓導は一人も見え

なかつた。尤もこちらでは教生といつても、立派な師範大學の最上級生なのである。一寸こゝで附け加へておきたいことは、亞米利加では小學校の教師は、師範大學の卒業生であつて、それも教育學を修めなかつたものは、先生の資格がないといふ事だ。而かも面白いと思ふことは、男の先生といふのはほんの稀であつて、殆んど女先生であることだ。日本などではやつと男子の爲には師範大學が出来たが、女子の入學を許さぬので問題になつてゐる位だが、「處變れば品變る」の例への如く、かうも事情が異なるものかとおつづく感じがせられた。

義務教育十二年——動物の實地研究

この學校では、五年生迄は學級教授をやるが、六年以上七年八年となると、皆各科別に自分の實力に相應したところで勉強することになつてゐるので、己れの得意とする學科を充分に伸ばすことも出来、又實力あるものはどしどし進級して行けることになつてゐる。一寸こゝで附言したいことは、一學年度が前期後期となつてゐて、半年毎に進級する組織である。(米領全體がさうである) さうして義務教育は十八歳迄で、小學校八年、ハイスクール四年、合せて十二年間が義務教育である。(洲によつて殆んど法律が獨立してゐるので、全體はさう

ではないが加洲は右の通りである。)

一年生の教室をのぞいて見た。兒童の行儀は非常に悪い。管理や訓練の方でよいしつけとか、注意の喚起などいふ事に殆んど無關心ではないかと思はれる位である。兒童達は横を向いてゐるものがあり、後ろを向いてゐるものがあり、玩具を弄んでゐるものもあるといった有様であるが、先生はそれ等には全く無頓着といった形で、自分でしゃべりたい事をしゃべりやりたい事をやつてゐる。

先生はヤモリをもつて来て、それを子供達に一々いじらせ様としてゐる。子供達は始めはこはごは手にするものもあるが、或ものは全然手にし様としないものもある。私は之を見てゐる間に「成るほど實驗學校といふのは、かういふ風に實物にふれて之に親しんで行く間に、充分に物の本質を見極めさせて行き、其中から、又種々の發見をもさせて行かうとするのだな」と思つた。而し教授そのものはさう上手ではなかつた。折角ヤモリをもつて来て、一寸ふれさせただけで其生活状態などを充分觀察させて見るでもなく、教授は他の仕事に移つてしまつた。

進歩した唱歌——問答式教科書

次は唱歌の時間だといふ譯でどの教室をのぞいても、總て唱歌であつた。この唱歌教授には全然樂器を用ひない。先生はどの先生も中々上手でいゝ聲で唱つてゐる。兒童も亦よく歌ふ。非常に樂譜がよく讀める。歌ひ出しには先生がハーモニカを以て最初の音を示すと、兒童は樂譜を見て其あとをよく歌つて行く。時に指名されて獨りで歌はされても、さらりと歌つてのけるといふ有様で中々實力をもつてゐる。この國では音樂が家庭に普及してゐて、生れ落ちるときから總ての人々は音樂的性能が育てられてゐる爲、自然そこによい教師もあり、又よき兒童もある譯である。又日本の唱歌教授に見る様な、教師とのあとをつけて唱ふとか、樂器につけて唱ふといふ様な、機械的記憶によるものでないだけに、樂譜を讀む力が充分に養はれて行くのではないかと感じた。

次に上級生の歴史教授を見たが、教科書は總て問答式になつてゐる。二十人足らずの兒童が二組に分れて、一兒は前方に立つて質問し、之れに答へ、お互が自分の研究した事をそれ／＼述べ合つてゐた。即ち學習は總て討議式になつてゐるのだが、それはごくしんみりした

もので、お互が自分こそといった様に、がやがやさはいで揚足取合をするといったものではない。児童はよく内容を研究して來てゐるので、先生は單に監督者といった形に見えた。こゝで又一言附言したい事は、この國では非常に歴史地理が尊重せられ、殊に國史には重きがおかれてゐる様だ。日本でやつてゐる修身科はないが、市民の權利義務に關することゝ、歴史地理とは密接不離のものとして取扱はれ、公民教育として重要視されてゐる。

完備した圖書館——學校教育の補助

この學校には實に完備してゐるといひたい位の圖書館が附設してあつて、そこには専門家の女先生がつめてゐる。この人は中々圖書館事務を研究し、館内の本の内容を殆んど讀破し、内容に精進してゐて、何々の討議に必要な内容は、何々書の何處にあるといふ事を認めたカードを拵へてゐた。これはこの先生の非常に自慢の様であつた。さうして學級受持の先生は、児童に「何々の討議がさせたいから必要な本を貸してやつてくれ」と認めたカードを持たせてやると、圖書館の先生がそれに必要な本を貸してやるのである。見てゐる間にも幾人かの児童達が本をもつて、取りかへに來てゐるものもあれば、カードをもつて借りに來て

居るものもあつた。又靜かに館内で讀書してゐるものもある。見てゐる中に、私は實に羨ましいと思つた。これでこそこの學校教育が出來てゐるのだと思つた。日本の様に讀ませる本の設備もなく、讀む本もろく／＼ないのに、「口をすくして研究して來い」とどう叫んで見たとて、たうてい良績のあがり様はない。こんな完備した設備と立派な指導者に恵まれてゐる、この國の児童達の幸福さを思つた。日本も何とかならぬものかと思はせらるゝと共に、又我等に圖書館の利用といふ觀念の乏しき事も恥ぢなければならぬと思つた。處々の公設圖書館等をものぞき、館員との聯絡を圖つたら、今少し有効にむだのない勉強をさせる事が出来るではなからうか。金のない設備の乏しい國はそれだけの努力を拂ふ覺悟が必要であると思つた。

一學級の児童數——學校專任衛生婦

今少し考へたい事は、児童の人數である。日本の様な六十人七十人といふ多數のものをつめ込んで、いかにしんみりした學習を要求して見ても、むりであるのが當然である。二十人以下などは望まれない事であらうが、教育價値の立場から、今少し一學級の適當數につい

て研究する必要があり、又考慮すべき點がある。他の公立學校は四十人位との話であつた。日本でもその程度の人數で教育が出来たらとつくづく思はせられた。

衛生設備も中々完備したものである。日本でも衛生方面では、近來中々よく研究もされ、実績もあがつてゐる學校も見受けるし、又東京市其他大都市では、各學校専任の衛生婦がおかれ、囑託の醫師もあるが、こゝでは専任の女のお醫者がゐて、熱心に研究し、熱心に衛生事務に當つてゐる。殊に種痘とチフテリア注射は、年に二回精細に調べて、もし必要あるものは親に充分注意するとの事である。又其他の健康状態についても充分に注意し、必要に應じて親を呼び相談をする。又虛弱兒には肝油を吞ませたり、又適當な榮養物などを補給して其健康法をはかつてゐる。

布哇の二世教育——學校數百六十校

布哇は米政府の支配下にある公立學校の外に、我が日系子弟の爲めに設けられた日本語學校があつて、日系子弟の多くは放課後一時間を此學校に來て重に日本語を學んでゐる。

日本語學校は紀元一八九六年(明治廿九年)奥村牧師によつて創設されたものだが、今日で

は、布哇全島の邦語學校數百六十校に及び内四十校は宗教附屬のもの(主に本願寺)を除けば他は皆獨立してゐる。

此學校が創設された動機は、第二世が公立學校のみで教育さるゝ爲、次第に日本語を解することが出來ず、父母との間に意志感情の疏通を缺き、ために甚だ困却する有様で、契約移民で來た人々は本腰になつて、此地に働くことが出來ず、仕事半ばでも子女教育の爲日本に歸らねばならぬといふ有様であつたので、此不便を救ふ目的であつたとの事だが、其後此の學校で日本主義の忠君愛國の精神教育を行ふむきもあり、米國の民主主義の教育と相容れざるものがあるといふので、一時日本人學校は米政府の管轄に移され、日本人學校の教師となるには、英語が出來なほ民主主義、自由主義の教育理想と米國の歴史を解し得るものでなければならぬといふ事になり、試験にパスしなければ教師となる資格がなかつたのであるが、其後日本人の間に非常な反對の聲が起り、「外國語學校の存在を認めぬといふ憲法はない」といふ理由のもとに新聞社が先頭に立ち、米政府を相手取つて訴訟を起したところ、遂に米政府の敗訴となり、再び學校は日本人の手に歸する事となり、今日に及んでゐるが、布哇に於

ける第二世の教育を如何にすべきかといふことは日本人の間に實際問題として今日なほ困難を感じてゐる。

米化か日本式か——不統一教育方針

或者は日本市民將來の發展上、教育の米化を稱へ、或者は如何に日本人が米化式教育を行つても、到底白人同様の待遇を受くることは困難であるのみならず、第一世として見れば、米化主義の教育はどうしても己れの教育主張と相容れぬものが生じ、又新舊思想の衝突を免れぬ有様に、寧ろ日本式の教育を行ふが得策といふ風で、未だ全島を統一した第二世の教育方針といつた様なものゝ確立したものがないのは遺憾に思つた。

私の考へを以てすれば、米領にあつて將來米國市民として活動せんとするものに、純日本主義の教育を施し、純日本國民としての人格に仕立て上げんとする事は非常な了見違ひであり、又試みて徒勞に終る事であると思ふ。而し又一方他國に比なき日本精神の美點長所を無視した米國式の教育をなさんとするも、また片手落ちの教育といふべきである様に思へる。日本民族が先天的にもつ素質的な優秀性を大いに助長教養し、更に米國民のもつ優秀なる徳

性を陶冶して、東西兩洋の長所を併せもつ優れた人物に仕立上げて行くところに、第二世教育の主眼點を置いて、充分研究されたと願つてゐる次第である。

日本人の優秀性——助長發揮させよ

きくところによると、日系人は非常に道徳的にすぐれてゐるといふことであつて、此地に不良兒の感化院があるが、こゝに現はるゝ不良兒は、日本人が最も少ないとの事で、大會中オワフ島の島巡りをした時、自動車を選轉して私達を乗せて下さつたドクターキヤツス女史が其建物を指さし乍ら、その事を説明して下さつたので、同乗の私達は非常に嬉しく又大いに面目を施したのであつた。之れを以てしても、日本人が如何に道徳的にすぐれた國民であるかを思はせらるゝと同時に此地に於ける日本人學校の精神的教化の如何に甚大であるかを考へさせられた。三世四世と代を遠ざかるに従つてかうした日系人の美點が失はれず、永久に其美を發揮出来ることを祈る次第である。

なほ此地の職業界にある日本人の非常に喜ばれてゐる徳性は、正直、勤勉、清潔、手先の器用、忍耐、責任感等であるといふことである。かうした日本人が特にもつ優秀性を二世、

三世は愚か子々孫々に傳へる様教育されることを希つてやまぬ次第である。

短所は狹量嫉視——歸國教育の是非

なほ又かうした美點の外に「日系人は甚だ狹量で、お互が嫉視反目し、共同心を缺く」とは同地在住の方々の歎聲であつた。之等の點では大いに我等日布同胞の反省すべきところである。殊に異郷にあつて、大いに日系人として氣を吐かんとする此地の人々の反省に價するものであつて、之等の點では又米國教育の中に大いに學ぶところが多いのではなからうか。

米國式の教育を受けた爲に、子供が非常に我がまゝになり、親を蔑視し、其命に服せず、又禮儀に缺くところが多い云々等の理由で、近頃では子供を日本に歸して教育する風が非常に多く、又時には母親に子供を伴はせて歸國させるむきもある様である。之れは果して如何のものであらうか。將來日本に於て活動する人たらしむるならいざ知らず、あくまでこの地を活動の舞臺として立たんとするものであるならば、やはりその地にあつて薰陶よろしきを得、其地に順應し得る人たらしむる事が大切なことであると思ふ。米國式教育を受けた人の中にも、立派な人格者を見るのであるから、日本人學校や家庭教育に於て充分注意を拂

つたら、決して其惡風のみを受けるといふ心配はないではなからうか。中には「子供を長く親から離してゐた爲、親子の情に非常な疏隔が出来、恰も里子にやつた場合と同様の結果を見るに至つた」と泣いてゐられる方もあり、又妻子に離れて淋しく異郷に暮してゐられる氣の毒な方もある。これほどの大きな犠牲を拂つてまでも、純日本主義の教育を施す必要ありや、なしや、識者の判斷にまかせるとしやう。

夫婦で學校教師——成績の良い教育

加州には滞在日數が少なかつたので、日本人學校に對する數字的な調査をなす暇をもたなかつたが、公立學校の外に日本人學校があつて、二世の言語教育や、精神教育をなしてゐることは布哇と同様であるが、多くは宗教關係の經營にかゝるものでなく、大方は其地方地方の日本人達の共同經營によるものであつて、之れが學校かと思はれる位お粗末なものの中にはある。大方は夫婦で一學校の教師となつてゐる。只一つロスアンゼルスに近いキャンプトンにキャンプトン學園といふがあるが、之は遠藤幸四郎氏夫妻の苦心經營による個人所有にかゝるもので、校舍設備等中々よく整ひ、非常に異彩を放つてゐる。遠藤夫人はかつて十年

位本郷小學校に教鞭を取り、令名あつた人である。同氏夫妻は第二世の教育に確固たる理念をもち、其教導にいそしんでゐられるので、父兄の信用も加はり、大いに其成績も見るべきものがある。

光榮の金門學園——特色ある教育法

又桑港で非常に有名な學校は金門學園である。嘗て高松宮兩殿下歐米御漫遊の際、親しく此學校に御臺臨あそばされ、第二世の勉學ぶりをみそなはせ給ふたといふ光榮の學校であるが、此度は又賀陽宮兩殿下桑港御訪問に際し、又々御臺臨の榮を賜はつた。それから又アメリカ學事視察者にして、此學校を訪れぬものはないといはれる位である。園長を鈴木孝志氏といふ。私達は宮様御臺臨の當日を加へて前後二回此學校を訪れ、氏の第二世教育に對する豊富な意見をきかせて頂き、又二世達の勉學ぶりをも見せて頂いた。

氏の二世教育に對する御意見は、日本語教育の實績を擧ぐると共に、讀物を通して祖國日本の學術、藝術、宗教、道德、歴史等世界に優越した特質と、尊嚴とを充分理解せしめ、如何に我等の祖國が他國にすぐれた立派な國であるかを悟らしめ、同時に吾等はその血統につ

ながる日系市民である。吾等の血脈の中には世界何處の國民にもひけを取らぬ優越性がある。之れ等の力を米國市民として大いに發揮しなければならぬと、いふ意氣を鼓舞し、常に優秀な祖國日本をバックとして恥かしからぬ米國市民たんとする強い信念の上に、力強く立たしめ様と努力してゐる。と語られた。なほ言葉をついで、ニグロ族などが非常に犯罪者が多く、破廉恥的な行爲をなし、恬として恥ぢないのは、己れに尊い祖國のバックがないからである。日系市民が三世四世の後、全く祖國日本のバックを失ふに至つたら、ニグロ同様の運命に陥るものと思はなければならぬ。日本人學校の使命はこゝにあると自分はさう考へてゐると述べられた。私は其透徹した理論と信念に對して、充分共鳴を感じ、こゝに初めて眞の第二世教育者を發見した心地がした。なほ又日本語の教授には僅か一日一時間の教授に、充分の實績を擧ぐる爲の工夫と準備を怠らず、よく其能力を調査し、個別的取扱ひによつて實力を養つてゐられるので、成績の見るべきものが非常に多く、賀陽宮兩殿下お成りの際、御前に流暢な日本語で「東洋の盟主日本」と題する演説をお聞きに入れた男學生もあれば、實に美しき假名文字で、奈良の都の歌詞を板書してお目にかけた女學生もあつた。又奈

良の都の齊唱も非常に好成绩であつた。其他にもよき日本人學校がある事はきいてゐたが、餘暇なきまゝに參觀が出来なかつた。

海外に伸び實れ——日本人種の種子

海外に於ける二世の教育が、かうした力強い教育者の手に委ねられて、立派に生ひ立つて行きつゝある事は實に愉快な事である。かうして各地にまかれた優秀な日本人種の種子が、異郷の空に大きな實りを見せる事であらう。

此地でも二世が道徳的に優秀で、犯罪者の少い事をきいた。之も日本人學校の教化よるしきを得てゐるに負ふところ多きと、家庭教育でも日本人は道徳的によく導いてゐるとの事である。なほ遺憾に堪へない事は、共同心乏しく、嫉妬深い事を耳にした。島國根性的狹量を捨て、大國民の度量を培ひ育て、將來立派な英才をこの地に輩出させたいものと思ふ次第である。

女教師の地位を歎ず

渺茫として際涯なき太平洋を地圖で見るのでなく、實際に之れを己れの視野の中に入れ乍ら船で渡り切るその事だけでも私の心を大きく廣やかな又豊かなものに育てゝくれた。

その上十一ヶ國の婦人代表に相伍して、太平洋の親善を議し又世界平和を將來せしむるの方策を考究する等、國際間の重大問題に直面し、又米大陸に渡つて大規模な種々の生活面にふれ、學校教育に於ける女教師が高く又牢固たる地位待遇、その中に培はれつゝある實力等を見聞した私の心は自ら延び／＼と餘裕のあるものとなり又女教師としての新たなる抱負も力も培はれた様に思へた。

それにつけても、今度この代表たる事をむりにも承諾させられた事がどんなに幸であつたかといふ事をしみ／＼と感ずるにつけて、花木女史や讀賣の記者に感謝を捧げずにはゐられなかつた。人間には折々幸運のチャンスが興へられる。それをガツチリをつかみ得るか否かによつて人の幸不幸又は人間大成の上に大きな開きが生ずるのである。積極性の乏しい私は一步のところでのチャンスにがしてしまふところであつた。

だがいよ／＼歸朝して懐かしい故山の風物に接し、いよ／＼この新たに培はれた力を、教

育へ教壇へと、大きな抱負と感激と光明とに充たされつゝ立ち上らうとした時、經濟界の不況に影響されて我が教育界が女教師を遇するものは餘りにもみじめで苛酷極まるものであつた。

相當年配の女教師からあらゆるものを取り上げてしまひ、生命の泉をも枯らしてしまふ様な陰惨で憂鬱な氣流がおそひつゝあつた。

「質の如何を問はず何歳以上の女教師は全部退職せよ」といふことで、女教師の地位は絶へずおびやかされなければならなくなつた。その年齢は四十以上となつたり、四十五以上となつたり、五十以上となつたり時によつて變化があつた。

その圏内にある女教師は次々と屠所に引かるる小羊の様に校長や上司の前に引き出されて、首の問題についてのいやな相談を受けなければならなかつた。

その壓迫に堪へきれなくなつた人々は次々と教育界から退いて行つたが、女教師がこの難關を突破する爲に残された二つの方法があつた。その一つは、自己の意志力と教育報國の強き信念により忍の一字で上司の前がらばるといふ事である。而しそれはよほど堅固な信念

の持ち主によつてなされ得る事で容易な業ではないのであるが、而しそれをもよくやり通した勇敢な女教師も現はれた。今一つの方法は政治的な有力者に泣きついてその力を籍り、首つなぎの運動をやつてこの難をのがれるといふ行き方である。かつてはいとも純真で何事も知らずに過して來た女教師達は、こんな術策まで覺えて東奔西走するといふ有様で、思へば忌はしき限りであるが、時の勢として又やむなき事であつた。

今日まで教壇に生き、いとしの教へ子を掬育し、死も又辭せざる純情の女教師達は、青白い表情に生氣は消え、薄氷を踏むの思ひで日々を過さねばならなかつたのである。そして吾々の仲間が寄るとさはると憂鬱な首問題で持ち切りであつた。

元より私もその圏内にあつたのだが、幸それほど悲痛な現實に曝されないので今日まで生き延びて來たのである。而しそれは表面上の事で心中堪へ難き痛憤を感じた事は幾度あつたか、或はこんな事を言つた人があつた。

「あなたは已に勳八等も頂戴し、外國にも行つて來て所謂功成り名遂げたのであるから勇退しても惜しい事はあるまい」と。